

斜陽

太宰治

青空文庫

一

朝、食堂でスープを一さじ、すつと吸ってお母さまが、

「あ」

と幽かな叫び声をお挙げになった。

「髪の毛？」

スープに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

「いいえ」

お母さまは、何事も無かったように、またひらりと一さじ、スープをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スープを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。ヒラリ、という形容は、お母さまの場合、決して誇張では無い。婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などは、てんでまるで、違つていらつしやる。弟の直治なおいしがいつか、お酒を飲みながら、姉の私に向つてこう言つた事がある。

「爵位しやくいがあるから、貴族だというわけにはいかないんだぜ。爵位しやくいが無くても、天爵てんしやくというものを持つている立派な貴族のひともあるし、おれたちのように爵位しやくいだけは持つていても、貴族どころか、賤民せんみんにちかひのものもある。岩島なんてのは（と直治の学友の伯爵のお名前を挙げて）あんなのは、まったく、新宿の遊廓ゆうかくの客引き番頭ばんとうよりも、もつとげびてる感じじゃねえか。こないだも、柳井やない（と、やはり弟の学友で、子爵の御次男のかたのお名前を挙げて）の兄貴の結婚式に、あんちきしよう、タキシイドなんか着て、なんだつてまた、タキシイドなんかを着て来る必要があるんだ、それはまあいいとして、テールブルスピーチの時に、あの野郎、ゴザイマスルという不可思議な言葉をつかったのには、げつとなつた。気取るといふ事は、上品という事と、ぜんぜん無関係なあさましい虚勢だ。高等御下宿おんげと書いてある看板が本郷あたりによくあつたものだけれども、じつさい華族なんてものの大部分は、高等御乞食おんごしきとでもいったようなものなんだ。しんの貴族は、あんな岩島みたいな下手な気取りかたなんか、しやしないよ。おれたちの一族でも、ほんものの貴族は、まあ、ママくらいのもだろう。あれは、ほんものだよ。かなわねえところがある」

スープのいただきかたにしても、私たちなら、お皿さしらの上にすこしうつむき、そうしてスプーンを横よこに持つてスープを掬すくい、スプーンを横よこにしたまま口元に運んでいただくのだけ

れども、お母さまは左手のお指を軽くテーブルの縁ふちにかけて、上体をかがめる事も無く、お顔をしゃんと挙げて、お皿をろくに見もせずスプウンを横にしてさつと掬って、それから、燕つばめのように、とでも形容したいくらいに軽く鮮やかにスプウンをお口と直角になるように持ち運んで、スプウンの尖せんたん端から、スプウンをお唇のあいだに流し込むのである。そうして、無心そうにあちこち傍見わきみなどなさりながら、ひらりひらりと、まるで小さな翼のようにスプウンをあつかい、スプウンを一滴もおこぼしになる事も無いし、吸う音もお皿の音も、ちつともお立てにならぬのだ。それは所謂いわゆる正式礼法にかなったいただき方では無いかも知れないけれども、私の目には、とても可愛かわいらしく、それこそほんものみたいに見える。また、事実、お飲物は、口に流し込むようにしていただいたほうが、不思議なくらいにおいしいものだ。けれども、私は直治の言うような高等御食なのだから、お母さまのようにあんなに軽く無雑作むざうさにスプウンをあやつる事が出来ず、仕方なく、あきらめて、お皿の上につむき、所謂正式礼法どおりの陰気ないただき方をしているのである。

スープに限らず、お母さまの食事のいただき方は、頗すこぶる礼法にはずれている。お肉が出ると、ナイフとフォークで、さつさと全部小さく切りわけてしまって、それからナイフを捨て、フォークを右手に持ちかえ、その一きれ一きれをフォークに刺してゆっくり楽しそうに召

し上がっていらつしやる。また、骨つきのチキンなど、私たちがお皿を鳴らさずに骨から肉を切りはなすのに苦心している時、お母さまは、平気でひよいと指先で骨のところをつまんで持ち上げ、お口で骨と肉をはなして澄ましていらつしやる。そんな野蠻な仕草も、お母さまがなさると、可愛らしいばかりか、へんにエロチックにさえ見えるのだから、さすがにほんものは違ったものである。骨つきのチキンの場合だけでなく、お母さまは、ランチのお菜さいのハムやソーゼージなども、ひよいと指先でつまんで召し上る事さえ時たまある。「おむすびが、どうしておいしいのだから、知っていますか。あれはね、人間の指で握りしめて作るからですよ」

とおつしやつた事もある。

本当に、手でたべたら、おいしいだろうな、と私も思う事があるけれど、私のような高等御乞食が、下手に真似まねしてそれをやったら、それこそほんものの乞食の凶になってしまう。いそうな気もするので我慢している。

弟の直治でさえ、ママにはかなわねえ、と言っているが、つくづく私も、お母さまの真似は困難で、絶望みたいなのをさえ感じる事がある。いつか、西片町のおうちの奥庭で、秋のはじめの月のいい夜であったが、私はお母さまと二人でお池の端のあずまやで、お月

見をして、狐きつねの嫁入りと鼠ねずみの嫁入りとは、お嫁のお支度がどうちがうか、など笑いながら話合っているうちに、お母さまは、つとお立ちになつて、あずまやの傍そばの萩はぎのしげみの奥へおはいりになり、それから、萩の白い花のあいだから、もつとあざやかに白いお顔をお出しになつて、少し笑つて、

「かず子や、お母さまがいま何をなさっているか、あててごらん」

とおつしやつた。

「お花を折つていらつしやる」

と申し上げたら、小さい声を挙げてお笑いになり、

「おしつこよ」

とおつしやつた。

ちつともしやがんでいらつしやらないのには驚いたが、けれども、私などにはとても真似られない、しんから可愛らしい感じがあつた。

けさのスウプの事から、ずいぶん脱線しちゃつたけれど、こないだ或ある本で読んで、ルイ王朝の頃の貴婦人たちは、宮殿のお庭や、それから廊下の隅すみなどで、平気でおしつこをしていたという事を知り、その無心さが、本当に可愛らしく、私のお母さまなども、その

ようなほんものの貴婦人の最後のひとりなのではなからうかと考えた。

さて、けさは、スープを一さじお吸いになって、あ、と小さい声をお挙げになったので、髪の手？ とおたずねすると、いいえ、とお答えになる。

「塩辛かつたかしら」

けさのスープは、こないだアメリカから配給になった罐詰かんづめのグリーンピースを裏ごしして、私がポタージュみたいに作ったもので、もともとお料理には自信が無いので、お母さまに、いいえ、と言われても、なおも、はらはらしてそうたずねた。

「お上手に出来ました」

お母さまは、まじめにそう言い、スープをすまして、それからお海苔のりで包んだおむすびを手でつまんでおあがりになった。

私は小さい時から、朝ごはんがおいしくなく、十時頃にならなければ、おなかですかないので、その時も、スープだけはどうかやりましたけれども、食べるのがたいぎで、おむすびをお皿に載せて、それにお箸はしを突込み、ぐしゃぐしゃにこわして、それから、その一かけらをお箸でつまみ上げ、お母さまがスープを召し上げる時のスプーンみたいに、お箸をお口と直角にして、まるで小鳥に餌えさをやるような工合ぐあいにお口に押し込み、のろのろとい

ただいているうちに、お母さまはもうお食事を全部すましてしまって、そつとお立ちになり、朝日の当っている壁にお背中をもたせかけ、しばらく黙って私のお食事の仕方を見ていらして、

「かず子は、まだ、駄目なのね。朝御飯が一番おいしくなるようにならなければ」とおっしゃった。

「お母さまは？　おいしいの？」

「そりやもう。私は病人じゃないもの」

「かず子だって、病人じゃないわ」

「だめ、だめ」

お母さまは、淋さびしそうに笑って首を振った。

私は五年前に、肺病という事になって、寝込んだ事があったけれども、あれは、わがまま病だったという事を私は知っている。けれども、お母さまのこないだの御病気は、あれこそ本当に心配な、哀かなしい御病気だった。なのに、お母さまは、私の事ばかり心配していらっしやる。

「あ」

と私が言った。

「なに？」

とこんどは、お母さまのほうでたずねる。

顔を見合せ、何か、すっかりわかり合ったものを感じて、うふふと私が笑うと、お母さまも、にっこりお笑いになった。

何か、たまらない恥ずかしい思いに襲われた時に、あの奇妙な、あ、という幽かな叫び声が出るものなのだ。私の胸に、いま出し抜けにふうつと、六年前の私の離婚の時の色があざやかに思い浮んで来て、たまらなくなり、思わず、あ、と言ってしまったのだが、お母さまの場合は、どうなのだろう。まさかお母さまに、私のような恥ずかしい過去があるわけは無し、いや、それとも、何か。

「お母さまも、さつき、何かお思い出しになったのでしょうか？　どんな事？」

「忘れたわ」

「私の事？」

「いいえ」

「直治の事？」

「そう」

と言いかけて、首をかしげ、

「かも知れないわ」

とおっしゃった。

弟の直治は大学の中で召集され、南方の島へ行ったのだが、消息が絶えてしまって、終戦になつても行先が不明で、お母さまは、もう直治には逢あえないと覚悟している、とおっしゃっているけれども、私は、そんな、「覚悟」なんかした事は一度もない、きっと逢えらばかり思っている。

「あきらめてしまつたつもりなんだけど、おいしいスープをいただいて、直治を思つて、たまらなくなつた。もつと、直治に、よくしてやればよかつた」

直治は高等学校にはいつた頃から、いやに文学にこつて、ほとんど不良少年みたいな生活をはじめて、どれだけお母さまに御苦労をかけたか、わからないのだ。それだのにお母さまは、スープを一さじ吸つては直治を思い、あ、とおっしゃる。私はごはんを口に押し込み眼が熱くなつた。

「大丈夫よ。直治は、大丈夫よ。直治みたいな悪漢は、なかなか死ぬものじゃないわよ。」

死ぬひとは、きまつて、おとなしくて、綺麗きれいで、やさしいものだわ。直治なんて、棒でたたいたつて、死にやしない」

お母さまは笑つて、

「それじゃ、かず子さんは早死にのほうかな」

と私をからかう。

「あら、どうして？ 私なんか、悪漢のおデコさんですから、八十歳までは大丈夫よ」

「そうなの？ そんなら、お母さまは、九十歳までは大丈夫ね」

「ええ」

と言いかけて、少し困つた。悪漢は長生きする。綺麗なひとは早く死ぬ。お母さまは、お綺麗だ。けれども、長生きしてもらいたい。私は頗るまごついた。

「意地わるね！」

と言つたら、下唇したくちびるがぷるぷる震えて来て、涙が眼からあふれて落ちた。

藪くさから、蛇へびの話をしようかしら。その四、五日前の午後、近所の子供たちが、お庭の垣かきの竹たけや

子供たちは、

「^{まむし}蝮の卵だ」

と言いつ張つた。私はあの竹藪に蝮が十匹も生れては、うっかりお庭にも降りられないと思つたので、

「焼いちゃおう」

と言うと、子供たちはおどりがつて喜び、私のあとからついて来る。

竹藪の近くに、木の葉や柴^{しば}を積み上げて、それを燃やし、その火の中に卵を一つずつ投げ入れた。卵は、なかなか燃えなかつた。子供たちが、更に木の葉や小枝^{ほのお}を焰の上にかぶせて火勢を強くしても、卵は燃えそうもなかつた。

下の農家の娘さんが、垣根の外から、

「何をしていらつしやるのですか？」

と笑いながらたずねた。

「蝮の卵を燃やしているのです。蝮が出ると、こわいんですもの」

「大きさは、どれくらいですか？」

「うずらの卵くらいで、真白なんです」

「それじゃ、ただの蛇の卵ですわ。蝮の卵じゃないでしょう。生の卵は、なかなか燃えませんよ」

娘さんは、さも可笑しおかそうに笑って、去った。

三十分ばかり火を燃やしていたのだけでも、どうしても卵は燃えないので、子供たちに卵を火の中から拾わせて、梅の木の下に埋めさせ、私は小石を集めて墓標を作ってやった。

「さあ、みんな、拜むのよ」

私がいやがんで合掌すると、子供たちもおとなしく私のうしろにしゃがんで合掌したようであった。そうして子供たちとわかれて、私ひとり石段をゆっくりのぼって来ると、石段の上の、藤ふじ棚だなの蔭かげにお母さまが立っていらして、

「可哀かわいそうな事をするひとね」

とおっしゃった。

「蝮かと思ったら、ただの蛇だったの。けれど、ちゃんと埋葬してやったから、大丈夫」とは言ったものの、こりやお母さまに見られて、まずかったかなと思った。

お母さまは決して迷信家ではないけれども、十年前、お父上おとうじょうが西片町のお家で亡くなら

れてから、蛇をととても恐れていらつしやる。お父上の御臨終の直前に、お母さまが、お父上の枕まくらもと元に細い黒い紐ひもが落ちていているのを見て、何気なく拾おうとなさったら、それが蛇だった。するすると逃げて、廊下に出てそれからどこへ行つたかわからなくなつたが、それを見たのは、お母さまと、和田の叔父さまとお二人きりで、お二人は顔を見合せ、けれども御臨終のお座敷の騒ぎにならぬよう、こらえて黙つていらしたという。私たちも、その場に居合せていたのだが、その蛇の事は、だから、ちつとも知らなかつた。

けれども、そのお父上の亡くなられた日の夕方、お庭の池のはたの、木という木に蛇がのぼつていた事は、私も実際に見て知つている。私は二十九のばあちゃんだから、十年前のお父上の御逝去ごせいきよの時は、もう十九にもなつていたので。もう子供では無かつたのだから、十年経つても、その時の記憶はいまでもはつきりしていて、間違ひは無い筈はずだが、私がお供えの花を剪きりに、お庭のお池のほうに歩いて行って、池の岸のつつじのところ立ちどまつて、ふと見ると、そのつつじの枝先に、小さい蛇がまきついていた。すこしおどろいて、つぎの山吹の花枝を折ろうとすると、その枝にも、まきついていた。隣の木もくせ屋いにも、若楓わかかえでにも、えにしだにも、藤にも、桜にも、どの木にも、どの木にも、蛇がまきついていたのである。けれども私には、そんなにこわく思われなかつた。蛇も、私

と同様にお父上の逝去を悲しんで、穴から這い出してお父上の霊を拜んでいるのであろうと
いうような気がしたただけであった。そうして私は、そのお庭の蛇の事を、お母さまにそつ
とお知らせしたら、お母さまは落ちついて、ちよつと首を傾けて何か考えるような御様子
をなさったが、べつに何もおつしやりはしなかった。

けれども、この二つの蛇の事件が、それ以来お母さまを、ひどい蛇ぎらいにさせたのは
事実であった。蛇ぎらいというよりは、蛇をあがめ、おそれる、つまり畏怖いふの情をお持ち
になつてしまつたようだ。

蛇の卵を焼いたのを、お母さまに見つけられ、お母さまはきつと何かひどく不吉なもの
をお感じになつたに違いないと思つたら、私も急に蛇の卵を焼いたのがたいへんなおそろ
しい事だつたような気がして来て、この事がお母さまに或いは悪い祟りたをするのではある
まいかと、心配で心配で、あくる日も、またそのあくる日も忘れる事が出来ずにいたのに、
けさは食堂で、美しい人は早く死ぬ、などめつそうも無い事をつい口走つて、あとで、ど
うにも言いにくいが出来ず、泣いてしまつたのだが、朝食のあと片づけをしながら、何
だか自分の胸の奥に、お母さまのお命をちぢめる気味わるい小蛇が一匹はいり込んでいる
ようで、いやでいやで仕様が無かつた。

そうして、その日、私はお庭で蛇を見た。その日は、とてもなごやかないお天気だったので、私はお台所のお仕事をすませて、それからお庭の芝生の上に籐椅子とういすをはこび、そこで編物を仕様と思つて、籐椅子を持つてお庭に降りたら、庭石の笹ささのところこゝに蛇がいた。おお、いやだ。私はただそう思つただけで、それ以上深く考える事もせず、籐椅子を持つて引返して縁側にあがり、縁側に椅子を置いてそれに腰かけて編物にとりかかった。午後になつて、私はお庭の隅の御堂の奥にしまつてある蔵書の中から、ローランサンの画集を取り出して来ようと思つて、お庭へ降りたら、芝生の上を、蛇が、ゆっくりゆっくり這つている。朝の蛇と同じだった。ほっそりした、上品な蛇だった。私は、女蛇だ、と思つた。彼女は、芝生を静かに横切つて野ぼらの蔭まで行くと、立ちどまつて首を上げ、細い焰のような舌をふるわせた。そうして、あたりを眺めるながような恰かつこう好をしたが、しばらくすると、首を垂れ、いかにも物憂ものうげにうづくまつた。私はその時にも、ただ美しい蛇だ、という思いばかりが強く、やがて御堂に行つて画集を持ち出し、かえりにさつきの蛇のいたところをそつと見たが、もういなかつた。

夕方ちかく、お母さまと支那間でお茶をいただきながら、お庭のほうを見ていたら、石段の三段目の石のところに、けさの蛇がまたゆつくりとあらわれた。

お母さまもそれを見つけ、

「あの蛇は？」

とおつしやるなり立ち上つて私のほうに走り寄り、私の手をとったまま立ちすくんでおしまいになった。そう言われて、私も、はつと思ひ当り、

「卵の母親？」

と口に出して言ってしまった。

「そう、そうよ」

お母さまのお声は、かすれていた。

私たちは手をとり合つて、息をつめ、黙つてその蛇を見護みまもつた。石の上に、物憂げにうずくまっていた蛇は、よろめくようにまた動きはじめ、そうして力弱そうに石段を横切り、かきつばたのほうに這入はいつて行つた。

「けさから、お庭を歩きまわっていたのよ」

と私が小声で申し上げたら、お母さまは、溜息ためいきをついてくたりと椅子に坐すわり込んでおしまいになって、

「そうでしょう？　卵を捜しているのですよ。可哀そうに」

と沈んだ声でおっしゃった。

私は仕方なく、ふふと笑った。

夕日がお母さまのお顔に当って、お母さまのお眼が青いくらいに光って見えて、その幽かに怒りを帯びたようなお顔は、飛びつきたいほどに美しかった。そうして、私は、ああ、お母さまのお顔は、さっきのあの悲しい蛇に、どこか似ていらつしやる、と思った。そうして私の胸の中に住む蝮みたいにごろごろして醜い蛇が、この悲しみが深くて美しい美しい母蛇をいつか、食い殺してしまうのではなからうかと、なぜだか、なぜだか、そんな気がした。

私はお母さまの軟らかなきやしやお肩に手を置いて、理由のわからない身悶えみもたをした。

私たちが、東京の西片町のお家を捨て、伊豆いずのこの、ちよつと支那ふうの山荘に引越して来たのは、日本が無条件降伏をしたとの、十二月のはじめであつた。お父上がお亡くなりになつてから、私たちの家の経済は、お母さまの弟で、そうしていまではお母さまのたった一人の肉親でいらつしやる和田の叔父さまが、全部お世話して下さいたのだが、戦争が終わつて世の中が変り、和田の叔父さまが、もう駄目だめだ、家を売るより他ほかは無い、

女中にも皆ひまを出して、親子二人で、どこか田舎の小綺麗な家を買ひ、気ままに暮したほうがいい、とお母さまにお言い渡しになつた様子で、お母さまは、お金の事は子供よりも、もつと何もわからないお方だし、和田の叔父さまからそう言われて、それではどうかよろしく、とお願ひしてしまつたようである。

十一月の末に叔父さまから速達が来て、駿豆鉄道すんずの沿線ししやくに河田子爵の別荘が売り物に出ている、家は高台で見晴しがよく、畑も百坪ばかりある、あのあたりは梅の名所で、冬暖かく夏涼しく、住めばきつと、お気に召すところと思う、先方と直接お逢いになつてお話をする必要もあると思われるから、明日、とにかく銀座の私の事務所までおいでを乞う、こという文面で、

「お母さま、おいでなさる？」

と私がたずねると、

「だって、お願ひしていたのだもの」

と、とてもたまらなく淋しそうに笑つておつしやつた。

翌ある日、もとの運転手の松山さんにお伴ともをたのんで、お母さまは、お昼すこし過ぎにおでかけになり、夜の八時頃、松山さんに送られてお帰りになつた。

「きめましたよ」

かず子のお部屋へはいつて来て、かず子の机に手をつけてそのまま崩れるようにお坐りになり、そう一言おつしやつた。

「きめたつて、何を？」

「全部」

「だつて」

と私はおどろき、

「どんなお家だか、見もしないうちに、……」

お母さまは机の上に片肘かたひじを立て、額に軽くお手を当て、小さい溜息をおつきになり、「和田の叔父さまが、いい所だとおつしやるのなもの。私は、このまま、眼をつぶつてそのお家へ移つて行つても、いいような気がする」

とおつしやつてお顔を挙げて、かすかにお笑いになった。そのお顔は、少しやつれて、美しかった。

「そうね」

と私も、お母さまの和田の叔父さまに対する信頼心の美しさに負けて、合あ槌いづちを打ち、

「それでは、かず子も眼をつぶるわ」

二人で声を立てて笑ったけれども、笑ったあとが、すごく淋しくなった。

それから毎日、お家へ人夫が来て、引越しの荷ごしらえがはじまった。和田の叔父さまも、やって来られて、売り払うものは売り払うようにそれぞれ手配をして下さった。私は女中のお君と二人で、衣類の整理をしたり、がらくたを庭先で燃やしたりしていそがしい思いをしていたが、お母さまは、少しも整理のお手伝いも、お指図さしずもなさらず、毎日お部屋で、なんとなく、ぐずぐずしていらつしやるのである。

「どうなさったの？ 伊豆へ行きたくなくなつたの？」

「と思いつつて、少しきつくお訊たずねしても、

「いいえ」

とぼんやりしたお顔でお答えになるだけであつた。

十日ばかりして、整理が出来上つた。私は、夕方お君と二人で、紙くずや藁わらを庭先で燃やしていると、お母さまも、お部屋から出ていらして、縁側にお立ちになって黙つて私たちの焚火たきびを見ていらした。灰色みたいな寒い西風が吹いて、煙が低く地を這はつていて、私は、ふとお母さまの顔を見上げ、お母さまのお顔色が、いままで見たこともなかつたくら

いに悪いのにびつくりして、

「お母さま！ お顔色がお悪いわ」

と叫ぶと、お母さまは薄くお笑いになり、

「なんでもないの」

とおっしゃって、そつとまたお部屋におはいりになった。

その夜、お蒲団ふとんはもう荷造りをすましてしまったので、お君は二階の洋間のソファに、お母さまと私は、お母さまのお部屋に、お隣りからお借りした一組のお蒲団をひいて、二人一緒にやすんだ。

お母さまは、おや？ と思つたくらいに老ふけた弱々しいお声で、

「かず子がいるから、かず子がいてくれるから、私は伊豆へ行くのですよ。かず子がいてくれるから」

と意外な事をおっしゃった。

私は、どきんとして、

「かず子がいなかったら？」

と思わずたずねた。

お母さまは、急にお泣きになって、

「死んだほうがよいのです。お父さまの亡くなったこの家で、お母さまも、死んでしまいたいのですよ」

と、とぎれとぎれにおっしゃって、いよいよはげしくお泣きになった。

お母さまは、今まで私に向つて一度だつてこんな弱音をおっしゃった事が無かつたし、また、こんなに烈しくお泣きになっているところを私に見せた事も無かつた。お父上がお亡くなりになった時も、また私がお嫁に行く時も、そして赤ちやんをおなかにいれてお母さまの許へ帰つて来た時も、そして、赤ちやんが病院で死んで生れた時も、それから私が病氣になつて寝込んでしまつた時も、また、直治が悪い事をした時も、お母さまは、決してこんなお弱い態度をお見せになりはしなかつた。お父上がお亡くなりになつて十年間、お母さまは、お父上の在世中と少しも変らない、のんきな、優しいお母さまだつた。そうして、私たちも、いい氣になつて甘えて育つて来たのだ。けれども、お母さまには、もうお金が無くなつてしまつた。みんな私たちのために、私と直治のために、みじんも惜しまずにお使いになつてしまつたのだ。そうしてもう、この永年住みなれたお家から出て行つて、伊豆の小さい山荘で私とたつた二人きりで、わびしい生活をはじめなければならなく

なつた。もしお母さまが意地悪でケチケチして、私たちを叱^{しか}つて、そうして、こつそりご自分だけのお金をふやす事を工夫なさるようなお方であつたら、どんなに世の中が變つても、こんな、死にたくなるようなお氣持におなりになる事はなかつたらうに、ああ、お金が無くなるという事は、なんというおそろしい、みじめな、救いの無い地獄だろう、と生れてはじめて気がついた思いで、胸が一ぱいになり、あまり苦しくて泣きたくても泣けず、人生の嚴肅とは、こんな時の感じを言うのであろうか、身動き一つ出来ない氣持で、仰^{あおむ}向^けに寝たまま、私は石のように凝^じつとしていた。

翌る日、お母さまは、やはりお顔色が悪く、なほ何やらぐずぐずして、少しでも永くこのお家にいらつしやりたい様子であつたが、和田の叔父さまが見えられて、もう荷物はほとんど発送してしまつたし、きよう伊豆に出発、とお言いつけになつたので、お母さまは、しぶしぶコートを着て、おわかれの挨拶^{あいさつ}を申し上げるお君や、出入のひとたちに無言でお会釈なさつて、叔父さまと私と三人、西片町のお家を出た。

汽車は割に空^すいていて、三人とも腰かけられた。汽車の中では、叔父さまは非常な上^{じょう}機嫌^{きげん}でうたいなど唸^{うな}つていらつしやつたが、お母さまはお顔色が悪く、うつむいて、とても寒そうにしていらした。三島で駿豆鉄道に乗りかえ、伊豆長岡で下車して、それから

バスで十五分くらいで降りてから山のほうに向って、ゆるやかな坂道をのぼって行くと、小さい部落があつて、その部落のはずれに、支那ふうの、ちよつとこつた山荘があつた。

「お母さま、思つたよりもいい所ね」

と私は息をはずませて言った。

「そうね」

とお母さまも、山荘の玄関の前に立つて、一瞬うれしそうな眼つきをなさつた。

「だいいち、空気がいい。清浄な空気です」

と叔父さまは、ご自慢なさつた。

「本当に」

とお母さまは微笑ほほえまれて、

「おいしい。ここの空気は、おいしい」

とおっしゃつた。

そうして、三人で笑つた。

玄関にはいつてみると、もう東京からのお荷物が着いていて、玄関からお部屋からお荷物で一ぱいになつていた。

「次には、お座敷からの眺めがよい」

叔父さまは浮かれて、私たちをお座敷に引っぱって行って坐らせた。

午後の三時頃で、冬の日が、お庭の芝生にやわらかく当っていて、芝生から石段を降りつくしたあたりに小さいお池があり、梅の木がたくさんあって、お庭の下には蜜柑畑みかんぼたけがひろがり、それから村道があつて、その向うは水田で、それからずっと向うに松林があつて、その松林の向うに、海が見える。海は、こうしてお座敷に坐っていると、ちょうど私のお乳のさきに水平線がさわるくらいの高さに見えた。

「やわらかな景色ねえ」

とお母さまは、もの憂そうにおっしゃつた。

「空気のせいかしら。陽ひの光が、まるで東京と違うじやないの。光線が絹ぬいごしされているみたい」

と私は、はしやいで言つた。

十畳間と六畳間と、それから支那式の応接間と、それからお玄関が三畳、お風呂場のところにも三畳がついていて、それから食堂とお勝手と、それからお二階に大きいベッドの附ついた来客用の洋間が一間、それだけの間数まかずだけれども、私たち二人、いや、直治が帰つ

て三人になつても、別に窮屈でないと思つた。

叔父さまは、この部落でたつた一軒だという宿屋へ、お食事を交渉に出かけ、やがてとどけられたお弁当を、お座敷にひろげて御持参のウイスキーをお飲みになり、この山荘の以前の持主でいらした河田子爵と支那で遊んだ頃の失敗談など語つて、大陽気であつたが、お母さまは、お弁当にもほんのちよつとお箸をおつけになつただけで、やがて、あたりが薄暗くなつて来た頃、

「すこし、このまま寝かして」

と小さい声でおっしゃつた。

私がお荷物の中からお蒲団を出して、寝かせてあげ、何だかひどく気がかりになつて来たので、お荷物から体温計を捜し出して、お熱を計つてみたら、三十九度あつた。

叔父さまもおどろいたご様子で、とにかく下の村まで、お医者を探しに出かけられた。

「お母さま！」

とお呼びしても、ただ、うとうととしていらつしやる。

私はお母さまの小さいお手を握りしめて、すすり泣いた。お母さまが、お可哀想でお可哀想で、いいえ、私たち二人が可哀想で可哀想で、いくら泣いても、とまらなかつた。泣

きながら、ほんとうにこのままお母さまと一緒に死にたいと思った。もう私たちは、何も要らない。私たちの人生は、西片町のお家を出た時に、もう終わったのだと思った。

二時間ほどして叔父さまが、村の先生を連れて来られた。村の先生は、もうだいぶおとし寄りのようで、そうして仙^{せん}台^{だい}平^{ひら}の袴^{はかま}を着け、白足袋をはいておられた。

ご診察が終って、

「肺炎になるかも知れませんが、けれども、肺炎になりましたも、御心配はございません」

と、何だかたより無い事をおっしゃって、注射をして下さって帰られた。

翌る日になっても、お母さまのお熱は、さがらなかつた。和田の叔父さまは、私に二千円お手渡しになつて、もし万一、入院などしなければならぬようになったら、東京へ電報を打つように、と言ひ残して、ひとまずその日に帰京なされた。

私はお荷物の中から最小限の必要な炊事道具を取り出し、おかゆを作ってお母さまにすすめた。お母さまは、おやすみのまま、三さじおあがりになつて、それから、首を振つた。お昼すこし前に、下の村の先生がまた見えられた。こんどはお袴は着けていなかったが、白足袋は、やはりはいておられた。

「入院したほうが、……」

と私が申し上げたら、

「いや、その必要は、ございませんでしょう。きようは一つ、強いお注射をしてさし上げますから、お熱もさがる事でしょう」

と、相変らずたより無いようなお返事で、そうして、所謂いわゆるその強い注射をしてお帰りになされた。

けれども、その強い注射が奇効を奏したのか、その日のお昼すぎに、お母さまのお顔が真赤まっかになつて、そうしてお汗がひどく出て、お寝巻を着かえる時、お母さまは笑つて、

「名医かも知れないわ」

とおつしやつた。

熱は七度にさがっていた。私はうれしく、この村にたった一軒の宿屋に走つて行き、このおかみさんに頼んで、鶏卵を十ばかりわけてもらい、さつそく半熟にしてお母さまに差し上げた。お母さまは半熟を三つと、それからおかゆをお茶碗ちやわんに半分ほどいただいた。あくる日、村の名医が、また白足袋をはいてお見えになり、私が昨日の強い注射の御礼を申し上げたら、効きくのは当然、というようなお顔で深くうなずき、ていねいにご診察な

さつて、そうして私のほうに向き直り、

「大奥さまは、もはや御病気ではございませぬ。でございますから、これからは、何をおあがりになつても、何をなさつてもよろしゅうございます」

と、やはり、へんな言いかたをなさるので、私は嘖き出したいのを^{こら}泳げるのに骨が折れた。

先生を玄関までお送りして、お座敷に引返して来て見ると、お母さまは、お床の上にお坐りになつていらして、

「本当に名医だわ。私は、もう、病気じゃない」

と、とても楽しそうなお顔をして、うつとりとひとりごとのおつしやつた。

「お母さま、障子をあげましようか。雪が降っているのよ」

花びらのような大きい^{ぼたんゆき}牡丹雪が、ふわりふわり降りはじめていたのだ。私は、障子をあげ、お母さまと並んで坐り、^{ガラスビ}硝子戸越しに伊豆の雪を眺めた。

「もう病気じゃない」

と、お母さまは、またひとりごとのおつしやつて、

「こうして坐っていると、以前の事が、皆ゆめだったような気がする。私は本当は、引越

し間際まぎわになつて、伊豆へ来るのが、どうしても、なんとしても、いやになつてしまつたの。西片町のあのお家に、一日でも半日でも永くいたかつたの。汽車に乗つた時には、半分死んでゐるような氣持で、ここに着いた時も、はじめちよつと楽しいような氣分がしたけど、薄暗くなつたら、もう東京がこいしくて、胸がこげるようで、氣が遠くなつてしまつたの。普通の病氣じゃないんです。神さまが私をいちどお殺しになつて、それから昨日までの私と違ふ私にして、よみがえらせて下さつたのだわ」

それから、きようまで、私たち二人きりの山莊生活が、まあ、どうやら事も無く、安あん穩んにつづいて来たのだ。部落の人たちも私たちに親切にしてくれた。ここへ引越して来たのは、去年の十二月、それから、一月、二月、三月、四月のきようまで、私たちはお食事のお支度の他は、たいていお縁側で編物したり、支那間で本を読んだり、お茶をいただいたり、ほとんど世の中と離れてしまつたような生活をしていたのである。二月には梅が咲き、この部落全体が梅の花で埋まつた。そうして三月になつても、風のないおだやかな日が多かつたので、満開の梅は少しも衰えず、三月の末まで美しく咲きつづけた。朝も昼も、夕方も、夜も、梅の花は、溜ため息いきの出るほど美しかった。そうしてお縁側の硝子戸をあけると、いつでも花の匂においがお部屋にすつと流れて来た。三月の終りには、夕方になる

と、きつと風が出て、私が夕暮の食堂でお茶碗を並べていると、窓から梅の花びらが吹き込んで来て、お茶碗の中にはいつて濡れた。四月になって、私とお母さまがお縁側で編物をしながら、二人の話題は、たいてい畑作りの計画であった。お母さまもお手伝いしたいとおっしゃる。ああ、こうして書いてみると、いかにも私たちは、いつかお母さまのおっしゃったように、いちど死んで、違う私たちになつてよみがえつたようでもあるが、しかし、イエスさまのような復活は、所詮、人間には出来ないのではなからうか。お母さまは、あんなふうにおっしゃつたけれども、それでもやはり、スープを一さじ吸つては、直治を思い、あ、とお叫びになる。そうして私の過去の傷痕も、実は、ちつともなおつていはしないのである。

ああ、何も一つも包みかくさず、はつきり書きたい。この山荘の安穩は、全部いつわりの、見せかけに過ぎないと、私はひそかに思う時さえあるのだ。これが私たち親子が神さまからいただいた短い休息の期間であつたとしても、もうすでにこの平和には、何か不吉な、暗い影が忍び寄つて来ているような気がしてならない。お母さまは、幸福をお装いにしながらも、日に日に衰え、そうして私の胸には蝮が宿り、お母さまを犠牲にしてまで、自分でおさえでもおさえでも太り、ああ、これがただ季節のせいだけのものではあつ

てくれたらよい、私にはこの頃、こんな生活が、とてもたまらなくなる事があるのだ。蛇の卵を焼くなどというはしたない事をしたのも、そのような私のいらいらした思いのあらわれの一つだったのに違いないのだ。そうしてただ、お母さまの悲しみを深くさせ、衰弱させるばかりなのだ。

恋、と書いたら、あと、書けなくなつた。

二

蛇へびの卵の事があつてから、十日ほど経ち、不吉な事がつづいて起り、いよいよお母さまの悲しみを深くさせ、そのお命を薄くさせた。

私が、火事を起しかけたのだ。

私が火事を起す。私の生しょうがい涯がいにそんなおそろしい事があるうとは、幼い時から今まで、一度も夢にさえ考えた事が無かつたのに。

お火を粗末にすれば火事が起る、というきわめて当然の事にも、気づかないほどの私はあの所謂いわゆる「おひめさま」だったのだろうか。

夜中にお手洗いに起きて、お玄関の衝立の傍まで行くと、お風呂場のほうが明るい。何気なく覗いてみると、お風呂場の硝子戸が真赤で、パチパチという音が聞える。小走りに走って行ってお風呂場のくぐり戸をあけ、はだしで外に出てみたら、お風呂のかまどの傍に積み上げてあった薪の山が、すごい火勢で燃えている。

庭つづきの下の農家に飛んで行き、カーぱいに戸を叩いて、

「中井さん！ 起きて下さい、火事です！」

と叫んだ。

中井さんは、もう、寝ていらつしやたらしかつたが、

「はい、直ぐ行きます」

と返事して、私が、おねがいします、早くおねがいします、と言っているうちに、浴衣の寝巻のままでお家から飛び出て来られた。

二人で火の傍に駆け戻り、バケツでお池の水を汲んでかけていると、お座敷の廊下のほうから、お母さまの、ああつ、という叫びが聞えた。私はバケツを投げ捨て、お庭から廊下の上って、

「お母さま、心配しないで、大丈夫、休んでいらして」

と、倒れかかるお母さまを抱きとめ、お寢床に連れて行って寝かせ、また火のところに飛んでかえって、こんどはお風呂の水を汲んでは中井さんに手渡し、中井さんはそれを薪の山にかけてが火勢は強く、とてもそんな事では消えそうもなかった。

「火事だ。火事だ。お別荘が火事だ」

という声が下のほうから聞えて、たちまち四五人の村の人たちが、垣根かきねをこわして、飛び込んでいらした。そうして、垣根の下の、用水の水を、リレー式にバケツで運んで、三分のあいだに消しとめて下さった。もう少して、お風呂場の屋根に燃え移ろうとするところであった。

よかった、と思ったとたんに、私はこの火事の原因に気づいてぎよつとした。本当に、私はその時はじめて、この火事騒ぎは、私が夕方、お風呂のかまどの燃え残りの薪を、かまどから引き出して消したつもりで、薪の山の傍に置いた事から起ったのだ、という事に気づいたのだ。そう気づいて、泣き出さなくなつて立ちつくしていたら、前のお家の西山さんのお嫁さんが垣根の外で、お風呂場が丸焼けだよ、かまどの火の不始末だよ、と声こゑ高かに話すのが聞えた。

村長の藤田さん、二宮巡査、警防団長の大内さんなどが、やって来られて、藤田さんは、

いつものお優しい笑顔で、

「おどろいたでしょう。どうしたのですか？」

とおたずねになる。

「私が、いけなかったのです。消したつもりは薪を、……」

と言いかけて、自分があんまりみじめで、涙がわいて出て、それっきりうつむいて黙った。警察に連れて行かれて、罪人になるのかも知れない、とそのとき思った。はだしで、お寝巻のままの、取乱した自分の姿が急にはずかしくなり、つくづく、落ちぶれたと思っ

た。

「わかりました。お母さんは？」

と藤田さんは、いたわるような口調で、しずかにおっしゃる。

「お座敷にやすませておりますの。ひどくおどろいていらして、……」

「しかし、まあ」

とお若い二宮巡査も、

「家に火がつかなくて、よかった」

となぐさめるようにおっしゃる。

すると、そこへ下の農家の中井さんが、服装を改めて出直して来られて、「なにね、薪がちよつと燃えただけなんです。ボヤ、とまでも行きませんと息をはずませて言い、私のおろかな過失をかばって下さる。」

「そうですか。よくわかりました」

と村長の藤田さんは二度も三度もうなずいて、それから二宮巡査と何か小声で相談をなさっていらしたが、

「では、帰りますから、どうぞ、お母さんよろしく」

とおっしゃって、そのまま、警防団長の大内さんやその他の方たちと一緒にお帰りになる。

二宮巡査だけ、お残りになって、そうして私のすぐ前まで歩み寄って来られて、呼吸だけのような低い声で、

「それではね、今夜の事は、べつに、とどけない事にしますから」とおっしゃった。

二宮巡査がお帰りになったら、下の農家の中井さんが、

「二宮さんは、どう言われました？」

と、実に心配そうな、緊張のお声でたずねる。

「とどけないって、おっしやいました」

と私が答えると、垣根のほうにまだ近所のお方がいらして、その私の返事を聞きとった様子で、そうか、よかった、よかった、と言いながら、そろそろ引上げて行かれた。

中井さんも、おやすみなさい、を言ってお帰りになり、あとには私ひとり、ぼんやり焼けた薪の山の傍に立ち、涙ぐんで空を見上げたら、もうそれは夜明けちかい空の気配であった。

風呂場で、手と足と顔を洗い、お母さまに逢うのが何だかおっかなくなつて、お風呂場の三畳間で髪を直したりしてぐずぐずして、それからお勝手に行き、夜のまったく明けはなれるまで、お勝手の食器の用も無い整理などしていた。

夜が明けて、お座敷のほうに、そつと足音をしのばせて行つて見ると、お母さまは、もうちゃんとお着換えをすましておられて、そうして支那間のお椅子いすに、疲れ切つたようにして腰かけていらした。私を見て、にっこりお笑いになったが、そのお顔は、びっくりするほど蒼あおかつた。

私は笑わず、黙つて、お母さまのお椅子のうしろに立つた。

しばらくしてお母さまが、

「なんでもない事だったのね。燃やすための薪だもの」

とおっしゃった。

私は急に楽しくなつて、ふふんと笑つた。機おりにかないて語る言かたことばは銀ぎんの彫刻物ほりものに金きんの林檎りんごを嵌はめたるが如ごとし、という聖書の箴言しんげんを思い出し、こんな優しいお母さまを持っている自分の幸福を、つくづく神さまに感謝した。ゆうべの事は、ゆうべの事。もうくよくよすまい、と思つて、私は支那間の硝子戸越しに、朝の伊豆の海を眺ながめ、いつまでもお母さまのうしろに立っていて、おしまいにはお母さまのしずかな呼吸と私の呼吸がぴったり合つてしまつた。

朝のお食事を軽くすましてから、私は、焼けた薪の山の整理にとりかかっていると、この村でたった一軒の宿屋のおかみさんであるお咲さきさんが、

「どうしたのよ？ どうしたのよ？ いま、私、はじめて聞いて、まあ、ゆうべは、いったい、どうしたのよ？」

と言いながら庭の枝折戸しおりどから小走りに走つてやって来られて、そうしてその眼には、涙が光つていた。

「すみません」

と私は小声でわびた。

「すみませんも何も。それよりも、お嬢さん、警察のほうは？」

「いいんですって」

「まあよかった」

と、しんから嬉しそうな顔をして下さった。

私はお咲さんに、村の皆さんへどんな形で、お礼とお詫わびをしたらいいか、相談した。

お咲さんは、やはりお金がいいでしょう、と言ひ、それを持ってお詫わびまわりをすべき家々を教えて下さった。

「でも、お嬢さんがおひとりで廻まわるのがおいやだったら、私も一緒について行ってあげますよ」

「ひとりで行ったほうが、いいのでしょうか？」

「ひとりで行ける？ そりや、ひとりで行ったほうがいいの」

「ひとりで行くわ」

それからお咲さんは、焼跡の整理を少し手伝って下さった。

整理がすんでから、私はお母さまからお金をいただき、百円紙幣を一枚ずつ美濃紙みのがみに包んで、それぞれの包みに、おわび、と書いた。

まず一ばんに役場へ行つた。村長の藤田さんはお留守だったので、受附うけつけの娘さんに紙包を差し出し、

「昨夜は、申しわけない事を致しました。これから、気をつけますから、どうぞおゆるし下さいまし。村長さんに、よろしく」

とお詫びを申し上げた。

それから、警防団長の大内さんのお家へ行き、大内さんがお玄関に出て来られて、私を見て黙って悲しそうに微笑ほほえんでいらして、私は、どうしてだか、急に泣きたくなり、

「ゆうべは、ごめんなさい」

と言うのが、やつとで、いそいでおいとまして、道々、涙があふれて来て、顔がだめになつたので、いったんお家へ帰つて、洗面所で顔を洗い、お化粧をし直して、また出かけようとして玄関で靴くつをはいていると、お母さまが、出ていらして、

「まだ、どこかへ行くの？」

とおっしゃる。

「ええ、これからよ」

私は顔を挙げないで答えた。

「ご苦労さまね」

しみりおつしやつた。

お母さまの愛情に力を得て、こんどは一度も泣かずに、全部をまわる事が出来た。

区長さんのお家に行ったら、区長さんはお留守で、息子さんのお嫁さんが出ていらしたが、私を見るなりかえつて向うで涙ぐんでおしまいになり、また、巡査のところでは、二宮巡査が、よかつた、よかつた、とおつしやつてくれるし、みんなお優しいお方たちばかりで、それからご近所のお家を廻つて、やはり皆さまから、同情され、なぐさめられた。ただ、前のお家の西山さんのお嫁さん、といつても、もう四十くらいのおばさんだが、そのひとにだけは、びしびししか叱しかられた。

「これからも気をつけて下さいよ。宮様だか何さまだか知らないけれども、私は前から、あんたたちのままごと遊びみたいな暮し方を、はらはらしながら見ていたんです。子供が二人で暮しているみたいなんだから、いままで火事を起さなかったのが不思議なくらいのものだ。本当にこれからは、気をつけて下さいよ。ゆうべだつて、あんた、あれで風が強

かつたら、この村全部が燃えたのですよ」

この西山さんのお嫁さんは、下の農家の中井さんなどは村長さんや二宮巡査の前に飛んで出て、ボヤとまでも行きません、と言つてかばつて下さつたのに、垣根の外で、風呂場が丸焼けだよ、かまどの火の不始末だよ、と大きい声で言つていらしたひとである。けれども、私は西山さんのお嫁さんのおごごにも、真実を感じた。本当にそのとおりだと思つた。少しも、西山さんのお嫁さんを恨む事は無い。お母さまは、燃やすための薪だものと冗談をおつしやつて私をなぐさめて下さつたが、しかし、あの時に風が強かつたら、西山さんのお嫁さんのおつしやるとおり、この村全体が焼けたのかも知れない。そうなら私は、死んでおわびしたつておつつかない。私が死んだら、お母さまも生きては、いらつしやらないだろうし、また亡くなつたお父上のお名前をけがしてしまう事にもなる。いまはもう、宮様も華族もあつたものではないけれども、しかし、どうせほろびるものなら、思い切つて華麗にほろびたい。火事を出してそのお詫びに死ぬなんて、そんなみじめな死に方では、死んでも死に切れまい。とにかく、もつと、しっかりとしなければならぬ。

私は翌日から、畑仕事に精を出した。下の農家の中井さんの娘さんが、時々お手伝いして下さつた。火事を出すなどという醜態を演じてからは、私のからだの血が何だか少し赤

黒くなったような気がして、その前には、私の胸に意地悪の蝮まむしが住み、こんどは血の色まで少し変わったのだから、いよいよ野性の田舎娘になって行くような気分で、お母さまとお縁側で編物などをしていても、へんに窮屈で息苦しく、かえって畑へ出て、土を掘り起したりしているほうが気楽なくらいであった。

筋肉労働、というのかしら。このような力仕事は、私にとっていまがはじめてではない。私は戦争の時に徴用されて、ヨイトマケまでさせられた。いま畑にはいて出ている地下足袋も、その時、軍のほうから配給になったものである。地下足袋というものを、その時、それこそ生れてはじめてはじめてみたのであるが、びっくりするほど、はき心地がよく、それをはいてお庭を歩いてみたら、鳥やけものが、はだしで地べたを歩いている気軽さが、自分にもよくわかったような気がして、とても、胸がうずくほど、うれしかった。戦争中の、たのしい記憶は、たったそれ一つきり。思えば、戦争なんて、つまらないものだった。昨年しんねんは、何も無かった。

一昨年は、何も無かった。

その前のとしも、何も無かった。

そんな面白い詩が、終戦直後の或る新聞あに載っていたが、本当に、いま思い出してみて

も、さまざまの事があつたような気がしながら、やはり、何も無かつたと同じ様な気もする。私は、戦争の追憶は語るのも、聞くのも、いやだ。人がたくさん死んだのに、それでも陳腐で退屈だ。けれども、私は、やはり自分勝手なのであろうか。私が徴用されて地下足袋をはき、ヨイトマケをやらされた時の事だけは、そんなに陳腐だとも思えない。ずいぶんいやな思いもしたが、しかし、私はあのヨイトマケのおかげで、すっかりからだが大丈夫になり、いまでも私は、いよいよ生活に困つたら、ヨイトマケをやつて生きて行こうと思ふ事があるくらいなのだ。

戦局がそろそろ絶望になつて来た頃、軍服みたいなものを着た男が、西片町のお家へやつて来て、私に徴用の紙と、それから労働の日割を書いた紙を渡した。日割の紙を見ると、私はその翌日から一日置きに立川の奥の山へかよわなければならなくなつていたので、思わず私の眼から涙があふれた。

「代^{だい}人^{にん}では、いけないのでしょうか」

涙がとまらず、すすり泣きになつてしまった。

「軍から、あなたに徴用が来たのだから、必ず、本人でなければいけない」

とその男は、強く答えた。

私は行く決心をした。

その翌日は雨で、私たちは立川の山の麓ふもとに整列させられ、まず将校のお説教があつた。

「戦争には、必ず勝つ」

と冒頭して、

「戦争には必ず勝つが、しかし、皆さんが軍の命令通りに仕事しなければ、作戦に支障きた来し、沖繩のような結果になる。必ず、言われただけの仕事は、やってほしい。それから、この山にも、スパイが這入はいっているかも知れないから、お互いに注意すること。皆さんもこれからは、兵隊と同じに、陣地の中へ這入はいって仕事をするのであるから、陣地の様子は、絶対に、他言たごんしないように、充分に注意してほしい」

と言つた。

山には雨が煙り、男女とりまぜて五百ちかい隊員が、雨に濡ぬれながら立ってその話を拝聴しているのだ。隊員の中には、国民学校の男生徒女生徒もまじつていて、みな寒そうな泣きべその顔をしていた。雨は私のレインコートをとおして、上衣うわぎにしみて来て、やがて肌着はだぎまでぬらしたほどであつた。

その日は一日、モッコかつぎをして、帰りの電車の中で、涙が出て来て仕様が無かつた

が、その次の時には、ヨイトマケの綱引だった。そうして、私にはその仕事が一ばん面白かった。

二度、三度、山へ行くうちに、国民学校の男生徒たちが私の姿を、いやにじろじろ見るようになった。或る日、私がモッコかつぎをしていると、男生徒が二三人、私とすれちがつて、それから、そのうちの一人が、

「あいつが、スパイか」

と小声で言ったのを聞き、私はびっくりしてしまった。

「なぜ、あんな事を言うのかしら」

と私は、私と並んでモッコをかついで歩いている若い娘さんにたずねた。

「外人みたいだから」

若い娘さんは、まじめに答えた。

「あなたも、あたしをスパイだと思つていらっしやる？」

「いいえ」

こんどは少し笑つて答えた。

「私、日本人ですわ」

と言つて、その自分の言葉が、われながら馬鹿らしいナンセンスのように思われて、ひとりですくすく笑つた。

或るお天氣のいい日に、私は朝から男の人たちと一緒に丸太はこびをしていると、監視当番の若い将校が顔をしかめて、私を指差し、

「おい、君。君は、こつちへ来給え」
きたま

と言つて、さつさと松林のほうへ歩いて行き、私が不安と恐怖で胸をどきどきさせながら、その後について行くと、林の奥に製材所から来たばかりの板が積んであつて、将校はその前まで行つて立ちどまり、くるりと私のほうに向き直つて、

「毎日、つらいでしょう。きようは一つ、この材木の見張番をして下さい」

と白い歯を出して笑つた。

「ここに、立っているのですか？」

「ここは、涼しくて静かだから、この板の上でお昼寝でもしてして下さい。もし、退屈だつたら、これは、お読みかも知れないけど」

と言つて、上衣のポケットから小さい文庫本を取り出し、てれたように、板の上にほうり、

「こんなものでも、読んでいて下さい」

文庫本には、「トロイカ」と記されていた。

私はその文庫本を取り上げ、

「ありがとうございます。うちにも、本のすきなのがいまして、いま、南方に行つていますけど」

と申し上げたら、聞き違いしたらしく、

「ああ、そう。あなたの御主人なのですね。南方じゃあ、たいへんだ」

と首を振つてしんみり言い、

「とにかく、きようはここで見張番という事にして、あなたのお弁当は、あとで自分が持つて来てあげますから、ゆつくり、休んでいらつしやい」

と言い捨て、急ぎ足で帰つて行かれた。

私は、材木に腰かけて、文庫本を読み、半分ほど読んだ頃、あの将校が、こつこつと靴の音をさせてやつて来て、

「お弁当を持つて来ました。おひとりで、つまらないでしょう」

と言つて、お弁当を草原の上に置いて、また大急ぎで引返して行かれた。

私は、お弁当をすましてから、こんどは、材木の上に這い上って、横になって本を読み、全部読み終えてから、うとうととお昼寝をはじめた。

眼がさめたのは、午後の三時すぎだった。私は、ふとあの若い将校を、前にどこかで見かけた事があるような気がして来て、考えてみたが、思い出せなかった。材木から降りて、髪を撫でつけていたら、また、こつこつと靴の音が聞えて来て、

「やあ、きょうは御苦労さまでした。もう、お帰りになつてよろしい」

私は将校のほうに走り寄つて、そうして文庫本を差し出し、お礼を言おうと思つたが、言葉が出ず、黙つて将校の顔を見上げ、二人の眼が合つた時、私の眼からぼろぼろ涙が出た。すると、その将校の眼にも、きらりと涙が光つた。

そのまま黙つておわかれしたが、その若い将校は、それっきりいちども、私たちの働いているところに顔を見せず、私は、あの日に、たった一日遊ぶ事が出来ただけで、それから、やはり一日置きに立川の山で、苦しい作業をした。お母さまは、私のからだを、しきりに心配して下さつたが、私はかえつて丈夫になり、いまではヨイトマケ商売にもひそかに自信を持つているし、また、畑仕事にも、べつに苦痛を感じない女になった。

戦争の事は、語るのも聞くのもいや、などと言いながら、つい自分の「貴重な経験談」

など語ってしまったが、しかし、私の戦争の追憶の中で、少しでも語りたと思うのは、ざっとこれくらいのもので、あとはもう、いつかのあの詩のように、

昨年、何も無かった。

一昨年は、何も無かった。

その前のとしも、何も無かった。

とでも言いたいくらいで、ただ、ばかばかしく、わが身に残っているものは、この地下足袋いっそく、というはかなさである。

地下足袋の事から、ついむだ話をはじめて脱線しちゃったけれど、私は、この、戦争の唯一の記念品ともいえるべき地下足袋をはいて、毎日のように畑に出て、胸の奥のひそかな不安や焦躁しょうそうをまぎらしているのだけれども、お母さまは、この頃、目立って日にお弱りになっていらつしやるように見える。

蛇の卵。

火事。

あの頃から、どうもお母さまは、めつきり御病人くさくおなりになった。そうして私のほうでは、その反対に、だんだん粗野な下品な女になって行くような気もする。なんだか

どうも私が、お母さまからどんどん生気を吸いとって太って行くような心地がしてならぬい。

火事の時だつて、お母さまは、燃やすための薪だもの、と御冗談を言つて、それつきり火事のことに就いては一言もおつしやらず、かえつて私をいたわるようにしていらしたが、しかし、内心お母さまの受けられたショックは、私の十倍も強かつたのに違いない。あの火事があつてから、お母さまは、夜中に時たま呻うめかれる事があるし、また、風の強い夜などは、お手洗いにおいでになる振りをして、深夜いくどもお床から脱けて家中をお見廻りみまわになるのである。そうしてお顔色はいつも冴さえず、お歩きになるのさえやつとのように見える日もある。畑も手伝いたいと、前はおつしやつていたが、いちど私が、およしなさいと申し上げたのに、井戸から大きい手桶ておけで畑に水を五、六ばいお運びになり、翌日、いきの出来ないくらいに肩がこる、とおつしやつて一日、寝たきりで、そんな事があつてからは流石さすがに畑仕事はあきらめた御様子で、時たま畑へ出て来られても、私の働き振りを、ただ、じつと見ていらつしやるだけである。

「夏の花が好きなのは、夏に死ぬつていうけれども、本当かしら」

きょうもお母さまは、私の畑仕事をじつと見ていらして、ふいとそんな事をおつしやつ

た。私は黙っておナスに水をやっていた。ああ、そういえば、もう初夏だ。

「私は、ねむの花が好きなんだけれども、ここのお庭には、一本も無いのね」と、お母さまは、また、しずかにおつしやる。

「爽竹桃きようちくとうがたくさんあるじゃないの」

私は、わざと、つつけんどんな口調で言った。

「あれは、きらいなの。夏の花は、たいていすきだけど、あれは、おきやんすぎて」

「私なら薔薇ばらがいいな。だけど、あれは四季咲きだから、薔薇の好きなひとは、春に死んで、夏に死んで、秋に死んで、冬に死んで、四度も死に直さなければいけないの？」

二人、笑った。

「すこし、休まない？」

とお母さまは、なおお笑いになりながら、

「きようは、ちよつとかず子さんと相談したい事があるの」

「なあに？ 死ぬお話なんかは、まつぴらよ」

私はお母さまの後について行って、藤ふじ棚だなの下のベンチに並んで腰をおろした。藤の花はもう終って、やわらかな午後の日ざしが、その葉をとおして私たちの膝ひざの上に落ち、私

たちの膝をみどりいろに染めた。

「前から聞いていただきだきと思つていた事ですけどね、お互いに気分のいい時に話そうと思つて、きょうまで機会を待つていたの。どうせ、いい話じゃあ無いのよ。でも、きょうは何だか私もすらすら話せるような気がするもんだから、まあ、あなたも、我慢しておしまひまで聞いて下さいね。実はね、直治なおいは、生きています」

私は、からだを固くした。

「五、六日前に、和田の叔父さまからおたよりがあつてね、叔父さまの会社に以前つとめていらしたお方で、さいきん南方から帰還して、叔父さまのところに挨拶あいさつにいらして、その時、よもやまの話の末に、そのお方が偶然にも直治と同じ部隊で、そうして直治は無事で、もうすぐ帰還するだろうという事がわかつたの。でも、ね、一ついやな事があるの。そのお方の話では、直治はかなりひどい阿片アヘン中毒になつていらしい、と……」

「また！」

私はにがいものを食べたみたいに、口をゆがめた。直治は、高等学校の頃に、或る小説家の真似まねをして、麻葉中毒にかかり、そのために、薬屋からおそろしい金額の借りを作つて、お母さまは、その借りを薬屋に全部支払うのに二年もかかつたのである。

「そう。また、はじめたらしいの。けれども、そのなおらないうちは、帰還もゆるされないだろうから、きつとなおして来るだろうと、そのお方も言っていたそうです。叔父さまのお手紙では、なおして帰って来たとしても、そんな心掛けの者では、すぐどこかへ勤めさせるといわけにはいかぬ、いまのこの混乱の東京で働いては、まともの人間でさえ少し狂ったような気分になる、中毒のなおったばかりの半病人なら、すぐ発狂気味になって、何を仕出かすか、わかったものでない、それで、直治が帰って来たら、すぐこの伊豆の山荘に引取って、どこへも出さずに、当分ここで静養させたほうがよい、それが一つ。それから、ねえ、かず子、叔父さまがねえ、もう一つお言いつけになっているのだよ。叔父さまのお話では、もう私たちのお金が、なんにも無くなってしまったんだって。貯金の封鎖だの、財産税だの、もう叔父さまも、これまでのように私たちにお金を送ってよこす事がめんどろになったのだそうです。それでね、直治が帰って来て、お母さまと、直治と、かず子と三人あそんで暮らしては、叔父さまもその生活費を都合なされるのにたいへんな苦勞をしなければならぬから、いまのうちに、かず子のお嫁入りさきを捜すか、または、御奉公のお家を捜すか、どちらかになさい、という、まあ、お言いつけなの」

「御奉公って、女中の事？」

「いいえ、叔父さまがね、ほら、あの、駒場の」
こまば

と或る宮様のお名前を挙げて、

「あの宮様なら、私たちとも血縁つづきだし、姫宮の家庭教師をかねて、御奉公にあがっても、かず子が、そんなに淋しく窮屈な思いをせずさびにすむだろう、とおっしゃっているのです」

「他に、つとめ口が無いものかしら」

「他の職業は、かず子には、とても無理だろう、とおっしゃっていました」

「なぜ無理なの？ ね、なぜ無理なの？」

お母さまは、淋しそうに微笑ほほえんでいらつしやるだけで、何ともお答えにならなかった。

「いやだわ！ 私、そんな話」

自分でも、あらぬ事を口走った、と思った。が、とまらなかつた。

「私が、こんな地下足袋を、こんな地下足袋を」

と言ったら、涙が出て来て、思わずわつと泣き出した。顔を挙げて、涙を手の甲で払いながら、お母さまに向つて、いけない、いけない、と思ひながら、言葉が無意識みたいに、肉体とまるで無関係に、つぎつぎと続いて出た。

「いつだか、おつしやつたじやないの。かず子がいるから、かず子がいてくれるから、お母さまは伊豆へ行くのですよ、とおつしやつたじやないの。かず子がいないと、死んでしまふとおつしやつたじやないの。だから、それだから、かず子は、どこへも行かずに、お母さまのお傍そばにいて、こうして地下足袋をはいて、お母さまに美味しいお野菜をあげたいと、そればかり考えているのに、直治が帰って来るとお聞きになったら、急に私を邪魔にして、宮様の女中に行けなんて、あんまりだわ、あんまりだわ」

自分でも、ひどい事を口走ると思いながら、言葉が別の生き物のように、どうしてもとまらないのだ。

「貧乏になつて、お金が無くなつたら、私たちの着物を売つたらいいじやないの。このお家も、売つてしまつたら、いいじやないの。私には、何だつて出来るわよ。この村の役場の女事務員にだつて何にだつてなれるわよ。役場で使つて下さらなかつたら、ヨイトマケにだつてなれるわよ。貧乏なんて、なんでもない。お母さまさえ、私を可愛かわいがつて下さつたら、私は一生お母さまのお傍そばにいようとばかり考えていたのに、お母さまは、私よりも直治のほうが可愛いのね。出て行くわ。私は出て行く。どうせ私は、直治とは昔から性格が合わないのだから、三人一緒に暮していたら、お互いに不幸よ。私はこれまで永いこと

お母さまと二人きりで暮したのだから、もう思い残すことは無い。これから直治がお母さまとお二人で水いららずで暮して、そうして直治がたんとたんと親孝行をするといひ。私はもう、いやになつた。これまでの生活が、いやになつた。出て行きます。きょうこれから、すぐに出て行きます。私には、行くところがあるの」

私は立つた。

「かず子！」

お母さまはきびしく言い、そうしてかつて私に見せた事の無かつたほど、威厳に満ちたお顔つきで、すつとお立ちになり、私と向い合つて、そうして私よりも少しお背が高くらしいに見えた。

私は、ごめんなさい、とすぐに言いたいと思つたが、それが口にもどうしても出ないで、かえつて別の言葉が出てしまつた。

「だましたのよ。お母さまは、私をおだましになつたのよ。直治が来るまで、私を利用していらつしやつたのよ。私は、お母さまの女中さん。用がすんだから、こんどは宮様のところに行けつて」

わつと声が出て、私は立つたまま、思いきり泣いた。

「お前は、馬鹿だばかねえ」

と低くおつしやつたお母さまのお声は、怒りに震えていた。

私は顔を挙げ、

「そうよ、馬鹿よ。馬鹿だから、だまされるのよ。馬鹿だから、邪魔にされるのよ。いまいほうがいいのでしょうか？ 貧乏って、どんな事？ お金って、なんの事？ 私には、わからないわ。愛情を、お母さまの愛情を、それだけを私は信じて生きて来たのです」

とまた、ばかな、あらぬ事を口走った。

お母さまは、ふつとお顔をそむけた。泣いておられるのだ。私は、ごめんなさい、と言いい、お母さまに抱きつきたいと思つたが、畑仕事で手がよごれているのが、かすかに気になり、へんに白々しくなつて、

「私さえ、いなかつたらいいのでしょうか？ 出て行きます。私には、行くところがあるの」

と言ひ捨て、そのまま小走りに走つて、お風呂場に行き、泣きじやくりながら、顔と手足を洗い、それからお部屋へ行つて、洋服に着換えているうちに、またわつと大きい声が出て泣き崩れ、思いのたけもつともつと泣いてみたくなって二階の洋間に駈かけ上り、ベッドにからだを投げて、毛布を頭からかぶり、瘦やせるほどひどく泣いて、そのうちに気が遠

くなるみたいになって、だんだん、或るひとが恋いしくて、恋いしくて、お顔を見て、お声を聞きたくてたまらなくなり、両足の裏に熱いお灸きゆうを据え、じつところらえているような特殊な気持になつて行つた。

夕方ちかく、お母さまは、しずかに二階の洋間にはいつていらして、パチと電燈ひに灯をいれて、それから、ベッドのほうに近寄つて来られ、

「かず子」

と、とてもお優しくお呼びになつた。

「はい」

私は起きて、ベッドの上に坐すわり、両手で髪を搔かきあげ、お母さまのお顔を見て、ふふと笑つた。

お母さまも、幽かすかにお笑いになり、それから、お窓の下のソファに、深くからだを沈め、「私は、生れてはじめて、和田の叔父さまのお言いつけに、そむいた。……お母さまはね、いま、叔父さまに御返事のお手紙を書いたの。私の子供たちの事は、私におまかせ下さい、と書いたの。かず子、着物を売りましようよ。二人の着物をどんどん売って、思い切りむだ使いして、ぜいたくな暮しをしましようよ。私はもう、あなたに、畑仕事などさせたく

ない。高いお野菜を買ったって、いいじゃないの。あんなに毎日の畑仕事は、あなたには無理です」

実は私も、毎日の畑仕事で、少しづつ弱りかけていたのだ。さつきあんなに、狂ったみたいに泣き騒いだのも、畑仕事の疲れと、悲しみがごっちゃになって、何もかも、うらめしく、いやになったからなのだ。

私はベッドの上で、うつむいて、黙っていた。

「かず子」

「はい」

「行くところがある、というのは、どこ？」

私は自分が、首すじまで赤くなつたのを意識した。

「細田さま？」

私は黙っていた。

お母さまは、深い溜息ためいきをおつきになり、

「昔の事を言ってもいい？」

「どうぞ」

と私は小声で言った。

「あなたが、山木さまのお家から出て、西片町のお家へ帰って来た時、お母さまは何もあなたをとがめるような事は言わなかったつもりだけど、でも、たった一ことだけ、（お母さまはあなたに裏切られました）って言ったわね。おぼえている？　そしたら、あなたは泣き出しちゃって、……私も裏切ったなんてひどい言葉を使ってわるかったと思ったけど、……」

けれども、私はあの時、お母さまにそう言われて、何だか有難くて、うれし泣きに泣いたのだ。

「お母さまがね、あの時、裏切られたって言ったのは、あなたが山木さまのお家を出て来た事じゃなかったの。山木さまから、かず子は実は、細田と恋仲だったのです、と言われた時の。そう言われた時には、本当に、私は顔色が変わる思いでした。だって、細田さまには、あのずっと前から、奥さまもお子さまもあって、どんなにこちらがお慕いしたって、どうにもならぬ事だし、……」

「恋仲だなんて、ひどい事を。山木さまのほうで、ただそう邪推なさっていただけなのよ」
「そうかしら。あなたは、まさか、あの細田さまを、まだ思いつづけているのじゃないで

しようね。行くところって、どこ？」

「細田さまのところなんかじゃないわ」

「そう？　そんなら、どこ？」

「お母さま、私ね、こないだ考えた事だけれども、人間が他の動物と、まるつきり違っている点は、何だろう、言葉も智慧ちえも、思考も、社会の秩序も、それぞれ程度の差はあつても、他の動物だつて皆持つていてはどう？　信仰も持つていても知れないわ。人間は、万物の霊長だなんて威張つてはいるけど、ちつとも他の動物と本質的なちがいが無いみたいでしょう？　ところがね、お母さま、たった一つあつたの。おわかりにならないでしょう。他の生き物には絶対に無くて、人間にだけあるもの。それはね、ひめぐと、というものよ。いかが？」

お母さまは、ほんのりお顔を赤くなさつて、美しくお笑いになり、

「ああ、そのかず子のひめぐとが、よい実みを結んでくれたらいいけどねえ。お母さまは、毎朝、お父さまにかず子を幸福にして下さるようにお祈りしているのですよ」

私の胸にふうつと、お父上と那須野なすのをドライヴして、そうして途中で降りて、その時の秋の野のけしきが浮んで来た。萩はぎ、なでしこ、りんどう、女郎花おみなえしなどの秋の草花が咲い

ていた。野葡萄のぶどうの実は、まだ青かった。

それから、お父上と琵琶湖びわこでモーターボートに乗り、私が水に飛び込み、藻もに棲すむ小魚が私の脚にあたり、湖の底に、私の脚の影がくつきりと写っていて、そうしてうごいてい、そのさまが前後と何の聯れん関かんも無く、ふっと胸に浮んで、消えた。

私はベッドから滑り降りて、お母さまのお膝に抱きつき、はじめて、

「お母さま、さつきはごめんなさい」

と言う事が出来た。

思うと、その日あたりが、私たちの幸福の最後の残り火の光が輝いた頃で、それから、直治が南方から帰って来て、私たちの本当の地獄がはじまった。

三

どうしても、もう、とても、生きておられないような心細さ。これが、あの、不安、とかいう感情なのであろうか、胸に苦しい浪なみが打ち寄せ、それはちようど、夕立がすんだのちの空を、あわただしく白雲がつきつきと走って走り過ぎて行くように、私の心臓をしめ

ついたり、ゆるめたり、私の脈は結滞して、呼吸が稀薄になり、眼のさきがもやもやと暗くなつて、全身の力が、手の指の先からふつと抜けてしまふ心地がして、編物をつづけてゆく事が出来なくなつた。

このごろは雨が陰気に降りつづいて、何をすることも、もの憂くて、きようはお座敷の縁側に籐椅子を持ち出し、ことしの春にいちど編みかけてそのままにしていたセエタを、また編みつづけてみる気になつたのである。淡い牡丹色のぼやけたような毛糸で、私はそれに、コバルトブルウの糸を足して、セエタにするつもりなのだ。そうして、この淡い牡丹色の毛糸は、いまからもう二十年の前、私がまだ初等科にかよっていた頃、お母さまがこれで私の頸巻を編んで下さつた毛糸だつた。その頸巻の端が頭巾になつていて、私はそれをかぶつて鏡を覗いてみたら、小鬼のようであつた。それに、色が、他の学友の頸巻の色と、まるで違つているので、私は、いやでいやで仕様が無かつた。関西の多額納税の学友が、「いい頸巻してはるな」と、おとなびた口調でほめて下さつたが、私は、いよいよ恥ずかしくなつて、もうそれからは、いちどもこの頸巻をした事が無く、永い事うち棄ててあつたのだ。それを、ことしの春、死蔵品の復活とやらいう意味で、ときほぐして私のセエタにしようと思つてとりかかつてみたのだが、どうも、このぼやけたような色合い

が気に入らず、また打ちすて、きようはあまりに所在ないまま、ふと取り出して、のろのろと編みつづけてみたのだ。けれども、編んでいるうちに、私は、この淡い牡丹色の毛糸と、灰色の雨空と、一つに溶け合つて、なんとも言えないくらい柔かくてマイルドな色調を作り出している事に気がついた。私は知らなかったのだ。コスチウムは、空の色との調和を考えなければならぬものだという大事なことを知らなかったのだ。調和つて、なんて美しくて素晴らしい事なんだろうと、いささか驚き、呆然ぼうぜんとした形だった。灰色の雨空と、淡い牡丹色の毛糸と、その二つを組合せると両方が同時にいきいきして来るから不思議である。手に持つている毛糸が急にほつきり暖かく、つめたい雨空もビロウドみたいに柔かく感ぜられる。そうして、モネーの霧の中の寺院の絵を思い出させる。私はこの毛糸の色に依よつて、はじめて「グウ」というものを知らされたような気がした。よいこのみ。そうしてお母さまは、冬の雪空に、この淡い牡丹色が、どんなに美しく調和するかちゃんと識しつていらしてわざわざ選んで下さったのに、私は馬鹿でいやがつて、けれども、それを子供の私に強制しようともなさらず、私のすきなようにさせて置かれたお母さま。私がこの色の美しさを、本当にわかるまで、二十年間も、この色に就ついて一言も説明なさらず、黙つて、そしらぬ振りをして待つていらしたお母さま。しみじみ、いいお母さまだと思つと

同時に、こんないいお母さまを、私と直治と二人でいじめて、困らせ弱らせ、いまに死なせてしまうのではなからうかと、ふうつとたまらない恐怖と心配の雲が胸に湧いて、あれこれ思いをめぐらせばめぐらすほど、前途にとてもおそろしい、悪い事ばかり予想せられ、もう、とても、生きておられないくらいに不安になり、指先の力も抜けて、編棒を膝に置き、大きい溜息をついて、顔を仰向け眼をつぶって、

「お母さま」

と思わず言った。

お母さまは、お座敷の隅の机すみによりかかって、ご本を読んでいらしたのだが、

「はい？」

と、不審そうに返事をなさった。

私は、まごつき、それから、ことさらに大声で、

「とうとう薔薇ばらが咲きました。お母さま、ご存じだった？ 私、いま気がついた。とうとう咲いたわ」

お座敷のお縁側のすぐ前の薔薇。それは、和田の叔父さまが、むかし、フランスだかイギリスだか、ちよつと忘れたけれど、とにかく遠いところからお持帰りになった薔薇で、

二、三箇月前に、叔父さまが、この山荘の庭に移し植えて下さった薔薇である。けさそれが、やっと一つ咲いたのを、私はちゃんと知っていたのだけれども、てれ隠しに、たったいま気づいたみたいに大げさに騒いで見せたのである。花は、濃い紫色で、りんとした傲おごりと強さがあつた。

「知っていました」

とお母さまはしずかにおつしやつて、

「あなたには、そんな事が、とても重大らしいのね」

「そうかも知れないわ。可哀かわいそう？」

「いいえ、あなたには、そういうところがあるつて言っただけなの。お勝手のマツチ箱にルナルの絵を貼はつたり、お人形のハンカチーフを作つてみたり、そういう事が好きなのね。それに、お庭の薔薇のことだつて、あなたの言うことを聞いていると、生きている人の事を言っているみたい」

「子供が無いからよ」

自分でも全く思いがけなかった言葉が、口から出た。言つてしまつて、はつとして、まの悪い思いで膝の編物をいじつていたら、

——二十九だからなあ。

そうおつしやる男の人の声が、電話で聞くようなくすぐったいバスで、はつきり聞えたような気がして、私は恥ずかしさで、頬ほおが焼けるみたいに熱くなった。

お母さまは、何もおつしやらず、また、ご本をお読みになる。お母さまは、こないだからガーゼのマスクをおかけになっていらして、そのせいか、このごろめつきり無口になった。そのマスクは、直治の言いつけに従って、おかけになっているのである。直治は、十日ほど前に、南方の島から蒼あおくろ黒い顔になって還かえつて来たのだ。

何の前触れも無く、夏の夕暮、裏の木戸から庭へはいつて来て、

「わあ、ひでえ。趣味のわるい家だ。来々軒らいらいけん。シユウマイあります、と貼りふだしろよ」
それが私とはじめて顔を合せた時の、直治の挨拶あいさつであった。

その二、三日前からお母さまは、舌を病んで寝ていらした。舌の先が、外見はなんの変りも無いのに、うごかすと痛くてならぬとおつしやって、お食事も、うすいおかゆだけで、お医者さまに見ていただいたら？　と言つても、首を振って、

「笑われます」

と苦笑いしながら、おつしやる。ルゴールを塗ってあげたけれども、少しもききめが無

いようで、私は妙にいらいらしていた。

そこへ、直治が帰還して来たのだ。

直治はお母さまの枕まくらもと元に坐つて、ただいま、と言つてお辞儀をし、すぐに立ち上つて、小さい家の中をあちこちと見て廻り、私がある後について歩いて、

「どう？ お母さまは、変つた？」

「変つた、変つた。やつれてしまつた。早く死にやいいんだ。こんな世の中に、ママなんて、とても生きて行けやしねえんだ。あまりみじめで、見ちゃおれねえ」

「私は？」

「げびて来た。男が二三人もあるような顔をしていやがる。酒は？ 今夜は飲むぜ」

私はこの部落でたつた一軒の宿屋へ行つて、おかみさんのお咲さんに、弟が帰還したから、お酒を少しわけて下さい、とたのんでみたけれども、お咲さんは、お酒はあいにく、いま切らしています、というので、帰つて直治にそう伝えたら、直治は、見た事も無い他人のような表情の顔になつて、ちえつ、交渉が下手だからそうなんだ、と言ひ、私から宿屋の在る場所を聞いて、庭下駄にわげたをつつかけて外に飛び出し、それつきり、いくら待つても家へ帰つて来なかつた。私は直治の好きだった焼き林檎りんごと、それから、卵のお料理などこ

しらえて、食堂の電球も明るいのと取りかえ、ずいぶん待って、そのうちに、お咲さんが、お勝手口からひよいと顔を出し、

「もし、もし。大丈夫でしょうか。焼酎しょうちゆうを召し上っているのですけど」

と、れいの鯉こいの眼のようなまんまるい眼を、さらに強く見はって、一大事のように、低い声で言うのである。

「焼酎しょうちゆうって。あの、メチル？」

「いいえ、メチルじゃありませんけど」

「飲んでも、病気になるらないのでしょうか？」

「ええ、でも、……」

「飲ませてやって下さい」

お咲さんは、つばきを飲み込むようにしてうなずいて帰って行った。

私はお母さまのところに行つて、

「お咲さんのところで、飲んでいるんですって」

と申し上げたら、お母さまは、少しお口を曲げてお笑いになって、

「そう。阿片アヘンのほうは、よしたのかしら。あなたは、ごはんをすませなさい。それから今

夜は、三人でこの部屋におやすみ。直治のお蒲団を、まんなかにして」

私は泣きたいような気持になった。

夜ふけて、直治は、荒い足音をさせて帰って来た。私たちは、お座敷に三人、一つの蚊帳にはいつて寝た。

「南方のお話を、お母さまに聞かせてあげたら？」

と私が寝ながら言うと、

「何も無い。何も無い。忘れてしまった。日本に着いて汽車に乗って、汽車の窓から、水田が、すばらしく綺麗に見えた。それだけだ。電気を消せよ。眠られやしねえ」

私は電燈を消した。夏の月光が洪水のように蚊帳の中に満ちあふれた。

あくる朝、直治は寢床に腹這いになって、煙草を吸いながら、遠く海のほうを眺めて、

「舌が痛いんですって？」

と、はじめてお母さまのお加減の悪いのに気がついたみたいなふうの口のきき方をした。お母さまは、ただ幽かにお笑いになった。

「そいつあ、きつと、心理的なものなんだ。夜、口をあいておやすみになるんでしよう。

だらしが無い。マスクをなさい。ガーゼにリバノール液でもひたして、それをマスクの中

に置いて置くといい」

私はそれを聞いて噴き出し、

「それは、何療法っていうの？」

「美学療法っていうんだ」

「でも、お母さまは、マスクなんか、きつとおきらいよ」

お母さまは、マスクに限らず、眼帯でも、眼鏡でも、お顔にそんなものを附つける事は大はきらいだった筈はずである。

「ねえ、お母さま。マスクをなさる？」

と私がおたずねしたら、

「致します」

とまじめに低くお答えになったので、私は、はっとした。直治の言う事なら、なんでも信じて従おうと思っっていらっっしやるらしい。

私が朝食の後に、さつき直治が言ったとおりに、ガーゼにリバノール液をひたしなどして、マスクを作り、お母さまのところに持つて行ったら、お母さまは、黙って受け取り、おやすみになったままで、マスクの紐ひもを両方のお耳に素直におかけになり、そのさまが、

本当にもう幼い童女のように、私には悲しく思われた。

お昼すぎに、直治は、東京のお友達や、文学のほうの師匠さんなどに逢わなければならぬと言つて背広に着換え、お母さまから、二千円もらつて東京へ出かけて行つてしまった。それつきり、もう十日ちかくなるのだけれども、直治は、帰つて来ないのだ。そうして、お母さまは、毎日マスクをなさつて、直治を待つていらつしやる。

「リバノールつて、いい薬なのね。このマスクをかけていると、舌の痛みが消えてしまうのですよ」

と、笑いながらおつしやつたけれども、私には、お母さまが嘘うそをついていらつしやるように思われてならないのだ。もう大丈夫、とおつしやつて、いまは起きていらつしやるけれども、食しょくよく慾よくはやつぱりあまり無い御様子だし、口数もめつきり少く、とても私は気がかりで、直治はまあ、東京で何をしているのだろう、あの小説家の上原さんなんかと一緒に東京中を遊びまわつて、東京の狂氣うずの渦うずに巻き込まれているのにちがいない、と思えば思うほど、苦しくつらくなり、お母さまに、だしぬけに薔薇ばらの事など報告して、そうして、子供が無いからよ、なんて自分にも思いがけなかったへんな事を口走つて、いよいよ、いけなくなるばかりで、

「あ」

と言つて立ち上り、さて、どこへも行くところが無く、身一つをもてあまして、ふらふら階段をのぼつて行つて、二階の洋間にはいつてみた。

ここは、こんど直治の部屋になる筈で、四、五日前に私が、お母さまと相談して、下の農家の中井さんにお手伝いをたのみ、直治の洋服箆筒だんすや机や本箱、また、蔵書やノートブックなど一ぱいつまつた木の箱五つ六つ、とにかく昔、西片町のお家の直治のお部屋にあったもの全部を、ここに持ち運び、いまに直治が東京から帰つて来たら、直治の好きな位置に、箆筒本箱などそれぞれ据すえる事にして、それまではただ雑然とここに置き放しにしていたほうがよさそうに思われたので、もう、足の踏み場も無いくらいに、部屋一ぱい散らかしたままで、私は、何気なく足もとの木の箱から、直治のノートブックを一冊取りあげて見たら、そのノートブックの表紙には、

夕顔日誌

と書きしるされ、その中には、次のような事が一ぱい書き散らされていたのである。直

治が、あの、麻薬中毒で苦しんでいた頃の手記のようであった。

焼け死ぬる思い。苦しくとも、苦しと一言、半句、叫び得ぬ、古来、未曾有、人の世は
 じまつて以来、前例も無き、底知れぬ地獄の気配を、ごまかしなさんな。

思想？ ウソだ。主義？ ウソだ。理想？ ウソだ。秩序？ ウソだ。誠実？ 真理？
 純粹？ みなウソだ。牛島の藤は、樹齡千年、熊野の藤は、数百年と称えられ、その花
 穂の如きも、前者で最長九尺、後者で五尺余と聞いて、ただその花穂にのみ、心がおどる。
 アレモ人ノ子。生キテイル。

論理は、所謂、論理への愛である。生きている人間への愛では無い。
 金と女。論理は、はにかみ、そそくさと歩み去る。

歴史、哲学、教育、宗教、法律、政治、経済、社会、そんな学問なんかより、ひとりの
 処女の微笑が尊いというファウスト博士の勇敢なる実証。

学問とは、虚栄の別名である。人間が人間でなくなろうとする努力である。

ゲエテにだつて誓つて言える。僕は、どんなにでも巧く書けます。一篇いっぺんの構成あやま
たず、適度の滑稽こっけい、読者の眼のうらを焼く悲哀、若もしくは、肅然、所謂襟いわゆるえりを正さしめ、
完璧かんぺきのお小説、朗々音読すれば、これすなわち、スクリンの説明か、はずかしくつて、
書けるかつていうんだ。どだいそんな、傑作意識が、ケチくさいというんだ。小説を読ん
で襟を正すなんて、狂人の所作しよさくである。そんなら、いっそ、羽織袴はおほかまでせにやなるまい。よ
い作品ほど、取り澄ましていないように見えるのだがなあ。僕は友人の心からたのしそ
うな笑顔を見たいばかりに、一篇の小説、わざとしくじつて、下手くそに書いて、尻餅しりもちつ
いて頭かきかき逃げて行く。ああ、その時の、友人のうれしそうな顔ったら！

文いたらず、人いたらぬ風情ふせい、おもちやのラツパを吹いてお聞かせ申し、ここに日本一
の馬鹿がいます、あなたはまだいいほうですよ、健在なれ！ と願う愛情は、これはいつ
たい何でしょう。

友人、したり顔にて、あれがあいつの悪い癖、惜しいものだ、と御述懐。愛されている
事を、ご存じ無い。

不良でない人間があるだろうか。

味気ない思い。

金が欲しい。

さもなくば、

眠りながらの自然死！

薬屋に千円ちかき借金あり。きよう、質屋の番頭をこつそり家へ連れて来て、僕の部屋へとおして、何かこの部屋に目ぼしい質草ありや、あるなら持つて行け、火急に金が要ると申せしに、番頭ろくに部屋の中を見もせず、およしなさい、あなたのお道具でもないのに、とぬかした。よろしい、それならば、僕がいままで、僕のお小遣い銭で買った品物だけ持つて行け、と威勢よく言つて、かき集めたガラクタ、質草の資格あるしろもの一つも無し。

まず、片手の石膏像せつこうぞう。これは、ヴィナスの右手。ダリヤの花にも似た片手、まっしろい片手、それがただ台上に載つているのだ。けれども、これをよく見ると、これはヴィナスが、その全裸を、男に見られて、あなやの驚き、含羞旋風がんしゅうせんふう、裸身むざん、薄くれない、残りくまなき、かツかツのほてり、からだをよじつてこの手つき、そのようなヴィナスの息もとまるほどの裸身のはじらいが、指先に指紋も無く、掌てのひらに一本の手筋もない純白

のこのきやしやな右手に依よつて、こちらの胸も苦しくなるくらいに哀れに表情せられているのが、わかる筈だ。けれども、これは、所謂、非実用のガラクタ。番頭、五十銭と値踏みせり。

その他、パリ近郊の大地図、直径一尺にちかきセルロイドの独楽こま、糸よりも細く字の書ける特製のペン先、いずれも掘出物のつもりで買った品物ばかりなのだが、番頭笑つて、もうおいとま致します、と言う。待て、と制止して、結局また、本を山ほど番頭に背負わせて、金五円也を受け取る。僕の本ほん棚だなの本は、ほとんど廉価れんかの文庫本のみにして、しかも古本屋から仕入れしものなるに依つて、質の値もおおのずから、このように安いのである。千円の借金を解決せんとして、五円也。世の中に於おける、僕の実力、おおよそかくの如し。笑いごとではない。

デカダン？　しかし、こうでもしなけりや生きておれないだよ。そんな事を言つて、僕を非難する人よりは、死ぬ！　と言つてくれる人のほうがありがたい。さつぱりする。けれども人は、めつたに、死ぬ！　とは言わないものだ。ケチくさく、用心深い偽善者どもよ。

正義？ 所謂階級闘争の本質は、そんなところにありはせぬ。人道？ 冗談じゃない。僕は知っているよ。自分たちの幸福のために、相手を倒す事だ。殺す事だ。死ね！ という宣告でなかったら、何だ。ごまかしちやいけねえ。

しかし、僕たちの階級にも、ろくな奴がない。白痴、幽霊、しゆせんど守銭奴、狂犬、ほら吹き、ゴザイマスル、雲の上から小便。

死ね！ という言葉を与えるのさえ、もったいない。

戦争。日本の戦争は、ヤケクソだ。

ヤケクソに巻き込まれて死ぬのは、いや。いつそ、ひとりで死にたいわい。

人間は、嘘をつく時には、必ず、まじめな顔をしているものである。この頃の、指導者たちの、あの、まじめさ。ぷ！

人から尊敬されようと思わぬ人たちと遊びたい。

けれども、そんないい人たちは、僕と遊んでくれやしない。

僕が早熟を装って見せたら、人々は僕を、早熟だと噂した。僕が、なまけもの^{うわさ}の振りをして見せたら、人々は僕を、なまけものだと噂した。僕が小説を書けない振りをしたら、人々は僕を、書けないのだと噂した。僕が嘘つきの振りをしたら、人々は僕を、嘘つきだと噂した。僕が金持ちの振りをしたら、人々は僕を、金持ちだと噂した。僕が冷淡を装って見せたら、人々は僕を、冷淡なやつだと噂した。けれども、僕が本当に苦しくて、思わず呻いた時、人々は僕を、苦しい振りを装っていると噂した。

どうも、くいちがう。

結局、自殺するよりほか仕様が無いのじゃないか。

このように苦しんでも、ただ、自殺で終るだけなのだ、と思ったら、声を放って泣いてしまった。

春の朝、二三輪の花の咲きほころびた梅の枝に朝日が当って、その枝にハイデルベルヒの若い学生が、ほっそりと縊れて死んでいたという。

「ママ！ 僕を叱しかつて下さいー！」

「どういう工ぐ合あいに？」

「弱虫！ つて」

「そう？ 弱虫。……もう、いいでしょう？」

ママには無類のよさがある。ママを思うと、泣きたくなる。ママへおわびのためにも、死ぬんだ。

オユルシ下サイ。イマ、イチドダケ、オユルシ下サイ。

年々や

めしいのままに

鶴つるのひな

育ちゆくらし

あわれ 太るも

(元が旦たん試作)

モルヒネ アトロモール ナルコポン パントポン パビナアル パンオピン アトロ
ピン

プライドとは何だ、プライドとは。

人間は、いや、男は、（おれはすぐれている）（おれにはいいところがあるんだ）など
と思わずに、生きて行く事が出来ぬものか。

人をきらい、人にきらわれる。

ちえくらべ。

嚴肅あほうかん|| 阿呆感

とにかくね、生きているのだからね、インチキをやっているに違いないのさ。

或る借錢申込みの手紙。

「御返事を。」

御返事を下さい。

そうして、それが必ず快報であるように。

僕はさまさまの屈辱を思い設けて、ひとりで呻いています。

芝居をしているのではありません。絶対にそうではありません。

お願いいたします。

僕は恥ずかしさのために死にそうです。

誇張ではないのです。

毎日毎日、御返事を待つて、夜も昼もがたがたふるえているのです。

僕に、砂を噛ませないで。

壁から忍び笑いの声が聞えて来て、深夜、床の中で輾転てんてんしているのです。

僕を恥ずかしい目に逢あわせないで。

姉さん！」

そこまで読んで私は、その夕顔日誌を閉じ、木の箱にかえして、それから窓のほうに歩いて行き、窓をぱいにひらいて、白い雨に煙っているお庭を見下しながら、あの頃の事を考えた。

もう、あれから、六年になる。直治の、この麻薬中毒が、私の離婚の原因になった、いえ、そう言うてはいけない、私の離婚は、直治の麻薬中毒がなくなっても、べつな何かのきっかけで、いつかは行われているように、そのように、私の生れた時から、さだまっていた事みたいな気もする。直治は、薬屋への支払いに困って、しばしば私にお金をねだった。私は山木へ嫁いだばかりで、お金などそんなに自由になるわけは無し、また、嫁ぎ先のお金を、里の弟へこっそり融通してやるなど、たいへん工合いの悪い事のようにも思われたので、里から私に付き添って来たばあやのお関さんと相談して、私の腕輪や、頸飾りや、ドレスを売った。弟は私に、お金を下さい、という手紙を寄こして、そうして、いまは苦しくて恥ずかしくて、姉上と顔を合せる事も、また電話で話す事さえ、とても出来ませんから、お金は、お関に言いつけて、京橋の×町×丁目のカヤノアパートに住んでいる、姉上も名前だけのご存じの筈の、小説家上原二郎さんのところにとどけさせるよう、上原さんは、悪徳のひとのように世の中から評判されているが、決してそんな人ではない

から、安心してお金を上原さんのところへとどけてやって下さい、そうすると、上原さんがすぐに僕に電話で知らせる事になっていくのですから、必ずそのようにお願いします、僕はこんどの中毒を、ママにだけは気附かれないのです、ママの知らぬうちに、なんとかしてこの中毒をなおしてしまうつもりなのです、僕は、こんど姉上からお金をもらったら、それでもって薬屋への借りを全部支払って、それから塩原の別荘へでも行って、健康なからだになつて帰つて来るつもりなのです、本当です、薬屋の借りを全部すましたら、もう僕は、その日から麻薬を用いる事はぴたりよすつもりです、神さまに誓います、信じて下さい、ママには内緒に、お関をつかつてカヤノアパートの上原さんに、たのみます、というような事が、その手紙に書かれていて、私はその指図さしずどおりに、お関さんにお金を持たせて、こつそり上原さんのアパートにとどけさせたものだが、弟の手紙の誓いは、いつも嘘うそで、塩原の別荘にも行かず、薬品中毒はいよいよひどくなるばかりの様子で、お金をねだる手紙の文章も、悲鳴に近い苦しい調子で、こんどこそ薬をやめると、顔をそむけたいくらいの哀切な誓いをするので、また嘘かも知れぬと思いついながらも、ついまた、ブローチなどお関さんに売らせて、そのお金を上原さんのアパートにとどけさせるのだった。

「上原さんって、どんな方？」

「小柄こがらで顔色の悪い、ぶあいそな人でございます」

と、お関さんは答える。

「でも、アパートにいらつしやる事は、めつたにございませぬです。たいてい、奥さんと、六つ七つの女のお子さんと、お二人がいらつしやるだけでございます。この奥さんは、そんなにお綺麗きれいでもございませぬけれども、お優しく、よく出来たお方かたのようでございます。あの奥さんになら、安心してお金をあずける事が出来ます」

その頃の私は、いまの私に較くらべて、いいえ、較べものにも何もならぬくらい、まるで違つた人ひとみたい、ぼんやりの、のんき者ではあつたが、それでも流石さすがに、つぎつぎと続いてしかも次第に多額のお金をねだられて、たまらなく心配になり、一日、お能からの帰り、自動車を銀座でかえして、それからひとりで歩いて京橋のカヤノアパートを訪ねた。

上原さんは、お部屋でひとり、新聞を読んでいらした。縞しまの袷あわせに、紺こん 緋がすりのお羽織おわらわを召ましていらして、お年寄りのような、お若いような、いままで見た事もない奇獣きじゆのような、へんな初印象はつしんさうを私は受取つた。

「女房はいま、子供と、一緒に、配給物を取りに」

すこし鼻声で、とぎれとぎれにそうおつしやる。私を、奥さんのお友達とでも思いちが

いしたらしかつた。私が、直治の姉だと言う事を申し上げたら、上原さんは、ふん、と笑った。私は、なぜだか、ひやりとした。

「出ましようか」

そう言つて、もう二重廻しにじゆうまわをひっかけ、下駄箱げたばこから新しい下駄を取り出しておはきになり、さつさとアパートの廊下を先に立つて歩かれた。

外は、初冬の夕暮。風が、つめたかつた。隅田川すみだがわから吹いて来る川風のような感じであつた。上原さんは、その川風にさからうように、すこし右肩をあげて築地のほうに黙つて歩いて行かれる。私は小走りに走りながら、その後を追つた。

東京劇場の裏手のビルの地下室にはいった。四、五組の客が、二十畳くらいの細長いお部屋で、それぞれ卓をはさんで、ひっそりお酒を飲んでいた。

上原さんは、コップでお酒をお飲みになつた。そうして、私にも別なコップを取り寄せて下さつて、お酒をすすめた。私は、そのコップで二杯飲んだけれども、なんともなかつた。

上原さんは、お酒を飲み、煙草たばこを吸い、そうしていつまでも黙つていた。私も、黙つていた。私はこんなところへ来たのは、生まれてはじめての事であつたけれども、とても落

ちつき、気分がよかった。

「お酒でも飲むといいんだけど」

「え？」

「いいえ、弟さん。アルコールのほうに転換するといいいんですよ。僕も昔、麻薬中毒になった事があってね、あれは人が薄気味わるがってね、アルコールだって同じ様なものなんだが、アルコールのほうは、人は案外ゆるすんだ。弟さんを、酒飲みにしちやいましょう。いいでしょう？」

「私、いちど、お酒飲みを見た事がありますわ。新年に、私が出掛けようとした時、うちの運転手の知合いの者が、自動車の助手席で、鬼のような真赤な顔まっかをして、ぐうぐう大いびきで眠っていましたの。私がおどろいて叫んだら、運転手が、これはお酒飲みで、仕様が無いんです、と言って、自動車からおろして肩にかついでどこかへ連れて行きましたの。骨が無いみたいにくったりして、何だかそれでも、ぶつぶつ言っていて、私あの時、はじめにお酒飲みつてもものを見たのですけど、面白かったわ」

「僕だって、酒飲みです」

「あら、だって、違うんでしょう？」

「あなただつて、酒飲みです」

「そんな事は、ありませんわ。私は、お酒飲みを見た事があるんですもの。まるで、違いますわ」

上原さんは、はじめて楽しそうにお笑いになつて、

「それでは、弟さんも、酒飲みにはなれないかも知れませんが、とにかく、酒を飲む人になつたほうがいい。帰りましょう。おそくなると、困るんでしょう?」

「いいえ、かまわないんですの」

「いや、実は、こつちが窮屈でいけねえんだ。ねえさん! 会計!」

「うんと高いのでしょうか。少しなら、私、持っているんですけど」

「そう。そんなら、会計は、あなただ」

「足りないかも知れせんわ」

私は、バッグの中を見て、お金がいくらあるかを上原さんに教えた。

「それだけあれば、もう二、三軒飲める。馬鹿にしてやがる」

上原さんは顔をしかめておっしゃつて、それから笑つた。

「どこかへ、また、飲みにおいでになりますか?」

と、おたずねしたら、まじめに首を振って、

「いや、もうたくさん。タキシードを拾ってあげますから、お帰りなさい」

私たちは、地下室の暗い階段をのぼって行った。一歩さきへのぼって行く上原さんが、階段の中頃なかごろで、くるとこちら向きになり、素早く私にキスをした。私は唇くちびるを固く閉じたまま、それを受けた。

べつに何も、上原さんをすきでなかったのに、それでも、その時から私に、あの「ひめぐと」が出来てしまったのだ。かたかたかたと、上原さんは走って階段を上って行って、私は不思議な透明な気分で、ゆっくり上って、外へ出たら、川風ほおが頬ほおにとても気持よかった。

上原さんに、タキシードを拾っていただいて、私たちは黙ってわかれた。

車にゆられながら、私は世間が急に海のようにひろくなったような気持がした。

「私には、恋人があるの」

或る日あ、私は、夫からおこごとをいただいて淋しくなって、ふっとそう言った。

「知っています。細田でしょう？ どうしても、思い切る事が出来ないのですか？」

私は黙っていた。

その問題が、何か気まずい事の起る度たびごと毎に、私たち夫婦の間に持ち出されるようになった。もうこれは、だめなんだ、と私は思った。ドレスの生地きじを間違つて裁断した時みたいに、もうその生地は縫い合せる事も出来ず、全部捨てて、また別の新しい生地の裁断にとりかからなければならぬ。

「まさか、その、おなかの子は」

と或る夜、夫に言われた時には、私はあまりおそろしくて、がたがた震えた。いま思うと、私も夫も、若かつたのだ。私は、恋も知らなかつた。愛、さえ、わからなかつた。私は、細田さまのおかきになる絵に夢中になって、あんなお方の奥さまになったら、どんなに、まあ、美しい日常生活を営むことが出来るでしょう、あんなよい趣味のお方と結婚するのでなければ、結婚なんて無意味だわ、と私は誰にでも言いふらしていたので、そのために、みんなに誤解されて、それでも私は、恋も愛もわからず、平気で細田さまを好きだという事を公言し、取消そうともしなかつたので、へんにもつれて、その頃、私のおなかで眠っていた小さい赤ちゃんまで、夫の疑惑の的になったりして、誰ひとり離婚などあらわに言い出したお方もいながつたのに、いつのまにやら周囲が白々しくなっていて、私は付き添いのお関さんと一緒に里のお母さまのところに帰って、それから、赤ちゃんが死

んで生れて、私は病氣になつて寝込んで、もう、山木との間は、それつきりになつてしまつたのだ。

直治は、私が離婚になつたという事に、何か責任みたいなものを感じたのか、僕は死ぬよ、と言つて、わあわあ声を挙げて、顔が腐つてしまふくらいに泣いた。私は弟に、薬屋の借りがいくらになっているのかたずねてみたら、それはおそろしいほどの金額であつた。しかも、それは弟が実際の金額を言えなくて、嘘をついていたのがあとでわかつた。あとで判明した実際の総額は、その時に弟が私に教えた金額の約三倍ちかくあつたのである。

「私、上原さんに逢つたわ。いいお方ね。これから、上原さんと一緒にお酒を飲んで遊んだらどう？ お酒つて、とても安いものじゃないの。お酒のお金くらいだったら、私いつでもあなたにあげるわ。薬屋の払いの事も、心配しないで。どうか、なるわよ」

私が上原さんと逢つて、そうして上原さんをいいお方だと言つたのが、弟を何だかひどく喜ばせたようで、弟は、その夜、私からお金をもらつて早速、上原さんのところに遊びに行つた。

中毒は、それこそ、精神の病氣なのかも知れない。私が上原さんをほめて、そうして弟から上原さんの著書を借りて読んで、偉いお方ねえ、などと言うと、弟は、姉さんなんか

にはわかるもんか、と言って、それでも、とてもうれしそうに、じゃあこれを読んでごらん、とまた別の上原さんの著書を私に読ませ、そのうちに私も上原さんの小説を本気に読むようになって、二人であれこれ上原さんの噂うわさなどして、弟は毎晩のように上原さんのところに大威張りで遊びに行き、だんだん上原さんの御計画どおりにアルコールのほうへ転換していったようであった。葉屋の支払いに就いて、私がお母さまにこっそり相談したら、お母さまは、片手で顔を覆おおいなさつて、しばらくじっとしていらつしやつたが、やがて顔を挙げて淋しそうにお笑いになり、考えたつて仕様が無いわね、何年かかるかわからないけど、毎月すこしずつでもかえして行きましようよ、とおっしゃった。

あれから、もう、六年になる。

夕顔。ああ、弟も苦しいのだろう。しかも、途みちがふさがつて、何をどうすればいいのか、いまだに何もわかっていないのだろう。ただ、毎日、死ぬ気でお酒を飲んでいるのだろう。いつそ思い切つて、本職の不良になつてしまつたらどうだろう。そうすると、弟もかえつて楽になるのではあるまいか。

不良でない人間があるだろうか、とあのノートブックに書かれていたけれども、そう言われてみると、私だつて不良、叔父さまも不良、お母さまだつて、不良みたいに思われて

来る。不良とは、優しさの事ではないかしら。

四

お手紙、書こうか、どうしようか、ずいぶん迷っていました。けれども、けき、鳩のごとく素直に、蛇のごとく慧かれ、というイエスの言葉をふと思ひ出し、奇妙に元気が出て、お手紙を差し上げる事にしました。直治の姉でございます。お忘れかしら。お忘れだったら、思い出して下さい。

直治が、こないだまたお邪魔にあがって、ずいぶんごやかいを、おかけしたようで、相すみません。(でも、本当は、直治の事は、それは直治の勝手に、私が差し出しておわびをするなど、ナンセンスみたいな気もするのです。)きようは、直治の事でなく、私の事で、お願いがあるのです。京橋のアパートで罹災なされて、それから今の御住所にお移りになった事を直治から聞きました、よっぽど東京の郊外のそのお宅にお伺いしようかと思つたのですが、お母さまがこないだからまた少しお加減が悪く、お母さまをほつといて上京する事は、どうしても出来ませぬので、それで、お手紙で申し上げる事に致しました。

あなたに、御相談してみたい事があるのです。

私のこの相談は、これまでの「女大学」の立場から見ると、非常にずるくて、けがらわしくて、悪質の犯罪でさえあるかも知れませんが、けれども私は、いいえ、私たちは、いまのままでは、とても生きて行けそうもありませんので、弟の直治がこの世で一ばん尊敬しているらしいあなたに、私のいつわらぬ気持を聞いていただき、お指図をお願いするつもりなのです。

私には、いまの生活が、たまらないのです。すき、きらいどころではなく、とても、このままでは私たち親子三人、生きて行けそうもないのです。

昨日も、くるしくて、からだも熱っぽく、息ぐるしくて、自分をもてあましていましたら、お昼すこしすぎ、雨の中を下の農家の娘さんが、お米を背負って持って来ました。そうして私のほうから、約束どおりの衣類を差し上げました。娘さんは、食堂で私と向い合っつて腰かけてお茶を飲みながら、じつに、リアルな口調で、

「あなた、ものを売って、これから先、どのくらい生活して行けるの？」
と言いました。

「はんとし半歳か、一年くらい」

と私は答えました。そうして、右手で半分ばかり顔をかくして、

「眠いの。眠くて、仕方がないの」

と言いました。

「疲れているのよ。眠くなる神経衰弱でしょう」

「そうでしょうね」

涙が出そうで、ふと私の胸の中に、リアリズムという言葉と、ロマンチズムという言葉が浮んで来ました。私に、リアリズムは、ありません。こんな具合いで、生きて行けるのかしら、と思ったら、全身に寒気さむけを感じました。お母さまは、半分御病人のようで、寝たり起きたりですし、弟は、ご存じのように心の大病人で、こちらにいる時は、しょうちゆう焼酎を飲みに、この近所の宿屋と料理屋とをかねた家へ御精勤で、三日にいちどは、私たちの衣類を売ったお金を持って東京方面へ御出張です。でも、くるしいのは、こんな事ではありません。私はただ、私自身の生命が、こんな日常生活の中で、ばしやう芭蕉の葉が散らないで腐って行くように、立ちつくしたままおのずから腐って行くのをありありと予感せられるのが、おそろしいのです。とても、たまらないのです。だから私は、「女大学」にそむいても、いまの生活からのがれ出たいのです。

それで、私、あなたに、相談いたします。

私は、いま、お母さまや弟に、はつきり宣言したいのです。私が前から、或るお方に恋をしていて、私は将来、そのお方の愛人として暮らすつもりだという事を、はつきり言っ
てしまいたいのです。そのお方は、あなたもたしかご存じの筈です。そのお方のお名前の
イニシャルは、M・Cでございます。私は前から、何か苦しい事が起ると、そのM・Cの
ところに飛んで行きたくて、こがれ死にをするような思いをして来たのです。

M・Cには、あなたと同じ様に、奥さまもお子さまもございます。また、私より、もつ
と綺麗で若い、女のお友達もあるようです。けれども私は、M・Cのところへ行くより他
ほかに、私の生きる途が無い気持なのです。M・Cの奥さまとは、私はまだ逢った事がありま
せんけれども、とても優しくてよいお方のようにございます。私は、その奥さまの事を考
えると、自分をおそろしい女だと思えます。けれども、私のいまの生活は、それ以上にお
そろしいもののような気がして、M・Cにたよる事を止せないのです。鳩のごとく素直に、
蛇のごとく慧く、私は、私の恋をしとげたいと思えます。でも、きっと、お母さまも、弟
も、また世間の人たちも、誰ひとり私に賛成して下さらないでしょう。あなたは、いかが
です。私は結局、ひとりで考えて、ひとりで行動するより他は無いのだ、と思うと、涙が

出て来ます。生れて初めての、ことなのですから。この、むずかしいことを、周囲のみんなから祝福されてしとげる法はないものかしら、とひどくややこしい代数の因数分解か何かの答案を考えるように、思いをこらして、どこかに一箇所、ぱらぱらと綺麗に解きほぐれる糸口があるような気持がして来て、急に陽気になったりなんかしているのです。

けれども、かんじんのM・Cのほうで、私をどう思っているのか。それを考えると、しよげてしまいます。謂わば、私は、押しかけ、………なんというのかしら、押しかけ女房といつてもいけないし、押しかけ愛人、とでもいおうかしら、そんなものなのですから、M・Cのほうでどうしても、いやだといったら、それっきり。だから、あなたにお願いします。どうか、あのお方に、あなたからきいてみて下さい。六年前の或る日、私の胸に幽かすかな淡い虹にじがかかって、それは恋でも愛でもなかったけれども、年月の経つほど、その虹はあざやかに色彩の濃さを増して来て、私はいままで一度も、それを見失った事はございませんでした。夕立の晴れた空にかかる虹は、やがてはかなく消えてしまいますけど、ひとの胸にかかった虹は、消えないようでございます。どうぞ、あのお方に、きいてみて下さい。あのお方は、ほんとに、私を、どう思っているのか。どうしよう。それこそ、雨後の空の虹みたいに、思っているのか。どうしようか。そうして、とつくに

消えてしまったもの？

それなら、私も、私の虹を消してしまわなければなりません。けれども、私の生命をさきに消さなければ、私の胸の虹は消えそうもございません。

御返事を、祈っています。

上原二郎様（私のチエホフ。マイ、チエホフ。M・C）

私は、このごろ、少しずつ、太って行きます。動物的な女になってゆくというよりは、ひとらしくなったのだと思っています。この夏は、ロレンスの小説を、一つだけ読みました。

御返事が無いので、もういちどお手紙を差し上げます。こないだ差し上げた手紙は、とても、ずるい、蛇のような奸策かんさくに満ち満ちていたのを、いちいち見破みやぶっておしまいになったのでしよう。本当に、私はあの手紙の一行々に狡智こうちの限りを尽してみたのです。結局、私はあなたに、私の生活をたすけていただきたい、お金がほしいという意図いずだけ、それだけの手紙だと思いいになった事でしょう。そうして、私もそれを否定いたしませぬけ

れども、しかし、ただ私が自身のパトロンが欲しいのなら、失礼ながら、特にあなたを選んでお願い申しませぬ。他にたくさん、私を可愛^{かわい}がって下さる老人のお金持などあるような気がします。げんにこないだも、妙な縁談みたいなものがあつたのです。そのお方のお名前は、あなたもご存じかも知れませんが、六十すぎた独身のおじいさんで、芸術院とかの会員だとか何だとか、そういう大師匠のひとが、私をもらいにこの山荘にやって来ました。この師匠さんは、私どもの西片町のお家の近所に住んでいましたので、私たちも隣組のよしみで、時々ま逢う事がありました。いつか、あれは秋の夕暮だったと覚えていますが、私とお母さまと二人で、自動車でその師匠さんのお家の前を通り過ぎた時、そのお方がおひとりでぼんやりお宅の門の傍^{そば}に立っていらして、お母さまが自動車の窓からちよつと師匠さんにお会釈なさつたら、その師匠さんの気むずかしそうな蒼黒^{あおくろ}いお顔が、ぱつと紅葉よりも赤くなりました。

「こいかしら」

私は、はしゃいで言いました。

「お母さまを、すきなね」

けれども、お母さまは落ちついて、

「いいえ、偉いお方」

とひとりごとのように、おっしゃいました。芸術家を尊敬するのは、私どもの家の家風のようにございます。

その師匠さんが、先年奥さまをなくなさったとかで、和田の叔父さまと謡曲のお天狗てんぐ仲間の或る宮家のお方を介し、お母さまに申し入れをなさって、お母さまは、かず子から思ったとおりの御返事を師匠さんに直接さしあげたら？ とおっしゃるし、私は深く考えるまでもなく、いやなので、私にはいま結婚の意志がございません、という事を何でもなくスラスラと書きました。

「お断りしてもいいのでしょうか？」

「そりやもう。……私も、無理な話だと思っていたわ」

その頃、師匠さんは軽井沢の別荘のほうにいらしたので、そのお別荘へお断りの御返事をさし上げたら、それから、二日目に、その手紙と行きがちがいに、師匠さんご自身、伊豆の温泉へ仕事に来た途中でちよつと立ち寄らせていただきましたとおっしゃって、私の返事の事は何もご存じでなく、出し抜けに、この山荘にお見えになったのです。芸術家というものは、おいくつになっても、こんな子供みたいな気ままな事をなさるものらしいのね。

お母さまは、お加減がわるいので、私が御相手に出て、支那間でお茶を差し上げ、

「あの、お断りの手紙、いまごろ軽井沢のほうに着いている事と存じます。私、よく考えましたのですけど」

と申し上げました。

「そうですか」

とせかせかした調子でおっしゃって、汗をお拭きになり、

「でも、それは、もう一度、よくお考えになってみて下さい。私は、あなたを、何と言つたらいいか、謂わば精神的には幸福を与える事が出来ないかも知れないが、その代り、物質的にはどんなにでも幸福にしてあげる事が出来る。これだけは、はつきり言えます。まあ、ざつくばらんの話ですが」

「お言葉の、その、幸福というのが、私にはよくわかりません。生意気を申し上げるようですが、ごめん下さい。チエホフの妻への手紙に、子供を生んでおくれ、私たちの子供を生んでおくれ、って書いてございましたわね。ニイチエだかのエッセイの中にも、子供を生ませたいと思う女、という言葉がございましたわ。私、子供がほしいのです。幸福なんて、そんなものは、どうだっていいのです。お金もほしいけど、子供を育てて行ける

だけのお金があつたら、それでたくさんですわ」

師匠さんは、へんな笑い方をなきつて、

「あなたは、珍らしい方ですね。誰にでも、思ったとおりを言える方だ。あなたのような方と一緒にいると、私の仕事にも新しい靈感が舞い下りて来るかも知れない」

と、おとしに似合わず、ちよつと気障きざみみたいな事を言いました。こんな偉い芸術家のお仕事を、もし本当に私の力で若返らせる事が出来たら、それも生き甲斐がいのある事に違いな
い、とも思いましたが、けれども、私は、その師匠さんに抱かれる自分の姿を、どうして
も考えることが出来なかつたのです。

「私に、恋のところが無くてもいいのでしようか？」

と私は少し笑つておたずねしたら、師匠さんはまじめに、

「女のかたは、それでいいんです。女のひとは、ぼんやりしていて、いいんですよ」

とおっしゃいます。

「でも、私みたいな女は、やつぱり、恋のところが無くても、結婚を考えられないのです。私、もう、大人おとななんですもの。来年は、もう、三十」

と言つて、思わず口を覆おほいたいような気持がしました。

三十。女には、二十九までは乙女の匂いおとめのにおが残っている。しかし、三十の女のからだには、もう、どこにも、乙女の匂いがない、というむかし読んだフランスの小説の中の言葉がふつと思ひ出されて、やりきれない淋しさに襲われ、外を見ると、真昼の光を浴びて海が、ガラスの破片のようにどぎつく光っていました。あの小説を読んだ時には、そりやそうだろうと軽く肯定して澄ましていた。三十歳までで、女の生活は、おしまいになると平気でそう思っていたあの頃がなつかしい。腕輪、頸飾くびかざりり、ドレス、帯、ひとつひとつ私のからだの周囲から消えて無くなって行くに従って、私のからだの乙女の匂いも次第に淡くうすれて行ったのでしよう。まずしい、中年の女。おお、いやだ。でも、中年の女の生活にも、女の生活が、やっぱり、あるんですのね。このごろ、それがわかって来ました。英人の女教師が、イギリスにお帰りの時、十九の私にこうおっしゃったのを覚えています。

「あなたは、恋をなさっては、いけません。あなたは、恋をしたら、不幸になります。恋を、なさるなら、もつと、大きくなつてからになさい。三十になつてからになさい」

けれども、そう言われても私は、きよとんとしていました。三十になつてからの事など、その頃の私には、想像も何も出来ないことでした。

「このお別荘を、お売りになるとかいう噂うわさを聞きましたが」

師匠さんは、意地わるそうな表情で、ふいとそうおっしゃいました。

私は笑いました。

「ごめんなさい。桜の園を思い出したのです。あなたが、お買いになって下さるのでしよう？」

師匠さんは、さすがに敏感にお察しになったようで、怒ったように口をゆがめて黙しました。

或る宮様のお住居すまいとして、新円五十万円でこの家を、どうこうという話があったのも事実ですが、それは立ち消えになり、その噂でも師匠さんは聞き込んだのでしょうか。でも、桜の園のロパーヒンみたいに私どもに思われているのではたまらないと、すっかりお機嫌きげんを悪くした様子で、あと、世間話を少ししてお帰りになってしまいました。

私がいま、あなたに求めているものは、ロパーヒンではございません。それは、はっきりと言えるんです。ただ、中年の女の押しかけを、引受けて下さい。

私をはじめ、あなたとお逢いしたのは、もう六年くらい昔の事でした。あの時には、私はあなたという人に就いて何も知りませんでした。ただ、弟の師匠さん、それもいくぶん悪い師匠さん、そう思っていただけでした。そうして、一緒にコップでお酒を飲んで、

それから、あなたは、ちよつと軽いイタズラをなさつたでしょう。けれども、私は平気でした。ただ、へんに身軽になつたくらいの気分でした。あなたを、すきでもきらいでも、なんでもなかつたのです。そのうちに、弟のお機嫌をとるために、あなたの著書を弟から借りて読み、面白かつたり面白くなかつたり、あまり熱心な読者ではなかつたのですが、六年間、いつの頃からか、あなたの事が霧のように私の胸に滲み込んでいたのです。

あの夜、地下室の階段で、私たちのした事も、急にいきいきとあざやかに思い出されて来て、なんだかあれは、私の運命を決定するほどの重大なことだつたような気がして、あなたがしたわしくて、これが、恋かも知れぬと思つたら、とても心細くたよりなく、ひとりだめそめそ泣きました。あなたは、他の男のひとと、まるで全然ちがっています。私は、「かもめ」のニーナのように、作家に恋しているではありません。私は、小説家などにあこがれてはいないのです。文学少女、などとお思ひになつたら、こちらも、まごつきます。私は、あなたの赤ちゃんがほしいのです。

もつとずつと前に、あなたがまだおひとりの時、そうして私もまだ山木へ行かない時にお逢いして、二人が結婚していたら、私もいまみたいに苦しまずにすんだのかも知れませんが、私はもうあなたとの結婚は出来ないものとあきらめています。あなたの奥さまを押し

しのけるなど、それはあさましい暴力みたいで、私はいやなんです。私は、おメカケ、（この言葉、言いたくなくて、たまらないのですけど、でも、愛人、と言ってみたところで、俗に言えば、おメカケに違いはないのですから、はつきり、言うわ）それだって、かまわなぃんです。でも、世間普通のお妾めかけの生活って、むずかしいものらしいのね。人の話では、お妾は普通、用が無くなると、捨てられるものですって。六十ちかくなると、どんな男のかたでも、みんな、本妻の所へお戻りになるんですって。ですから、お妾にだけはなるものじゃないって、西片町のじいやと乳母うぼが話合っているのを、聞いた事があるんです。でも、それは、世間普通のお妾のことで、私たちの場合は、ちがうような気がします。あなたにとつて、一番、大事なものは、やはり、あなたのお仕事だと思います。そうして、あなたが、私をおすきだったら、二人が仲よくする事が、お仕事のためにもいいでしょう。すると、あなたの奥さまも、私たちの事を納得して下さいます。へんな、こじつけの理窟りくつみたいだけど、でも、私の考えは、どこも間違っていないと思うわ。

問題は、あなたの御返事だけです。私を、すきなのか、きらいなのか、それとも、なんともないのか、その御返事、とてもおそろしいのだけれども、でも、伺わなければなりません。こないだの手紙にも、私、押しかけ愛人、と書き、また、この手紙にも、中年の女

の押しかけ、などと書きましたが、いまよく考えてみましたら、あなたからの御返事が無ければ、私、押しかけようにも、何も、手がかりが無く、ひとりでぼんやり痩せて行くだけでしよう。やはりあなたの何かお言葉が無ければ、ダメだったんです。

いまふつと思つた事でございますが、あなたは、小説ではずいぶん恋の冒険みたいな事をお書きになり、世間からもひどい悪漢のように噂をされていながら、本当は、常識家なんでしょう。私には、常識という事が、わからないんです。すきな事が出来さえすれば、それはいい生活だと思います。私は、あなたの赤ちゃんを生みたいのです。他のひとの赤ちゃんは、どんな事があつても、生みたくないんです。それで、私は、あなたに相談をしているのです。おわかりになりましたら、御返事を下さい。あなたのお気持を、はつきり、お知らせ下さい。

雨があがつて、風が吹き出しました。いま午後三時です。これから、一級酒（六合）の配給を貰いに行きます。ラム酒の瓶を二本、袋に入れて、胸のポケットに、この手紙をいれて、もう十分ばかりしたら、下の村に出かけます。このお酒は、弟に飲ませません。かず子が飲みます。毎晩、コップで一ぱいずついただきます。お酒は、本当は、コップで飲むものですわね。

こちらに、いらつしやいませんか？

M・C様

きょうも雨降りになりました。目に見えないような霧^{きりさめ}雨が降っているのです。毎日々々、外出もしないで御返事をお待ちしているのに、とうとうきょうまでおたよりがございませんでした。いったいあなたは、何をお考えになつているのでしょうか。こないだの手紙で、あの大師匠さんの事など書いたのが、いけなかつたのかしら。こんな縁談なんか書いて、競争心をかき立てようとしていやがる、でもお思ひになつたのでしょうか。でも、あの縁談は、もうあれつきりだつたのです。さつきも、お母さまと、その話をして笑いました。お母さまは、こないだ舌の先が痛いとおっしゃつて、直治にすすめられて、美学療法をして、その療法に依^よつて、舌の痛みもとれて、この頃はちよつとお元氣なのです。

さつき私がお縁側に立^たつて、渦^{うず}を巻きつつ吹かれて行く霧雨を眺めながら、あなたのお気持の事を考えていましたら、

「ミルクを沸^{わか}したから、いらつしやい」

とお母さまが食堂のほうからお呼びになりました。

「寒いから、うんと熱くしてみたの」

私たちは、食堂で湯気の立つている熱いミルクをいただきながら、先日の師匠さんの事を話合いました。

「あの方と、私とは、どだい何も似合いませんでしょう？」

お母さまは平気で、

「似合わない」

とおっしゃいました。

「私、こんなにわがままだし、それに芸術家というものをきらいじゃないし、おまけに、あの方にはたくさんさんの収入があるらしいし、あんな方と結婚したら、そりやいいと思うわ。だけど、ダメなの」

お母さまは、お笑いになって、

「かず子は、いけない子ね。そんなに、ダメでいながら、こないだあの方と、ゆっくり何かとたのしそうにお話をしていたでしょう。あなたの気持が、わからない」

「あら、だって、面白かったんですもの。もつと、いろいろ話をしてみたかったわ。私、

たしなみが無いのね」

「いいえ、べつたりしているのよ。かず子べつたり」

お母さまは、きょうは、とてもお元気。

そうして、きのうはじめてアップにした私の髪をごらんになって、

「アップはね、髪の毛の少いひとがするといいのよ。あなたのアップは立派すぎて、小さい冠でも載せてみたいくらい。失敗ね」

「かず子がつかり。だって、お母さまはいつだったか、かず子は頸すじが白くて綺麗だから、なるべく頸すじを隠さないように、つておっしゃったじゃないの」

「そんな事だけは、覚えているのね」

「少しでもほめられた事は、一生わすれません。覚えていたほうが、たのしいもの」

「こないだ、あの方からも、何かとほめられたのでしよう」

「そうよ。それで、べつたりになっちゃったの。私と一緒にいると靈感が、ああ、たまらない。私、芸術家はきらいじゃないんですけど、あんな、人格者みたいに、もったいぶつてるひとは、とても、ダメなの」

「直治の師匠さんは、どんなひとなの？」

私は、ひやりとしました。

「よくわからないけど、どうせ直治の師匠さんですもの、札つきの不良らしいわ」

「札つき？」

と、お母さまは、楽しそうな眼つきをなさって眩つぶやき、

「面白い言葉ね。札つきなら、かえって安全でいいじゃないの。鈴を首にさげている子猫こねこみたいで可愛らしいくらい。札のついていない不良が、こわいんです」

「そうかしら」

うれしくて、うれしくて、すうっとからだか煙になって空に吸われて行くような気持ちでした。おわかりになります？　なぜ、私が、うれしかったか。おわかりにならなかったら、

……殴るわよ。

いちど、本当に、こちらへ遊びにいらっしやいませんか？　私から直治に、あなたをお連れして来るように、って言いつけるのも、何だか不自然で、へんですから、あなたご自身の酔興から、ふつとここへ立寄ったという形にして、直治の案内でおいでになってもいいけれども、でも、なるべくならおひとりで、そうして直治が東京に出張した留守においてになって下さい。直治がいると、あなたを直治にとられてしまって、きつとあなたたちは、

お咲さんのところへ 焼酎しょうちゆうなんかを飲みに出かけて行って、それっきりになるにきまっていますから。私の家では、先祖代々、芸術家を好きだったようです。光琳こうりんという画家も、むかし私どもの京都のお家に永く滞在して、襖ふすまに綺麗な絵をかって下さったのです。だから、お母さまも、あなたの御来訪を、きつと喜んで下さると思います。あなたは、たぶん、二階の洋間におやすみという事になるでしょう。お忘れなく電燈を消して置いて下さい。私は小さい蠟燭ろうそくを片手に持って、暗い階段をのぼって行って、それは、だめ？ 早すぎるわね。

私、不良が好きなの。それも、札つきの不良が、すきな。そうして私も、札つきの不良になりたいの。そうするよりほかに、私の生きかたが、無いような気がするの。あなたは、日本で一ばんの、札つきの不良でしょう。そうして、このごろはまた、たくさんのひとが、あなたを、きたならしい、けがらわしい、と言って、ひどく憎んで攻撃しているとか、弟から聞いて、いよいよあなたを好きになりました。あなたの事ですから、きつといろいろの阿米をお持ちでしょうけれども、いまにだんだん私ひとりをすきにおなりでしょう。なぜだか、私には、そう思われて仕方が無いんです。そうして、あなたは私と一緒に暮して、毎日、たのしくお仕事が出来るでしょう。小さい時から私は、よく人から、「あ

なたと一緒にいると苦勞を忘れる」と言われて来ました。私はいままで、人からきられ
た経験が無いんです。みんなが私を、いい子だと言って下さいました。だから、あなたも、
私をおきらいの筈は、けつしてないと思うのです。

逢えばいいのです。もう、いまは御返事も何も要りません。お逢いしようございます。

私のほうから、東京のあなたのお宅へお伺いすれば一ばん簡単におめにかかれるのでし
うけれど、お母さまが、何せ半病人のようで、私は附きつきりの看護婦兼お女中さんな
のですから、どうしてもそれが出来ません。おねがいでございます。どうか、こちらへい
して下さい。ひとめお逢いしたいのです。そうして、すべては、お逢いすれば、わかるこ
と。私の口の両側に出来た幽かな皺しわを見て下さい。世紀の悲しみの皺を見て下さい。私の
どんな言葉より、私の顔が、私の胸の思いをはつきりあなたにお知らせする筈でございま
す。

さいしよに差し上げた手紙に、私の胸にかかっている虹の事を書きましたが、その虹は
螢ほたるの光みたいな、またはお星さまの光みたいな、そんなお上品な美しいものではないので
す。そんな淡い遠い思いだったら、私はこんなに苦しまず、次第にあなたを忘れて行く事
が出来たでしょう。私の胸の虹は、炎の橋です。胸が焼きこげるほどの思いなのです。麻

薬中毒者が、麻薬が切れて薬を求める時の気持だって、これほどつらくはないでしょう。間違つてはいない、よこしまではないと思いながらも、ふっと、私、たいへんな、大馬鹿の事をしようとしているのではないかしら、と思つて、ぞつとする事もあるんです。発狂しているのではないかしらと反省する、そんな気持も、たくさんあるんです。でも、私だつて、冷静に計画している事もあるんです。本当に、こちらへいちどいらして下さい。いつ、いらして下さいさつても大丈夫。私はどこへも行かずに、いつもお待ちしています。私を信じて下さい。

もう一度お逢いして、その時、いやならハッキリ言つて下さい。私のこの胸の炎は、あなたが点火したのですから、あなたが消して行つて下さい。私ひとりの力では、とても消す事が出来ないのです。とにかく逢つたら、逢つたら、私が助かります。万葉や源氏物語の頃ころだつたら、私の申しあげているようなこと、何でもない事でしたのに。私の望み。あなたの愛あい、妾めかけになつて、あなたの子供の母になる事。

このような手紙を、もし嘲ちやうしやう笑するひとがあつたら、そのひとは女の生きて行く努力を嘲笑するひとです。女のいのちを嘲笑するひとです。私は港の息づまるような澱よどんだ空気に堪え切れなくて、港の外は嵐あらしであつても、帆をあげたいのです。憩いこえる帆は、例外な

く汚い。私を嘲笑する人たちは、きつとみな、憩える帆です。何も出来やしないんです。

困った女。しかし、この問題で一ばん苦しんでいるのは私なのです。この問題に就いて、何も、ちつとも苦しんでいない傍観者が、帆を醜くだらりと休ませながら、この問題を批判するのは、ナンセンスです。私を、いい加減に何々思想なんて言ってもらいたくないんです。私は無思想です。私は思想や哲学なんてもので行動した事は、いちどだつてないんです。

世間でよいと言われ、尊敬されているひとたちは、みな嘘つきで、にせものなのを、私は知っているんです。私は、世間を信用していません。札つきの不良だけが、私の味方なんです。札つきの不良。私は、その十字架にだけは、かかって死んでもいいと思っています。万人に非難せられても、それでも、私は言いかえしてやれるんです。お前たちは、札のついていないもつと危険な不良じゃないか、と。

おわかりになりました？

こいに理由はございません。すこし理窟くちまねみたいな事を言いました。弟の口真似くちまねに過ぎなかつたような気がします。おいでをお待ちしているだけなのです。もう一度おめにかかりたいのです。それだけなのです。

待つ。ああ、人間の生活には、喜んだり怒ったり悲しんだり憎んだり、いろいろの感情があるけれども、けれどもそれは人間の生活のほんの一パーセントを占めているだけの感情で、あとの九十九パーセントは、ただ待つて暮らしているのではないでしょうか。幸福の足音が、廊下に聞えるのを今か今かと胸のつぶれる思いで待つて、からっぽ。ああ、人間の生活つて、あんまりみじめ。生れて来ないほうがよかったとみんなが考えているこの現実。そうして毎日、朝から晩まで、はかなく何かを待つている。みじめすぎます。生れて来てよかったと、ああ、いのちを、人間を、世の中を、よろこんでみとうございます。はばむ道徳を、押しつけられませんか？

M・C（マイ、チエホフのイニシャルではないんです。私は、作家にこいしているのはございません。マイ、チャイルド）

五

私は、ことしの夏、或る男のひとに、三つの手紙を差し上げたが、ご返事は無かった。どう考えても、私には、それより他に^{ほか}に生き方が無いと思われて、三つの手紙に、私のその

胸のうちを書きしたため、岬の尖端から怒濤めがけて飛び下りる気持で、投函したのに、いくら待っても、ご返事が無かった。弟の直治に、それとなくそのひとの御様子を聞いても、そのひとは何の変るところもなく、每晚お酒を飲み歩き、いよいよ不道德の作品ばかり書いて、世間のおとなたちに、ひんしゆくせられ、憎まれているらしく、直治出版業をはじめよ、などとすすめて、直治は大乗気で、あのひとの他にも二、三、小説家のかたに顧問になつてもらい、資本を出してくれるひともあるとかどうか、直治の話を聞いてみると、私の恋しているひとの身のまわりの雰囲気、私の匂いがみじんも滲み込んでいないらしく、私は恥ずかしいという思いよりも、この世の中というものが、私の考えている世の中とは、まるでちがった別な奇妙な生き物みたいな気がして来て、自分ひとりだけ置き去りにされ、呼んでも叫んでも、何の手応えの無いたそがれの秋の曠野に立たされているような、これまで味わった事のない悽愴の思いに襲われた。これが、失恋というものであるうか。曠野にこうして、ただ立ちつくしているうちに、日がとつぱり暮れて、夜露にこごえて死ぬより他は無いのだろうかと思えば、涙の出ない慟哭で、両肩と胸が烈しく浪打ち、息も出来ない気持になるのだ。

もうこの上は、何としても私が上京して、上原さんにお目にかかろう、私の帆は既に挙

げられて、港の外に出てしまったのだもの、立ちつくしているわけにゆかない、行くところまで行かなければならない、とひそかに上京の心支度をはじめたとたん、お母さまの御様子がおかしくなつたのである。

一夜、ひどいお咳せきが出て、お熱を計つてみたら、三十九度あつた。

「きよう、寒かつたからでしょう。あすになれば、なおります」

とお母さまは、咳せき込みながら小声でおっしゃつたが、私には、どうも、ただのお咳ではないように思われて、あすはとにかく下の村のお医者に来てもらおうと心にきめた。

翌ある朝、お熱は三十七度にさがり、お咳もあまり出なくなつていたが、それでも私は、村の先生のところへ行つて、お母さまが、この頃にわかにお弱りになつたこと、ゆうべからまた熱が出て、お咳も、ただの風邪のお咳と違うような気がすること等などを申し上げて、御診察をお願いした。

先生は、ではのちほど伺いましょう、これは到来物でございますが、とおっしゃつて応接間の隅すみの戸棚とだなから梨なしを三つ取り出して私に下さつた。そうして、お昼すこし過ぎ、白しろ紺くろに夏羽織をお召しになつて診察にいらした。れいの如く、ていねいに永い事、聴診や打診をなさつて、それから私のほうに真正面に向き直り、

「御心配はございません。おくすりを、お飲みになれば、なおります」とおっしゃる。

私は妙に可笑しく、笑いをこらえて、

「お注射は、いかがでしょうか」

とおたずねすると、まじめに、

「その必要は、ございませんでしょう。おかげでございますから、しずかにしていらつしやると、間もなくおかげが抜けますでしょう」

とおっしゃった。

けれども、お母さまのお熱は、それから一週間経つても下らなかつた。咳はおさまつたけれども、お熱のほうは、朝は七度七分くらいで、夕方になると九度になった。お医者は、あの翌日から、おなかをこわしたとかで休んでいらして、私がおくすりを頂きに行つて、お母さまのご容態の思わしくない事を看護婦さんに告げて、先生に伝えていただいても、普通のお風邪で心配はありません、という御返事で、水薬と散薬をくださる。

直治は相変らずの東京出張で、もう十日あまり帰らない。私ひとりで、心細さのあまり和田の叔父さまへ、お母さまの御様子の変つた事を葉書にしたためて知らせてやった。

発熱してかれこれ十日目に、村の先生が、やっと腹工はらぐみ合いがよろしくなりましたと言つて、診察しにいらした。

先生は、お母さまのお胸を注意深そうな表情で打診なさりながら、
「わかりました、わかりました」

とお叫びになり、それから、また私のほうに真正面に向き直られて、

「お熱の原因が、わかりましてございます。左肺に浸潤を起しています。でも、ご心配は
要りません。お熱は、当分つづくでしょうけれども、おしずかにしていらっしゃったら、
ご心配はございません」

とおっしゃる。

そうかしら？　と思ひながらも、おほ溺れる者の藁わらにすがる気持もあつて、村の先生のその
診断に、私は少しほつとしたところもあつた。

お医者がお帰りになつてから、

「よかつたわね、お母さま。ほんの少しの浸潤なんて、たいていのひとにあるものよ。お
気持を丈夫にお持ちになつていさえしたら、わけなくなおつてしまいますわ。ことしの夏
の季候不順がいけなかつたのよ。夏はきらい。かず子は、夏の花も、きらい」

お母さまはお眼をつぶりながらお笑いになり、

「夏の花の好きなひとは、夏に死ぬって言うから、私もことしの夏あたり死ぬのかと思っ
ていたら、直治が帰って来たので、秋まで生きてしまった」

あんな直治でも、やはりお母さまの生きるたのみの柱になっているのか、と思つたら、
つらかった。

「それでも、もう夏がすぎてしまったのですから、お母さまの危険期も峠を越したつてわ
けなのね。お母さま、お庭の萩はぎが咲いていますわ。それから、女郎花おみなえし、われもこう、桔
梗ききょう、かるかや、芒すすぎ。お庭がすっかり秋のお庭になりましたわ。十月になったら、きつと
お熱も下るでしょう」

私は、それを祈っていた。早くこの九月の、蒸暑いい、謂いわば残暑の季節が過ぎるといい。
そうして、菊が咲いて、うらかな小春日びより和わがつづくようになると、きつとお母さまのお
熱も下つてお丈夫になり、私もあのひとと逢あえるようになって、私の計画も大輪の菊の花
のように見事に咲き誇る事が出来るかも知れないのだ。ああ、早く十月になって、そうし
てお母さまのお熱が下るとよい。

和田の叔父さまにお葉書を差し上げてから、一週間ばかりして、和田の叔父さまのお取と

りはから
計 いで、以前侍医などしていらした三宅さまの老先生が看護婦さんを連れて東京から御診察にいらして下さった。

老先生は私どもの亡くなつたお父上とも御交際のあつた方なので、お母さまは、たいへんお喜びの御様子だった。それに、老先生は昔からお行儀が悪く、言葉遣いもぞんざいで、それがまたお母さまのお気に召しているらしく、その日は御診察など、そっちのけで何かとお二人で打ち解けた世間話に興じていらつしやつた。私がお勝手に、プリンをこしらえて、それをお座敷に持つて行つたら、もうその間に御診察もおすみの様子で、老先生は聴診器をだらしなく頸飾りくびかざりみたいかざりに肩にひっかけたまま、お座敷の廊下の籐椅子とういすに腰をかけ、

「僕などもね、屋台にはいつて、うどんの立食いでき。うまいも、まずいもありやしません」

と、のんきそうに世間話をつづけていらつしやる。お母さまも、何気ない表情で天井を見ながら、そのお話を聞いていらつしやる。なんでも無かつたんだ、と私は、ほつとした。

「いかがでございました？ この村の先生は、胸の左のほうに浸潤があるとかおつしやつ

ていましたけど？」

と私も急に元気が出て、三宅さまにおたずねしたら、老先生は、事もなげに、

「なに、大丈夫だ」

と軽くおっしゃる。

「まあ、よかったわね、お母さま」

と私は心から微笑して、お母さまに呼びかけ、

「大丈夫なんですって」

その時、三宅さまは籐椅子から、つと立ち上って支那間のほうへいらっしやった。何か私に用事がありげに見えたので、私はそつとその後を追った。

老先生は支那間の壁掛の蔭かげに行つて立ちどまつて、

「バリバリ音が聞えているぞ」

とおっしゃった。

「浸潤では、ございませんの？」

「違う」

「気管支カタルでは？」

私は、もはや涙ぐんでおたずねした。

「違う」

結核^{デーベ}！ 私はそれだと思いたくなかった。肺炎や浸潤や気管支カタルだったら、必ず私の力でなおしてあげる。けれども、結核だったら、ああ、もうだめかも知れない。私は足もとが、崩れて行くような思いをした。

「音、とても悪いの？ バリバリ聞えてるの？」

心細さに、私はすすり泣きになった。

「右も左も全部だ」

「だって、お母さまは、まだお元気なのよ。ごはんだって、おいしいおいしいとおっしゃって、……」

「仕方がない」

「うそだわ。ね、そんな事ないんでしょう？ バタやお卵や、牛乳をたくさん召し上ったら、なおるんでしょう？ おからだに抵抗力さえついたら、熱だつて下るんでしょう？」

「うん、なんでも、たくさん食べる事だ」

「ね？ そうでしょう？ トマトも毎日、五つくらいは召し上っているのよ」

「うん、トマトはいい」

「じゃあ、大丈夫ね？　なおるわね？」

「しかし、こんどの病気は命取りになるかも知れない。そのつもりでいたほうがいい」

人の力で、どうしても出来ない事が、この世の中にたくさんあるのだという絶望の壁の存在を、生れてはじめて知ったような気がした。

「二年？　三年？」

私は震えながら小声でたずねた。

「わからない。とにかくもう、手のつけようが無い」

そうして、三宅さまは、その日は伊豆いずの長岡温泉に宿を予約していらっしやるとかで、看護婦さんと一緒にお帰りになった。門の外までお見送りして、それから、夢中で引返してお座敷のお母さまの枕まくらもとに坐りすわ、何事も無かったように笑いかけると、お母さまは、

「先生は、なんとおっしゃっていたの？」

とおたずねになった。

「熱さえ下ればいいんですって」

「胸のほうは？」

「たいした事もないらしいわ。ほら、いつかのご病気の時みたいなのよ、きつと。いまに涼しくなったら、どんどんお丈夫になりますわ」

私は自分の嘘を信じようと思った。命取りなどというおそろしい言葉は、忘れようと思つた。私には、このお母さまが、亡くなるという事は、それは私の肉体も共に消失してしまふような感じで、とても事実として考えられないことだった。これからは何も忘れて、このお母さまに、たくさんたくさんご馳走ちそうをこしらえて差し上げよう。おさかな。スープ。罐詰かんづめ。レバ。肉汁。トマト。卵。牛乳。おすまし。お豆腐があればいいのに。お豆腐のお味噌汁みそじる。白い御飯。お餅もち。おいしそうなものは何でも、私の持物を皆売って、そうしてお母さまにご馳走してあげよう。

私は立つて、支那間へ行つた。そうして、支那間の寝椅子ねいすをお座敷の縁側ちかくに移して、お母さまのお顔が見えるように腰かけた。やすんでいらつしやるお母さまのお顔は、ちつとも病人らしくなかつた。眼は美しく澄んでいるし、お顔色も生き生きしていらつしやる。毎朝、規則正しく起床なさつて洗面所へいらして、それからお風呂場の三疊で自分で髪を結つて、身じまいをきちんとなさつて、それからお床に帰つて、お床にお坐りのままお食事をすまし、それからお床に寝たり起きたり、午前中はずっと新聞やご本を読ん

でいらして、熱の出るのは午後だけである。

「ああ、お母さまは、お元気なのだ。きつと、大丈夫なのだ」

と私は、心の中で三宅さまのご診断を強く打ち消した。

十月になって、そうして菊の花の咲く頃になれば、など考えているうちに私は、うとうとと、うたた寝をはじめた。現実には、私はいちども見た事の無い風景なのに、それでも夢では時々その風景を見て、ああ、またここへ来たと思うなじみの森の中の湖のほとりに私は出た。私は、和服の青年と足音も無く一緒に歩いてきた。風景全体が、みどり色の霧のかかっているような感じであった。そうして、湖の底に白いきやしやな橋が沈んでいた。「ああ、橋が沈んでいる。きようは、どこへも行けない。このホテルでやすみましよう。たしか、空いた部屋があつた筈だ」

湖のほとりに、石のホテルがあつた。そのホテルの石は、みどり色の霧でしっとり濡れていた。石の門の上に、金文字でほそく、HOTEL SWITZERLANDと彫り込まれていた。

SWIと読んでいるうちに、不意に、お母さまの事を思い出した。お母さまは、どうなさるのだろう。お母さまも、このホテルへいらっしやるのかしら？ と不審になった。そうして、青年と一緒に石の門をくぐり、前庭へはいった。霧の庭に、アジサイに似た赤い大

きい花が燃えるように咲いていた。子供の頃、お蒲団ふとんの模様に、真赤まっかなアジサイの花が散らされてあるのを見て、へんに悲しかったが、やっぱり赤いアジサイの花って本当にあるものなんだと思つた。

「寒くない？」

「ええ、少し。霧でお耳が濡れて、お耳の裏が冷たい」

と言つて笑いながら、

「お母さまは、どうなさるのかしら」

とたずねた。

すると、青年は、とても悲しく慈愛深く微笑ほほえんで、

「あのお方は、お墓の下です」

と答えた。

「あ」

と私は小さく叫んだ。そうだったのだ。お母さまは、もういらっしやらなかつたのだ。お母さまのお葬とむらいも、とつくに済ましていたのじゃないか。ああ、お母さまは、もうお亡くなりになつたのだと意識したら、言い知れぬ凄さびしさに身震いして、眼がさめた。

ヴェランダは、すでに黄昏たそがれだった。雨が降っていた。みどり色のさびしきは、夢のま
ま、あたり一面にただよっていた。

「お母さま」

と私は呼んだ。

静かなお声で、

「何してるの？」

というご返事があった。

私はうれしさに飛び上って、お座敷へ行き、

「いまね、私、眠っていたのよ」

「そう。何をしているのかしら、と思っていたの。永いおひる寝ね」

と面白そうにお笑いになった。

私はお母さまのこうして優雅に息づいて生きていらっしゃる事が、あまりうれしくて、
ありがたくて、涙ぐんでしまった。

「御夕飯のお献立は？ ご希望がございましたか？」

私は、少しはしゃいだ口調でそう言った。

「いいの。なんにも要らない。きょうは、九度五分にあがったの」

にわかに私は、ペしやんこにしよげた。そうして、途方にくれて薄暗い部屋の中をぼんやり見廻し、ふと、死にたくなつた。

「どうしたんでしよう。九度五分なんて」

「なんでもないの。ただ、熱の出る前が、いやなのよ。頭がちよつと痛くなつて、寒気がして、それから熱が出るの」

外は、もう、暗くなつていて、雨はやんだようだが、風が吹き出していた。灯をつけて、食堂へ行こうとすると、お母さまが、

「まぶしいから、つけないで」

とおっしゃつた。

「暗いところで、じつと寝ていらつしやるの、おいやでしよう」

と立つたまま、おたずねすると、

「眼をつぶつて寝ているのだから、同じことよ。ちつとも、さびしくない。かえつて、まぶしいのが、いやなの。これから、ずっと、お座敷の灯はつけないでね」

とおっしゃつた。

私には、それもまた不吉な感じで、黙ってお座敷の灯を消して、隣りの間へ行き、隣りの間のスタンドに灯をつけ、たまらなく侘びしくなつて、いそいで食堂へ行き、罐詰の鮭を冷たいごはんにのせて食べたなら、ほろほろと涙が出た。

風は夜になつていよいよ強く吹き、九時頃から雨もまじり、本当の嵐になつた。二、三日前に巻き上げた縁先の簾が、ばたんばたと音をたてて、私はお座敷の隣りの間で、ローザルクセンブルグの「経済学入門」を奇妙な興奮を覚えながら読んでいた。これは私が、こないだお二階の直治の部屋から持つて来たものだが、その時、これと一緒に、レニン選集、それからカウツキイの「社会革命」なども無断で拝借して来て、隣りの間の私の机の上のせて置いたら、お母さまが、朝お顔を洗いいらした帰りに、私の机の傍を通り、ふとその三冊の本に目をとどめ、いちいちお手にとつて、眺めて、それから小さい溜息をついて、そつとまた机の上に置き、淋しいお顔で私のほうをちらと見た。けれども、その眼つきは、深い悲しみに満ちていながら、決して拒否や嫌悪のそれではなかった。お母さまのお読みになる本は、ユーゴー、デュマ父子、ミュッセ、ドオデエなどであるが、私はそのような甘美な物語の本にだつて、革命のにおいがあるのを知っている。お母さまのように、天性の教養、という言葉もへんだが、そんなものをお持ちのお方は、案外なんで

もなく、当然の事として革命を迎える事が出来るのかも知れない。私だって、こうして、ローザルクセンブルグの本など読んで、自分がキザったらしく思われる事もないではないが、けれどもまた、やはり私は私なりに深い興味を覚えるのだ。ここに書かれてあるのは、経済学という事になっているのだが、経済学として読むと、まことにつまらない。実に単純でわかり切った事ばかりだ。いや、或いは、私には経済学というものがまったく理解できないのかも知れない。とにかく、私には、すこしも面白くない。人間というものは、ケチなもので、そうして、永遠にケチなものだという前提が無いと全く成り立たない学問で、ケチでない人にとっては、分配の問題でも何でも、まるで興味の無い事だ。それでも私はこの本を読み、べつなところで、奇妙な興奮を覚えるのだ。それは、この本の著者が、何の躊躇ちゆうちよも無く、片端から旧来の思想を破壊して行くがむしやらかな勇氣である。どのよう道徳に反しても、恋するひとのところへ涼しくさっさと走り寄る人妻の姿さえ思い浮ぶ。破壊思想。破壊は、哀れで悲しくて、そうして美しいものだ。破壊して、建て直して、完成しようという夢。そうして、いったん破壊すれば、永遠に完成の日が来ないかも知れぬのに、それでも、したう恋ゆえに、破壊しなければならぬのだ。革命を起さなければならぬのだ。ローザはマルキシズムに、悲しくひたむきの恋をしている。

あれは、十二年前の冬だった。

「あなたは、更級さらしな日記の少女なのね。もう、何を言っても仕方が無い」

そう言つて、私から離れて行つたお友達。あのお友達に、あの時、私はレニンの本を読まないで返したのだ。

「読んだ？」

「ごめんね。読まなかつたの」

ニコライ堂の見える橋の上だった。

「なぜ？ どうして？」

そのお友達は、私よりさらに一寸くらい背せいが高く、語学がとてもよく出来て、赤いベレー帽がよく似合つて、お顔もジョコンダみたいだという評判の、美しいひとだった。

「表紙の色が、いやだったの」

「へんなひと。そうじゃないんでしよう？ 本当は、私をこわくなつたのでしよう？」

「こわかないわ。私、表紙の色が、たまらなかつたの」

「そう」

と淋しそうに言い、それから、私を更級日記だと言い、そうして、何を言っても仕方が

ない、ときめてしまった。

私たちは、しばらく黙って、冬の川を見下みおろしていた。

「ご無事で。もし、これが永遠の別れなら、永遠に、ご無事で。バイロン」

と言い、それから、そのバイロンの詩句を原文で口早しやうに誦して、私のからだを軽く抱いた。

私は恥ずかしく、

「ごめんなさいね」

と小声でわびて、お茶の水駅のほうに歩いて、振り向いてみると、そのお友達は、やはり橋の上に立ったまま、動かないで、じっと私を見つめていた。

それつきり、そのお友達と逢わない。同じ外人教師の家へかよっていたのだけでも、学校がちがっていたのである。

あれから十二年たったけれども、私はやっぱり更級日記から一步も進んでいなかった。いったいまあ、私はそのあいだ、何をしていたのだろう。革命を、あこがれた事も無かつたし、恋さえ、知らなかった。いままで世間のおとなたちは、この革命と恋の二つを、最も愚かしく、いまわしいものとして私たちに教え、戦争の前も、戦争中も、私たちはその

とおりに思い込んでいたのだが、敗戦後、私たちは世間のおとなを信頼しなくなつて、何でもあのひとたちの言う事の反対のほうに本当の生きる道があるような気がして来て、革命も恋も、実はこの世で最もよくて、おいしい事で、あまりいい事だから、おとなのひとたちは意地わるく私たちに青い葡萄ぶどうだと嘘うそついて教えていたのに違いないと思うようになったのだ。私は確信したい。人間は恋と革命のために生れて来たのだ。

すつと襖ふすまがあいて、お母さまが笑いながら顔をお出しになつて、

「まだ起きていらつしやる。眠くないの？」
とおつしやつた。

机の上の時計を見たら、十二時だつた。

「ええ、ちつとも眠くないの。社会主義のご本を読んでいたら、興奮しちゃいましたわ」
「そう。お酒ないの？ そんな時には、お酒を飲んでやすむと、よく眠れるんですけどね」
とからかうような口調でおつしやつたが、その態度には、どこやらデカダンと紙一重のなまめかしさがあつた。

やがて十月になつたが、からりとした秋晴れの空にはならず、梅雨時つゆどきのような、じめじ

めして蒸し暑い日が続いた。そうして、お母さまのお熱は、やはり毎日夕方になると、三十八度と九度のあいだを上下した。

そうして或る朝、おそろしいものを私は見た。お母さまのお手が、むくんでいたので。

朝ごはんが一ばんおいしいと言つていらしたお母さまも、このごろは、お床に坐つて、ほんの少し、おかゆを軽く一碗、おかずも匂いの強いものは駄目で、その日は、松茸のお清汁をさし上げたのに、やつぱり、松茸の香さえおいやになつていらつしやる様子で、お椀をお口元まで持つて行つて、それきりまたそつとお膳の上におかえしになつて、その時、私は、お母さまの手を見て、びつくりした。右の手がふくらんで、まあるくなつていたので。

「お母さま！ 手、なんともないの？」

お顔さえ少し蒼く、むくんでいるように見えた。

「なんでもないの。これくらい、なんでもないの」

「いつから、腫れたの？」

お母さまは、まぶしそうなお顔をなさつて、黙つていらした。私は、声を挙げて泣きだくなつた。こんな手は、お母さまの手じゃない。よそのおばさんの手だ。私のお母さまの

お手は、もつとほそくて小さいお手だ。私のよく知っている手。優しい手。可愛い手。あの手は、永遠に、消えてしまったのだろうか。左の手は、まだそんなに腫れていなかったけれど、とにかく傷ましく、見ている事が出来なくて、私は眼をそらし、床の間の花籠はなかごをにらんでいた。

涙が出そうで、たまらなくなつて、つと立つて食堂へ行ったら、直治がひとりで、半熟卵をたべていた。たまに伊豆のこの家にいる事があつても、夜はきまつてお咲さんのところへ行つて、焼酎しょうちゆうを飲み、朝は不機嫌な顔で、ごはんは食わずに半熟の卵を四つか五つ食べるだけで、それからまた二階へ行つて、寝たり起きたりなのである。

「お母さまの手が腫れて」

と直治に話しかけ、うつむいた。言葉をつづける事が出来ず、私は、うつむいたまま、肩で泣いた。

直治は黙っていた。

私は顔を挙げて、

「もう、だめなの。あなた、気が附かなかつた？ あんなに腫れたら、もう、駄目なの」と、テーブルの端を掴んで言った。

直治も、暗い顔になつて、

「近いぞ、そりや。ちえつ、つまらねえ事になりやがった」

「私、もう一度、なおしたいの。どうかして、なおしたいの」

と右手で左手をしぼりながら言つたら、突然、直治が、めそめそと泣き出して、

「なんにも、いい事が無えじやねえか。僕たちには、なんにもいい事が無えじやねえか」

と言いながら、滅茶苦茶めっちゃくちゃにこぶしで眼をこすつた。

その日、直治は、和田の叔父さまにお母さまの容態を報告し、今後の事の指図さしずを受けに上京し、私はお母さまのお傍そばにいない間、朝から晩まで、ほとんど泣いていた。朝霧の中を牛乳をとりに行く時も、鏡に向つて髪を撫なでつけながらも、口紅を塗りながらも、いつも私は泣いていた。お母さまと過した仕合せの日の、あの事この事が、絵のように浮んで来て、いくらでも泣けて仕様が無かつた。夕方、暗くなつてから、支那間のヴェランダへ出て、永いことすすり泣いた。秋の空に星が光つていて、足許あしもとに、よその猫ねこがうずくまつて、動かなかつた。

翌日、手の腫れは、昨日よりも、また一そうひどくなつていた。お食事は、何も召し上げなかつた。お蜜柑みかんのジュースも、口が荒れて、しみて、飲めないとおっしゃつた。

「お母さま、また、直治のあのマスクを、なさったら？」

と笑いながら言うつもりであったが、言っているうちに、つらくなって、わっと声を挙げて泣いてしまった。

「毎日いそがしくて、疲れるでしょう。看護婦さんを、やとつて頂戴ちよっだい」

と静かにおっしゃったが、ご自分のおからだよりも、かず子の身を心配していらつしやる事がよくわかって、なおの事かなしく、立って、走って、お風呂場の三畳に行つて、思いのたけ泣いた。

お昼すこし過ぎ、直治が三宅さまの老先生と、それから看護婦さん二人を、お連れして来た。

いつも冗談ばかりおっしゃる老先生も、その時は、お怒りになっていらつしやるような素振りで、どしどし病室へはいつて来られて、すぐにご診察を、おはじめになった。そうして、誰に言うともなく、

「お弱りになりましたね」

と一こと低くおっしゃって、カンフルを注射して下さい。

「先生のお宿は？」

とお母さまは、うわ言のようにおっしやる。

「また長岡です。予約してありますから、ご心配無用。このご病人は、ひとの事など心配なさらず、もつとわがままに、召し上りたいものは何でも、たくさん召し上るようになければいけませんね。栄養をとったら、よくなります。明日また、まいります。看護婦をひとり置いて行きますから、使ってみてください」

と老先生は、病床のお母さまに向つて大きな声で言い、それから直治に眼くばせして立ち上つた。

直治ひとり、先生とお供の看護婦さんを送つて行つて、やがて帰つて来た直治の顔を見ると、それは泣きたいのを^{こら}ええている顔だった。

私たちは、そつと病室から出て、食堂へ行つた。

「だめなの？　そうでしょう？」

「つまらねえ」

と直治は口をゆがめて笑つて、

「衰弱が、ばかに急激にやつて来たらしいんだ。今、^{こん}明^{みょう}日^{にち}も、わからねえと言つていやがつた」

と言っているうちに直治の眼から涙があふれて出た。

「ほうぼうへ、電報を打たなくてもいいかしら」

私はかえって、しんと落ちついて言った。

「それは、叔父さんにも相談したが、叔父さんは、いまはそんな人集めの出来る時代では無いと言っていた。来ていただいても、こんな狭い家では、かえって失礼だし、この近くには、ろくな宿もないし、長岡の温泉にだって、二部屋も三部屋も予約は出来ない、つまり、僕たちはもう貧乏で、そんなお偉えらがたを呼び寄せる力が無えってわけなんだ。叔父さんは、すぐあとで来る筈だが、でも、あいつは、昔からケチで、頼みにも何もなりやしねえ。ゆうべだつてもう、ママの病気はそちのけで、僕にさんざんのお説教だ。ケチなやつからお説教されて、眼がさめたなんて者は、古今東西にわたって一人もあつた例ためしが無えんだ。姉と弟でも、ママとあいつとではまるで、雲うんでい泥のちがいなんだからなあ、いやになるよ」

「でも、私はとにかく、あなたは、これから叔父さまにたよらなければ、……」

「まっぴらだ。いつそ乞食こしきになったほうがいい。姉さんこそ、これから、叔父さんによるしくおすがり申し上げるさ」

「私には、……」

涙が出た。

「私には、行くところがあるの」

「縁談？ きまつてるの？」

「いいえ」

「自活か？ はたらく婦人。よせ、よせ」

「自活でもないの。私ね、革命家になるの」

「へえ？」

直治は、へんな顔をして私を見た。

その時、三宅先生の連れていらした附添いの看護婦さんが、私を呼びに来た。

「奥さまが、何かご用のようでございます」

いそいで病室に行つて、お蒲団ふとんの傍に坐り、

「何？」

と顔を寄せてたずねた。

けれども、お母さまは、何か言いたげにして、黙つていらっしやる。

「お水？」

とたずねた。

幽かに首を振る。お水でも無いらしかった。

しばらくして、小さいお声で、

「夢を見たの」

とおっしゃった。

「そう？　どんな夢？」

「蛇の夢」

私は、ぎよつとした。

「お縁側の沓脱石の上に、赤い縞のある女の蛇が、いるでしょう。見てごらん」

私はからだの寒くなるような気持で、つと立ってお縁側に出て、ガラス戸越しに、見ると、沓脱石の上に蛇が、秋の陽を浴びて長くのびていた。私は、くらくらと目まいした。

私はお前を知っている。お前はあの時から見ると、すこし大きくなって老けているけど、でも、私のために卵を焼かれたあの女蛇なのね。お前の復讐は、もう私よく思い知ったから、あちらへお行き。さつさと、向うへ行ってお呉れ。

と心の中で念じて、その蛇を見つめていたが、いつかな蛇は、動こうとしなかった。私はなぜだか、看護婦さんに、その蛇を見られたくなかった。トンと強く足踏みして、

「いませんわ、お母さま。夢なんて、あてになりませんわよ」

とわざと必要以上の大声で言つて、ちらと沓脱石のほうを見ると、蛇は、やつと、からだを動かし、だらだらと石から垂れ落ちて行つた。

もうだめだ。だめなのだと、その蛇を見て、あきらめが、はじめて私の心の底に湧わいて出た。お父上のお亡くなりになる時にも、枕もとに黒い小さい蛇がいたというし、またあの時に、お庭の木という木に蛇がからみついていたのを、私は見た。

お母さまはお床の上に起き直るお元気もなくなつたようで、いつもうつらうつらしていらして、もうおからだをすっかり附添いの看護婦さんにまかせて、そうして、お食事は、もうほとんど喉のどをとおらない様子であつた。蛇を見てから、私は、悲しみの底を突き抜けた心の平安、とでも言つたらいいのかしら、そのような幸福感にも似た心のゆとりが出て来て、もうこの上は、出来るだけ、ただお母さまのお傍にしようと思つた。

そうしてその翌ある日から、お母さまの枕元にぴったり寄り添って坐つて編物などをした。私は、編物でもお針でも、人よりずっと早いけれども、しかし、下手だつた。それで、い

つもお母さまは、その下手なところを、いちいち手を取って教えて下さったものである。その日も私は、別に編みたい気持ちも無かったのだが、お母さまの傍にべったりくっついていても不自然でないように、恰好かっこうをつけるために、糸の箱を持ち出して余念無げに編物をはじめたのだ。

お母さまは私の手もとをじっと見つめて、

「あなたの靴くつ下したをあむんでしよう？ それなら、もう、八つふやさなければ、はくとき窮屈よ」

とおっしゃった。

私は子供の頃、いくら教えて頂いても、どうもうまく編めなかったが、その時のようにまごつき、そうして、恥ずかしく、なつかしく、ああもう、こうしてお母さまに教えていただく事も、これでおしまいと思うと、つい涙で編目が見えなくなった。

お母さまは、こうして寝ていらつしやると、ちつともお苦しそうでなかった。お食事は、もう、けさから全然とおらず、ガーゼにお茶をひたして時々お口をしめしてあげるだけなのだ、しかし意識は、はっきりしていて、時々私におだやかに話しかける。

「新聞に陛下のお写真が出ていたようだけど、もういちど見せて」

私は新聞のその箇所をお母さまのお顔の上にかざしてあげた。

「お老けになった」

「いいえ、これは写真がわるいのよ。こないだのお写真なんか、とてもお若くて、はしやいでいらしたわ。かえってこんな時代を、お喜びになっていらっしやるんでしよう」

「なぜ？」

「だって、陛下もこんど解放されたんですもの」

お母さまは、淋しそうにお笑いになった。それから、しばらくして、

「泣きたくても、もう、涙が出なくなったのよ」

とおっしゃった。

私は、お母さまはいま幸福なのではないかしら、とふと思った。幸福感というものは、悲哀の川の底に沈んで、幽かに光っている砂金のようなものではなからうか。悲しみの限りを通り過ぎて、不思議な薄明りの気持、あれが幸福感というものならば、陛下も、お母さまも、それから私も、たしかにいま、幸福なのである。静かな、秋の午前。日ざしの柔らかな、秋の庭。私は、編物をやめて、胸の高さに光っている海を眺め、

「お母さま。私いままで、ずいぶん世間知らずだったのね」

と言い、それから、もつと言いたい事があつたけれども、お座敷の隅で静脈注射の支度などしている看護婦さんに聞かれるのが恥ずかしくて、言うのをやめた。

「いままでつて、……」

とお母さまは、薄くお笑いになつて聞きとがめて、

「それでは、いまは世間を知っているの？」

私は、なぜだか顔が真赤になつた。

「世間は、わからない」

とお母さまはお顔を向うむきにして、ひとりごとのように小さい声でおっしゃる。

「私には、わからない。わかつているひとなんか、無いんじゃないの？　いつまで経つても、みんな子供です。なんにも、わかつてやしないのです」

けれども、私は生きて行かなければならないのだ。子供かも知れないけれども、しかし、甘えてばかりもおられなくなつた。私はこれから世間と争つて行かなければならないのだ。ああ、お母さまのように、人と争わず、憎まざうらまず、美しく悲しく生しょうがい涯がを終る事の出来る人は、もうお母さまが最後で、これからの世の中には存在し得ないのではなからうか。死んで行くひとは美しい。生きるといふ事。生き残るといふ事。それは、たいへん

醜くて、血の匂いのする、きたならしい事のような気がする。私は、みごもって、穴を掘る蛇の姿を畳の上に思い描いてみた。けれども、私には、あきらめ切れないものがあるのだ。あさましくてもよい、私は生き残って、思う事をしとげるために世間と争って行こう。お母さまのいよいよ亡くなるという事がきまると、私のロマンチズムや感傷が次第に消えて、何か自分が油断のならぬ悪がしこい生きものに変って行くような気分になった。

その日のお昼すぎ、私がお母さまの傍で、お口をうるおしてあげていると、門の前に自動車がとまった。和田の叔父さまが、叔母さまと一緒に東京から自動車で馳せつけて来て下さったのだ。叔父さまが、病室にはいつていらして、お母さまの枕まくらもと元に黙ってお坐りになったら、お母さまは、ハンケチでご自分のお顔の下半分をかくし、叔父さまのお顔を見つめたまま、お泣きになった。けれども、泣き顔になっただけで、涙は出なかった。お人形のような感じだった。

「直治は、どこ？」

と、しばらくしてお母さまは、私のほうを見ておっしゃった。

私は二階へ行つて、洋間のソファに寝そべって新刊の雑誌を読んでいる直治に、
「お母さまが、お呼びですよ」

というど、

「わあ、また愁歎しゆうたん場か。汝等なんじらは、よく我慢してあそこに頑張がんぢやうっておれるね。神経が太いんだね。薄情はくじやうなんだね。我等は、何とも苦しくて、実に心こころは熱ねつすれども肉にく体たいよわく、とてもママの傍わらわにいる気力は無い」

などと言いながら上うわ衣ぎを着て、私と一緒に二階から降りて来た。

二人ならんでお母さまの枕もとに坐ると、お母さまは、急にお蒲団の下から手をお出しになつて、そうして、黙もくつて直治のほうを指差し、それから私を指差し、それから叔父さまのほうへお顔をお向けになつて、両方の掌をひたとお合せになつた。

叔父さまは、大きくうなずいて、

「ああ、わかりましたよ。わかりましたよ」

とおっしゃつた。

お母さまは、ご安心なさつたように、眼を軽くつぶつて、手をお蒲団の中へそつとおいれになつた。

私も泣き、直治もうつむいて嗚咽おえつした。

そこへ、三宅さまの老先生が、長岡からいらして、取り敢あえず注射した。お母さまも、

叔父さまに逢えて、もう、心残りが無いとお思ひになったか、

「先生、早く、楽にして下さいな」

とおっしゃった。

老先生と叔父さまは、顔を見合せて、黙って、そうしてお二人の眼に涙がきらと光った。私は立つて食堂へ行き、叔父さまのお好きなキツネうどんをこしらえて、先生と直治と叔母さまと四人分、支那間へ持って行き、それから叔父さまのお土産の丸ノ内ホテルのサンドウィッチを、お母さまにお見せして、お母さまの枕元に置くと、

「忙しいでしょう」

とお母さまは、小声でおっしゃった。

支那間で皆さんがしばらく雑談をして、叔父さま叔母さまは、どうしても今夜、東京へ帰らなければならぬ用事があるとかで、私に見舞いのお金包を手渡し、三宅さまも看護婦さんと一緒にお帰りになる事になり、附添いの看護婦さんに、いろいろ手当の仕方を言いつけ、とにかくまだ意識はしっかりしているし、心臓のほうもそんなにまいっていないから、注射だけでも、もう四、五日は大丈夫だろうという事で、その日いったん皆さんが自動車で東京へ引き上げたのである。

皆さんをお送りして、お座敷へ行くと、お母さまが、私にだけ笑う親しげな笑いかたをなさって、

「忙しかつたでしょう」

と、また、囁くささやような小さいお声でおっしゃった。そのお顔は、活いき活いきとして、むしろ輝いているように見えた。叔父さまにお逢い出来てうれしかったのだらう、と私は思った。

「いいえ」

私もすこし浮き浮きした気分になって、につこり笑った。

そうして、これが、お母さまとの最後のお話であった。

それから、三時間ばかりして、お母さまは亡くなったのだ。秋のしずかな黄たそが昏れ、看護婦さんに脈をとられて、直治と私と、たった二人の肉親に見守られて、日本で最後の貴婦人だった美しいお母さまが。

お死顔は、殆ほとんど、変らなかつた。お父上の時は、さつと、お顔の色が変つたけれども、お母さまのお顔の色は、ちつとも変らずに、呼吸だけが絶えた。その呼吸の絶えたのも、いつと、はつきりわからぬ位であつた。お顔のむくみも、前日あたりからとれていて、頬ほお

が蠟ろうのようにすべすべして、薄くちびるい唇が幽かにゆがんで微笑ほほえみを含んでいようにも見えて、生きているお母さまより、なまめかしかつた。私は、ピエタのマリヤに似ていると思った。

六

戦鬪、開始。

いつまでも、悲しみに沈んでもおられなかつた。私には、是非とも、戦いとらなければならぬものがあつた。新しい倫理。いいえ、そう言つても偽善めく。恋。それだけだ。口ーザが新しい経済学にたよらなければ生きておられなかつたように、私はいま、恋一つにすがらなければ、生きて行けないのだ。イエスが、この世の宗教家、道徳家、学者、権威者の偽善をあばき、神の真の愛情というものを少しも躡ちゆうちよ躡ちゆうちよするところなくありのままに人々に告げあらわさんがために、その十二弟子でしをも諸方に派遣なさろうとするに当つて、弟子たちに教え聞かせたお言葉は、私のこの場合にも全然、無関係でないように思われた。「帯おびのなかに金きん・銀ぎんまたは銭ぜにを持つな。旅たびの囊ふくろも、二枚にまいの下衣したぎも、鞋くつも、杖つえも持つな。視みよ、我われなんじらを遣つかすは、羊ひつじを豺狼おおかみのなかに入るるが如ごとし。この故ゆえに蛇へびのごとく慧さとく、

鳩のごとく素直なれ。人々に心せよ、それは汝らを衆議所に付し、会堂にて鞭たんだ。また汝等わが故によりて、司たち王たちの前に曳かれん。かれら汝らを付さば、如何なを言わんと思煩うな、言うべき事は、その時さずけられるべし。これ言うものは汝等にあらざ、其の中にありて言いたまう汝らの父の霊なり。又なんじら我が名のために凡ての人に憎まれん。されど終まで耐え忍ぶものは救われるべし。この町にて、責めらるる時は、かの町に逃れよ。誠に汝らに告ぐ、なんじらイスラエルの町々を巡り尽さぬうちに人の子は来るべし。

身を殺して靈魂をこらし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな、平和にあらざ、反つて剣を投ぜん為に来れり。それ我が来れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑より分たん為なり。人の仇は、その家の者なるべし。我よりも父または母を愛する者は、われに相応しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、われに相応しからず。又おのが十字架をとりて我に従わぬ者は、我に相応しからず。生命を得る者は、これを失ひ、我がために生命を失う者は、これを得べし」

戦闘、開始。

もし、私が恋ゆえに、イエスのこの教えをそっくりそのまま必ず守ることを誓ったら、イエスさまはお叱りしかになるかしら。なぜ、「恋」がわるくて、「愛」がいいのか、私にはわからない。同じもののような気がしてならない。何だかわからぬ愛のために、恋のために、その悲しさのために、身みと靈魂たましいとをゲヘナにて滅し得る者もの、ああ、私は自分こそ、それだと言いたいのだ。

叔父さまたちのお世話で、お母さまの密葬を伊豆で行い、本葬は東京ですまして、それからまた直治と私は、伊豆の山荘で、お互い顔を合せても口をきかぬような、理由のわからぬ気まずい生活をして、直治は出版業の資本金と称して、お母さまの宝石類を全部持ち出し、東京で飲み疲れると、伊豆の山荘へ大病人のような真まっさお蒼な顔をしてふらふら帰つて来て、寝て、或る時、若いダンサアふうのひとを連れて来て、さすがに直治も少し間が悪そうにしているので、

「きょう、私、東京へ行つてもいい？ お友だちのところへ、久し振りで遊びに行つてみたいの。二晩か、三晩、泊つて来ますから、あなた留守番してね。お炊事は、あのかたに、たのむといいわ」

直治の弱味にすかさず附け込み、謂いわば蛇のごとく慧く、私はバッグにお化粧品やパン

など詰め込んで、きわめて自然に、あのひとと逢いに上京する事が出来た。

東京郊外、省線荻窪おぎくぼ駅の北口に下車すると、そこから二十分くらいで、あのひとの大戦後の新しいお住居すまいに行き着けるらしいという事は、直治から前にそれとなく聞いていたのである。

こがらしの強く吹いている日だった。荻窪駅に降りた頃ころには、もうあたりが薄暗く、私は往来のひとをつかまえては、あのひとのところ番地を告げて、その方角を教えてもらって、一時間ちかく暗い郊外の路地をうろついて、あまり心細くて、涙が出て、そのうちに砂利道じやりみちの石につまずいて下駄の鼻緒がぷつんと切れて、どうしようかと立ちすくんで、ふと右手の二軒長屋のうちの一軒の家の表札が、夜目にも白くぼんやり浮んで、それに上原と書かれているような気がして、片足は足袋はだしのまま、その家の玄関に走り寄って、なおよく表札を見ると、たしかに上原二郎としたためられていたが、家の中は暗かった。どうしようか、とまた瞬時立ちすくみ、それから、身を投げる気持で、玄関の格子戸こうしどに倒れかかるようにひたと寄り添い、

「ごめん下さいまし」

と言い、両手の指先で格子を撫なでながら、

「上原さん」

と小声で囁いてみた。

返事は、有った。しかし、それは、女のひとの声であった。

玄関の戸が内からあいて、細おもての古風な匂いのする、私より三つ四つ年上のような女のひとが、玄関の暗闇くらやみの中でちらと笑い、

「どちらさまでしょうか」

とたずねるその言葉の調子には、なんの悪意も警戒も無かった。

「いいえ、あのう」

けれども私は、自分の名を言いそびれてしまった。このひとにだけは、私の恋も、奇妙にうしろめたく思われた。おどおどと、ほとんど卑屈に、

「先生は？ いらっしやいませんか？」

「はあ」

と答えて、気の毒そうに私の顔を見て、

「でも、行く先は、たいてい、……」

「遠くへ？」

「いいえ」

と、可笑しおかしように片手をお口に当てられて、

「荻窪ですの。駅の前の、白石しろいしというおでんやさんへおいでになれば、たいてい、行く先がおわかりかと思えます」

私は飛び立つ思いで、

「あ、そうですか」

「あら、おはきものが」

すすめられて私は、玄関の内へはいり、式台に坐すわらせてもらい、奥さまから、軽便鼻緒とでもいうのかしら、鼻緒の切れた時に手軽に繕うことの出来る革の仕掛紐しかけひもをいただいて、下駄を直して、そのあいだに奥さまは、蠟燭ろうそくをともして玄関に持つて来て下さったりしながら、

「あいにく、電球が二つとも切れてしまいました、このごろの電球は馬鹿高い上に切れ易やすくていきませんわね、主人がいますと買ってもらえるんですけど、ゆうべも、おとこの晩も帰ってまいりませんので、私どもは、これで三晩、無一文の早寝ですよ」

などと、しんからのんきそうに笑っておっしゃる。奥さまのうしろには、十二、三歳の

眼の大きな、めつたに人になつかないような感じのほっそりした女のお子さんが立っている。

敵。私はそう思わないけれども、しかし、この奥さまとお子さんは、いつかは私を敵と
 思つて憎む事があるに違いないのだ。それを考えたら、私の恋も、一時にきめ果てたよ
 うな気持になつて、下駄の鼻緒をすげかえ、立つてはたはたと手を打ち合せて両手のよごれ
 を払い落しながら、わびしさが猛然と身のまわりに押し寄せて来る気配に堪えかね、お座
 敷に駈^かけ上つて、まつくら闇の中で奥さまのお手を掴^{つか}んで泣こうかしらと、ぐらぐら烈^{はげ}し
 く動揺したけれども、ふと、その後の自分のしらじらしい何とも形のつかぬ味気無い姿を
 考え、いやになり、

「ありがとうございます」

と、ばか町^{ていねい}嚙^{ねい}なお辞儀をして、外へ出て、こがらしに吹かれ、戦鬪、開始、恋する、
 すき、こがれる、本当に恋する、本当にすき、本当にこがれる、恋しいのだから仕様が
 無い、すきななのだから仕様が無い、こがれているのだから仕様が無い、あの奥さまはたし
 かに珍らしくいいお方、あのお嬢^{きらい}さんも綺麗だ、けれども私は、神の審判の台に立たさ
 れたつて、少しも自分をやましいとは思わぬ、人間は、恋と革命のために生れて来たのだ、

神も罰し給う筈たまはずが無い、私はみじんも悪くない、本当にすきなだから大威張り、あのひとに一目お逢いするまで、二晩でも三晩でも野宿しても、必ず。

駅前の白石というおでんやは、すぐに見つかった。けれども、あのひとはいらっしやらない。

「阿佐ヶ谷ですよ、きつと。阿佐ヶ谷駅の北口をまっすぐにいらして、そうですね、一丁半かな？ 金物屋さんがありますからね、そこから右へは行って、半丁かな？ 柳やという小料理屋がありますからね、先生、このごろは柳やのおステさんと大あつあつで、いりびたりだ、かなわねえ」

駅へ行き、切符を買い、東京行き和省線に乗り、阿佐ヶ谷で降りて、北口、約一丁半、金物屋さんのところから右へ曲つて半丁、柳やは、ひっそりしていた。

「たつたいまお帰りになりましたが、大勢さんで、これから西荻にしおぎのチドリのおばさんのところへ行つて夜明しで飲むんだ、とかおっしゃっていましたよ」

私よりも年が若くて、落ちついて、上品で、親切そうな、これがあの、おステさんとかいうあのひとと大あつあつの人なのかしら。

「チドリ？ 西荻のどのへん？」

心細くて、涙が出そうになった。自分がいま、気が狂っているのではないかしら、とふと思った。

「よく存じませんのですけどね、何でも西荻の駅を降りて、南口の、左にはいったところだとか、とにかく、交番でお聞きになったら、わかるんじゃないでしょうか。何せ、一軒ではおさまらないひとで、チドリに行く前にまたどこかにひっかかっているかも知れませんですよ」

「チドリへ行ってみます。さようなら」

また、逆もどり。阿佐ヶ谷から省線で立川行きに乗り、荻窪、西荻窪、駅の南口で降りて、こがらしに吹かれてうろつき、交番を見つけて、チドリの方角をたずねて、それから教えられたとおりの夜道を走るようにして行って、チドリの青い燈籠とうろうを見つけて、ためらわず格子戸をあけた。

土間があつて、それからすぐ六畳間くらいの部屋があつて、たばこの煙で濛々もうもうとして、十人ばかりの人間が、部屋の大きな卓をかこんで、わあつわあつとひどく騒がしいお酒盛りをしていた。私より若いくらいのお嬢さんも三人まじって、たばこを吸い、お酒を飲んでいた。

私は土間に立つて、見渡し、見つけた。そうして、夢見るような気持ちになった。ちがうのだ。六年。まるつきり、もう、違ったひとになっているのだ。

これが、あの、私の虹、M・C、私の生き甲斐の、あのひとであろうか。六年。蓬髪は昔のままだけれども哀れに赤茶けて薄くなっており、顔は黄色くむくんで、眼のふちが赤くただれて、前歯が抜け落ち、絶えず口をもぐもぐさせて、一匹の老猿が背中を丸くして部屋の片隅かたすみに坐っている感じであった。

お嬢さんのひとりが私を見とがめ、目で上原さんに私の来ている事を知らせた。あのひとは坐ったまま細長い首をのばして私のほうを見て、何の表情も無く、顎あごであがれという合図をした。一座は、私に何の関心も無さそうに、わいわいの大騒ぎをつづけ、それでも少しずつ席を詰めて、上原さんのすぐ右隣りに私の席をつくってくれた。

私は黙って坐った。上原さんは、私のコップにお酒をなみなみといっぱい注いでくれて、それからご自分のコップにもお酒を注ぎ足して、

「乾杯」

としゃがれた声で低く言った。

二つのコップが、力弱く触れ合って、カチと悲しい音がした。

ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、と誰かが言つて、それに応じてまたひとり、ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、と言ひ、カチンと音高くコップを打ち合せてぐいと飲む。ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、とあちこちから、その出鱈目でたらめみたいな歌が起つて、さかんにコップを打ち合せて乾杯をしている。そんなふざけ切つたりリズムでもつてはずみをつけて、無理にお酒を喉のどに流し込んでいる様子であつた。

「じゃ、失敬」

と言つて、よろめきながら帰るひとがあるかと思うと、また、新客がのっそりはいつて来て、上原さんにちよつと会釈しただけで、一座に割り込む。

「上原さん、あそののね、上原さん、あそののね、あああ、というところですがね、あれは、どんな工合ぐあいに言つたらいいんですか？ あ、あ、あ、ですか？ ああ、あ、ですか？」

と乗り出してたずねているひとは、たしかに私もその舞台顔に見覚えのある新劇俳優の藤田である。

「ああ、あ、だ。ああ、あ、チドリの酒は、安くねえ、といったような塩梅あんばいだね」

と上原さん。

「お金の事ばかり」

とお嬢さん。

「二羽の雀すずめは一銭、とは、ありや高いんですか？ 安いんですか？」

と若い紳士。

「一厘も残りなく償わずば、という言葉もあるし、あるもの或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タラントなんて、ひどくややこしいたとえばなし譬話もあるし、キリストも勘定はなかなかこまかいんだ」

と別の紳士。

「それに、あいつあ酒飲みだったよ。妙にバイブルには酒の譬話が多いと思っていたら、果せるかなだ、み視よ、酒を好む人、と非難されたらバイブルに録しるされてある。酒を飲む人でなくて、酒を好む人というんだから、相当な飲み手だったに違いねえのさ。まず、一升飲みかね」

ともうひとりの紳士。

「よせ、よせ。ああ、あ、なんじ汝らは道德におびえて、イエスをダシに使わんとす。チエちや

ん、飲む。ギロチン、ギロチン、シウルシウルシュ」

と上原さん、一ばん若くて美しいお嬢さんと、カチンと強くコップを打ち合せて、ぐつと飲んで、お酒が口角からしたり落ちて、顎が濡れて、それをやけくそみたいに乱暴に掌で拭つて、それから大きいくしやみを五つも六つも続けてなされた。

私はそつと立つて、お隣りの部屋へ行き、病身らしく蒼白く痩せたおかみさんに、お手洗いをたずね、また帰りにその部屋をとおると、さっきの一ばんきれいで若いチエちゃんとかいうお嬢さんが、私を待っていたような恰好で立っていて、

「おなか、おすきになりませんか？」

と親しそうに笑いながら、尋ねた。

「ええ、でも、私、パンを持ってまいりましたから」

「何もごさいませんか？」

と病身らしいおかみさんは、だるそうに横坐りに坐つて長火鉢に寄りかかつたままで言う。

「この部屋で、お食事をなさいます。あんな呑んべえさんたちの相手をしていたら、一晩中なにも食べられやしません。お坐りなさい、ここへ。チエ子さんも一緒に」

「おうい、キヌちゃん、お酒が無い」

とお隣りで紳士が叫ぶ。

「はい、はい」

と返辞して、そのキヌちゃんという三十歳前後の粋な縞いぎしまの着物を着た女中さんが、お銚ち子ようしをお盆に十本ばかり載せて、お勝手からあらわれる。

「ちよつと」

とおかみさんは呼びとめて、

「ここへも二本」

と笑いながら言い、

「それからね、キヌちゃん、すまないけど、裏のスズヤさんへ行つて、うどんを二つ大いそぎでね」

私とチエちゃんは長火鉢そばの傍そばにならんで坐つて、手をあぶっていた。

「お蒲団ふとんをおあてなさい。寒くなりましたね。お飲みになりませんか」

おかみさんは、ご自分のお茶のお茶碗ちやわんにお銚子のお酒をついで、それから別の二つのお茶碗にもお酒を注いだ。

そうして私たち三人は黙って飲んだ。

「みなさん、お強いのね」

とおかみさんは、なぜだか、しんみりした口調で言った。

がらがらと表の戸のあく音が聞えて、

「先生、持ってまいりました」

という若い男の声がして、

「何せ、うちの社長つたら、がっちりしていますからね、二万円と言ってねばったのですが、やっと一万円」

「小切手か？」

と上原さんのしやがれた声。

「いいえ、現なまですが。すみません」

「まあ、いいや、受取りを書こう」

ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、の乾杯の歌が、そのあいだも一座に於いて絶える事無くつづいている。

「直^{なお}さんは？」

と、おかみさんは真面目な顔をしてチエちゃんに尋ねる。私は、どきりとした。

「知らないわ。直さんの番人じゃあるまいし」

と、チエちゃんは、うろたえて、顔を可憐に赤くなさった。

「この頃、何か上原さんと、まずい事でもあったんじゃないの？　いつも、必ず、一緒だったのに」

とおかみさんは、落ちついて言う。

「ダンスのほうが、すきになったんですって。ダンスアの恋人でも出来たんでしようよ」

「直さんたら、まあ、お酒の上にまた女だから、始末が悪いね」

「先生のお仕込みですもの」

「でも、直さんのほうが、たちが悪いよ。あんなお坊ちゃんくずれば、……」

「あの」

私は微笑んで口をはさんだ。黙っていては、かえってこのお二人に失礼なことになりそうだと思っただ。

「私、直治の姉なんですの」

おかみさんは驚いたらしく、私の顔を見直したが、チエちゃんは平気で、

「お顔がよく似ていらつしやいますもの。あの土間の暗いところにお立ちになつていたのを見て、私、はつと思つたわ。直さんかと」

「左様でございますか」

とおかみさんは語調を改めて、

「こんなむさくるしいところへ、よくまあ。それで？ あのと、上原さんとは、前から？」

「ええ、六年前にお逢いして、……」

言い^{よじ}澀み、うつむき、涙が出そうになつた。

「お待ちどおさま」

女中さんが、おうどんを持つて来た。

「召し上れ。熱いうちに」

とおかみさんはすすめる。

「いただきます」

おうどんの湯気^わに顔をつつ込み、するするとおうどんを^{すす}啜つて、私は、いまこそ生きて
いる事の^わ侘びしさの、極限を味わつてい^るような気がした。

ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、と

低く口ずさみながら、上原さんが私たちの部屋にはいつて来て、私の傍にどかりとあぐらをかき、無言でおかみさんに大きい封筒を手渡した。

「これだけで、あとをごまかしちやだめですよ」

おかみさんは、封筒の中を見もせず、それを長火鉢の引出しに仕舞い込んで笑いながら言う。

「持つて来るよ。あとの支払いは、来年だ」

「あんな事を」

一万円。それだけあれば、電球がいくつ買えるだろう。私だって、それだけあれば、一年らくに暮せるのだ。

ああ、何かこの人たちは、間違っている。しかし、この人たちも、私の恋の場合と同じ様に、こうでもしなければ、生きて行かないのかも知れない。人はこの世の中に生れて来た以上は、どうしても生き切らなければいけないものならば、この人たちのこの生き切るための姿も、憎むべきではないかも知れぬ。生きている事。生きている事。ああ、それは、何というやりきれない息もたえだえの大事業であろうか。

「とにかくね」

と隣室の紳士がおつしやる。

「これから東京で生活して行くにはだね、コンチワア、という軽薄きわまる挨拶あいさつが平気で出来るようであれば、とても駄目だめだね。いまのわれらに、重厚だの、誠実だの、そんな美德を要求するのは、首くくりの足を引っぱるようなものだ。重厚？ 誠実？ ペツ、プツだ。生きて行けやしねえじゃないか。もしもだね、コンチワアを軽く言えなかったら、あとは、道が三つしか無いんだ、一つは帰農だ、一つは自殺、もう一つは女のヒモさ」

「その一つも出来やしねえかわいそう可哀かわいな野郎には、せめて最後の唯一の手段」

と別な紳士が、

「上原二郎にたかつて、痛飲」

ギロチン、ギロチン、シウルシウルシユ、ギロチン、ギロチン、シウルシウルシユ。

「泊るところが、ねえんだろ」

と、上原さんは、低い声でひとりごとのおつしやった。

「私？」

私は自身に鎌首かまくびをもたげた蛇へびを意識した。敵意。それにちかい感情で、私は自分のからだを固くしたのである。

「ざご寝が出来るか。寒いぜ」

上原さんは、私の怒りに頓とんちやく着つぶやなく眩くらく。

「無理でしょう」

とおかみさんは、口をはさみ、

「お可哀そうよ」

ちえつ、と上原さんは舌打ちして、

「そんなら、こんなところへ来なければいいんだ」

私は黙っていた。このひとは、たしかに、私のあの手紙を読んだ。そうして、誰よりも私を愛している、と、私はそのひとの言葉の雰囲気ふんいきから素早く察した。

「仕様がねえな。福井さんのところへでも、たのんでみようかな。チエちゃん、連れて行ってくれないか。いや、女だけだと、途中が危険か。やっかいだな。かあさん、このひとはきものを、こっそりお勝手のほうに廻まわして置いてくれ。僕が送りとどけて来るから」

外は深夜の気配だった。風はいくぶんおさまり、空にいっぱい星が光っていた。私たちは、ならんで歩きながら、

「私、ざご寝でも何でも、出来ますのに」

上原さんは、眠そうな声で、

「うん」

とだけ言った。

「二人つきりに、なりたかったのでしょうか。そうですね」

私がそう言つて笑つたら、上原さんは、

「これだから、いやさ」

と口をまげて、にが笑いなさつた。私は自分がとても可愛がられている事を、身にしみ意識した。

「ずいぶん、お酒を召し上りますのね。毎晩ですか？」

「そう、毎日。朝からだ」

「おいしいの？ お酒が」

「まずいよ」

そう言う上原さんの声に、私はなぜだか、ぞつとした。

「お仕事は？」

「駄目です。何を書いても、ばかばかしくつて、そうして、ただもう、悲しくつて仕様が

無いんだ。いのちの黄昏たそがれ。芸術の黄昏。人類の黄昏。それも、キザだね」

「ユトリロ」

私は、ほとんど無意識にそれを言った。

「ああ、ユトリロ。まだ生きていやがるらしいね。アルコールの亡者もうじゃ。死骸しがいだね。最近十年間のあいつの絵は、へんに俗っぽくて、みな駄目」

「ユトリロだけじゃないんでしょう？ 他のマイスターたちも全部、……」

「そう、衰弱。しかし、新しい芽も、芽のまままで衰弱しているのです。霜。フロスト。世界中に時ならぬ霜が降りたみたいなのです」

上原さんは私の肩を軽く抱いて、私のからだは上原さんの二重廻しの袖そでで包まれたような形になったが、私は拒否せず、かえってぴったり寄りそってゆっくり歩いた。

路傍の樹木の枝。葉の一枚も附ついていない枝、ほそく鋭く夜空を突き刺していて、木の枝って、美しいものですねえ」

と思わずひとりごとのように言ったら、

「うん、花と真黒い枝の調和が」

と少しうろたえたようにしておっしゃった。

「いいえ、私、花も葉も芽も、何もついていない、こんな枝がすき。それでも、ちゃんと生きていくのでしよう。枯枝とちがいますわ」

「自然だけは、衰弱せずか」

そう言つて、また烈はげしくしゃみをいくつもいくつも続けてなされた。

「お風邪じゃございませんの？」

「いや、いや、さにあらず。実はね、これは僕の奇癖きへつでね、お酒の酔よいが飽和点に達すると、たちまちこんな工合ぐあいのくしゃみが出るんです。酔いのバロメーターみたいなものだね」

「恋は？」

「え？」

「どなたかございますの？ 飽和点くらいにすすんでいるお方が」

「なんだ、ひやかしちやいけない。女は、みな同じさ。ややこしくていけない。ギロチン、ギロチン、シウルシウルシュ、実は、ひとり、いや、半人くらいある」

「私の手紙、ごらんになつて？」

「見た」

「ご返事は？」

「僕は貴族は、きらいなんだ。どうしても、どこかに、鼻持ちならない傲慢ごうまんなどところがある。あなたの弟の直さんも、貴族としては、大出来の男なんだが、時々、ふっと、とても付き合い切れない小生意気なところを見せる。僕は田舎の百姓の息子でね、こんな小川の傍をとおると必ず、子供のころ、故郷の小川で鮒ふなを釣った事や、めだかを掬すくった事を思い出してたまらない気持ちになる」

暗闇くらやみの底で幽かすかに音立てて流れている小川に、沿った路みちを私たちは歩いていった。

「けれども、君たち貴族は、そんな僕たちの感傷を絶対に理解できないばかりか、軽蔑けいべつしている。」

「ツルゲーネフは？」

「あいつは貴族だ。だからいやなんだ」

「でも、獵人日記、……」

「うん、あれだけは、ちよつとうまいね」

「あれは、農村生活の感傷、……」

「あの野郎は田舎貴族、というところで妥協しようか」

「私もいまでは田舎者ですわ。畑を作っていますのよ。田舎の貧乏人」

「今でも、僕をすきなのかい」

乱暴な口調であった。

「僕の赤ちゃん欲しいのかい」

私は答えなかった。

岩が落ちて来るような勢いでそのひとの顔が近づき、遮しや二無むに二私にはキスされた。性せい慾よくのにおいのするキスだった。私はそれを受けながら、涙を流した。屈辱の、くやし涙に似ているにがい涙であった。涙はいくらでも眼からあふれ出て、流れた。

また、二人ならんで歩きながら、

「しくじった。惚ほれちやった」

とそのひとは言つて、笑つた。

けれども、私は笑う事が出来なかった。眉まゆをひそめて、口をすぼめた。

仕方が無い。

言葉で言いあらわすなら、そんな感じのものだった。私は自分が下駄げたを引きずつてすきんだ歩き方をしているのに気がついた。

「しくじった」

とその男は、また言った。

「行くところまで行くか」

「キザですわ」

「この野郎」

上原さんは私の肩をとんとこぶしで叩たたいて、また大きいくしゃみをなさった。

福井さんとかいうお方のお宅では、みなさんがもうおやすみになっていらっしやる様子であつた。

「電報、電報。福井さん、電報ですよ」

と大声で言つて、上原さんは玄関の戸をたたいた。

「上原か？」

と家の中で男のひとの声がした。

「そのとおり。プリンスとプリンセスと一夜の宿をたのみに来たのだ。どうもこう寒いと、くしゃみばかり出て、せつかくの恋の道みちゆき行もコメデイになつてしまふ」

玄関の戸が内からひらかれた。もうかなりの、五十歳を越したくらい、頭の禿はげた小柄がらなおじさんが、派手なパジャマを着て、へんな、はにかむような笑顔で私たちを迎えた。

「たのむ」

と上原さんは一こと言つて、マントも脱がずにさつきと家の中へはいつて、

「アトリエは、寒くていけねえ。二階を借りるぜ。おいで」

私の手をとつて、廊下をとおり突き当りの階段をのぼつて、暗いお座敷にはいり、部屋の隅すみのスイッチをパチとひねつた。

「お料理屋のお部屋みたいね」

「うん、成金趣味さ。でも、あんなへボ画えかきにはもつたいない。悪運りさいが強くて罹災りさいも、しやがらねえ。利用せざるべからずさ。さあ、寝よう、寝よう」

ご自分のお家みために、勝手に押入れをあけてお蒲団ふとんを出して敷いて、

「ここへ寝ねたま給え。僕は帰る。あしたの朝、迎えに来ます。便所は、階段を降りて、すぐ右だ」

だだだだと階段からころげ落ちるように騒々しく下へ降りて行つて、それつきり、しんとなつた。

私はまたスイッチをひねつて、電燈を消し、お父上の外国土産の生地で作つたピロートのコートを脱ぎ、帯だけほだいて着物のままでお床へはいつた。疲れている上に、お酒を

飲んだせいか、からだがだるく、すぐにうとうとまどろんだ。

いつのまにか、あのひとが私の傍に寝ていらして、……私は一時間ちかく、必死の無言の抵抗をした。

ふと可哀そうになって、放棄した。

「こうしなければ、ご安心が出来ないのでしょう？」

「まあ、そんなところだ」

「あなた、おからだを悪くしていらつしやるんじゃない？ 咯血かっけつなさったでしょう」

「どうしてわかるの？ 実はこないだ、かなりひどいのをやったんだけど、誰にも知らせていないんだ」

「お母さまのお亡くなりになる前と、おんなじ匂においがするんですもの」

「死ぬ気で飲んでるんだ。生きてるのが、悲しくて仕様が無いんだよ。わびしさだの、淋しさだの、そんなゆとりのあるものでなくて、悲しいんだ。陰かげ気きくさい、嘆なげきの溜ため息いきが四方の壁から聞えている時、自分たちだけの幸福なんてある筈はずは無いじゃないか。自分の幸福も光栄も、生きているうちには決して無いとわかった時、ひとは、どんな気持になるものかね。努力。そんなものは、ただ、飢餓の野獣の餌食えじきになるだけだ。みじめな人が

多すぎるよ。キザかね」

「いいえ」

「恋だけだね。おめえの手紙のお説のとおりだよ」

「そう」

私のその恋は、消えていた。

夜が明けた。

部屋が薄明るくなつて、私は、傍で眠っているそのひとの寝顔をつくづく眺めた。ちかく死ぬひとのような顔をしていた。疲れはてているお顔だった。

犠牲者の顔。 貴い犠牲者。

私のひと。私の虹にじ。マイ、チャイルド。にくいひと。ずるいひと。

この世にまたと無いくらいに、とても、とても美しい顔のように思われ、恋があらたによみがえつて来たようであげ胸がときめき、そのひとの髪を撫なでながら、私のほうからキスをした。

かなしい、かなしい恋の成就じょうじゆ。

上原さんは、眼をつぶりながら私をお抱きになつて、

「ひがんでいたのさ。僕は百姓の子だから
もうこのひとから離れまい。」

「私、いま幸福よ。四方の壁から嘆きの声が聞えて来ても、私のいまの幸福感は、飽和点よ。くしゃみが出るくらい幸福だわ」

上原さんは、ふふ、とお笑いになって、

「でも、もう、おそいなあ。黄昏だ」

「朝ですわ」

弟の直治は、その朝に自殺していた。

七

直治の遺書。

姉さん。

だめだ。さきに行くよ。

僕は自分がなぜ生きていなければならないのか、それが全然わからないのです。

生きていたい人だけは、生きるがよい。

人間には生きる権利があると同様に、死ぬる権利もある筈です。

僕のこんな考え方は、少しも新しいものでも何でも無く、こんな当り前の、それこそプリミチヴな事を、ひとはへんにこわがって、あからさまに口に出して言わないだけなんです。

生きて行きたいひとは、どんな事をして、必ず強く生き抜くべきであり、それは見事で、人間の栄冠とでもいうものも、きつとその辺にあるのでしようが、しかし、死ぬことだつて、罪では無いと思うんです。

僕は、僕という草は、この世の空気と陽ひの中に、生きにくいんです。生きて行くのに、どこか一つ欠けているんです。足りないんです。いままで、生きて来たのも、これでも、精一ぱいだったのです。

僕は高等学校へはいつて、僕の育つて来た階級と全くちがう階級に育つて来た強くたくましい草の友人と、はじめて付き合っい、その勢いに押され、負けまいとして、麻薬を用い、半狂乱になって抵抗しました。それから兵隊になつて、やはりそこでも、生きる最後の手

段として阿片アヘンを用いました。姉さんには僕のこんな気持、わからねえだろうな。

僕は下品になりたかつた。強く、いや強暴になりたかつた。そうして、それが、所謂いわゆる民衆の友になり得る唯一ゆいいつの道だと思つたのです。お酒くらいでは、とても駄目だつたんです。いつも、くらくら目まいをしていなければならなかつたんです。そのためには、麻薬以外になかつたのです。僕は、家を忘れなければならぬ。父の血に反抗しなければならぬ。母の優しさを、拒否しなければならぬ。姉に冷たくしなければならぬ。そうでなければ、あの民衆の部屋にはいる入場券が得られないと思つていたんです。

僕は下品になりました。下品な言葉づかいをするようになりました。けれども、それは半分は、いや、六十パーセントは、哀れな附け焼刃でした。へたな小細工でした。民衆にとつて、僕はやはり、キザつたらしく乙おっにすました氣づまりの男でした。彼等は僕と、しんから打ち解けて遊んでくれはしないのです。しかし、また、いまさら捨てたサロンに帰ることも出来ません。いまでは僕の下品は、たとい六十パーセントは人工の附け焼刃でも、しかし、あとの四十パーセントは、ほんものの下品になつてゐるのです。僕はあの、所謂上流サロンの鼻持ちならぬお上品さには、ゲロが出そうで、一刻も我慢できなくなつていますし、また、あのおえらがたとか、お歴々とか称せられてゐる人たちも、僕のお行儀

の悪さに呆あきれてすぐさま放逐するでしょう。捨てた世界に帰ることも出来ず、民衆からは悪意に満ちたクソでいいねいの傍聴席を与えられているだけなんです。

いつの世でも、僕のような謂いわば生活力が弱くて、欠陥のある草は、思想もクソも無いただおのずから消滅するだけの運命のものなのかも知れませんが、しかし、僕にも、少しは言いぶんがあるのです。とても僕には生きにくい、事情を感じているんです。

人間は、みな、同じものだ。

これは、いったい、思想でしょうか。僕はこの不思議な言葉を発明したひとは、宗教家でも哲学者でも芸術家でも無いように思います。民衆の酒場からわいて出た言葉です。蛆うじがわくように、いつのまにやら、誰が言い出したともなく、もくもく湧わいて出て、全世界を覆おい、世界を気まづいものになりました。

この不思議な言葉は、民主々義とも、またマルキシズムとも、全然無関係のものなのです。それは、かならず、酒場に於おいて醜ぶおしこ男が美男子に向って投げつけた言葉です。ただの、イライラです。嫉妬しつとです。思想でも何でも、ありやしないんです。

けれども、その酒場のやきもちの怒声が、へんに思想めいた顔つきをして民衆のあいだを練り歩き、民主々義ともマルキシズムとも全然、無関係の言葉の筈なのに、いつのまに

やら、その政治思想や経済思想にからみつき、奇妙に下劣なあんばいにしてしまったので
す。メフィストだって、こんな無茶な放言を、思想とすりかえるなんて芸当は、さすがに
良心に恥じて、躊躇したかも知れません。

人間は、みな、同じものだ。

なんという卑屈な言葉であろう。人をいやしめると同時に、みずからをいやしめ、何
のプライドも無く、あらゆる努力を放棄せしめるような言葉。マルキシズムは、働く者の
優位を主張する。同じものだ、などとは言わぬ。民主々義は、個人の尊厳を主張する。同
じものだ、などとは言わぬ。ただ、牛太郎だけがそれを言う。「へへ、いくら気取ったつ
て、同じ人間じゃねえか」

なぜ、同じだと言うのか。優れている、と言えないのか。奴隷根性の復讐。

けれども、この言葉は、実に猥せつで、不気味で、ひとは互いにおびえ、あらゆる思想
が姦せられ、努力は嘲笑せられ、幸福は否定せられ、美貌はけがされ、栄光は引きず
りおろされ、所謂「世紀の不安」は、この不思議な一語からはっしていると僕は思ってい
るんです。

イヤな言葉だと思いながら、僕もやはりこの言葉に脅迫せられ、おびえて震えて、何を

仕様としてもてれくさく、絶えず不安で、ドキドキして身の置きどころが無く、いつそ酒や麻薬の目まいに依よつて、つかのまの落ちつきを得たくて、そうして、めちやくちやになりました。

弱いのでしょうか。どこか一つ重大な欠陥のある草なのでしょう。また、何かとそんな小理窟りくつを並べたつて、なあに、もともと遊びが好きなのさ、なまけ者の、助平の、身勝手な快樂児なのさ、とれいの牛太郎がせせら笑つて言うかも知れません。そうして、僕はそう言われても、いままでは、ただてれて、あいまいに首肯していましたが、しかし、僕も死ぬに当つて、一言、抗議めいた事を言つて置きたい。

姉さん。

信じて下さい。

僕は、遊んでも少しも楽しくなかったのです。快樂のイムポテンツなのかも知れません。僕はただ、貴族という自身の影法師から離れたくて、狂い、遊び、荒すさんでいました。

姉さん。

いったい、僕たちに罪があるのでしょうか。貴族に生れたのは、僕たちの罪でしょうか。ただ、その家に生れただけに、僕たちは、永遠に、たとえばユダの身内の者みたいに、恐

縮し、謝罪し、はにかんで生きていなければならない。

僕は、もつと早く死ぬべきだった。しかし、たった一つ、ママの愛情。それを思うと、死ねなかつた。人間は、自由に生きる権利を持つていると同時に、いつでも勝手に死ぬる権利も持つているのだけれども、しかし、「母」の生きているあいだは、その死の権利は留保されなければならないと僕は考えているんです。それは同時に、「母」をも殺してしまふ事になるのですから。

いまはもう、僕が死んでも、からだを悪くするほど悲しむひともいないし、いいえ、姉さん、僕は知っています、僕を失つたあなたたちの悲しみほどの程度のものだから、いいえ、虚飾の感傷はよしましょう、あなたたちは、僕の死を知つたら、きつとお泣きになるでしょうが、しかし、僕の生きている苦しみと、そうしてそのイヤな生ガイから完全に解放される僕のよろこびを思つてみて下さつたら、あなたたちのその悲しみは、次第に打ち消されて行く事と存じます。

僕の自殺を非難し、あくまでも生き伸びるべきであつた、と僕になんの助力も与えず口先だけで、したり顔に批判するひとは、陛下に菓くだもの物屋をおひらきなさるよう平氣でおすすめ出来るほどの大偉人にちがひございませぬ。

姉さん。

僕は、死んだほうがいいんです。僕には、所謂、生活能力が無いんです。お金の事で、人と争う力が無いんです。僕は、人にたかる事さえ出来ないんです。上原さんと遊んでも、僕のぶんのお勘定は、いつも僕が払って来ました。上原さんは、それを貴族のケチくさいプライドだと言って、とてもいやがっていましたが、しかし、僕は、プライドで支払うのではなくて、上原さんのお仕事で得たお金で、僕がつまらなく飲み食いして、女を抱くなど、おそろしくて、とても出来ないのです。上原さんのお仕事を尊敬しているから、と簡単に言い切ってしまうても、ウソで、僕にも本当は、はっきりわかっているから、と簡だ、ひとのごちそうになるのが、そろそろしいんです。殊ことにも、そのひとご自身の腕一本で得たお金で、ごちそうになるのは、つらくて、心苦しくて、たまらないんです。

そうしてただもう、自分の家からお金や品物を持ち出して、ママやあなたを悲しませ、僕自身も、少しも楽しくなく、出版業など計画したのも、ただ、てれかくしのお体裁で、実はちつとも本気で無かったのです。本気でやってみたところで、ひとのごちそうにさえないような男が、金もうけなんて、とてもとても出来やしないのは、いくら僕が愚かでも、それくらいの事には気附いています。

姉さん。

僕たちは、貧乏になつてしまいました。生きて在るうちは、ひとにごちそうしたいと思つていたのに、もう、ひとのごちそうにならなければ生きて行けなくなりしました。

姉さん。

この上、僕は、なぜ生きていなければならねえのかね？　もう、だめなんだ。僕は、死にます。らくに死ねる薬があるんです。兵隊の時に、手にいれて置いたのです。

姉さんは美しく、（僕は美しい母と姉を誇りにしていました）そうして、賢明だから、僕は姉さんの事に就ついては、なんにも心配していません。心配などする資格さえ僕には有りません。どろぼうが被害者の身の上を思いやるみたいなもので、赤面するばかりです。きつと姉さんは、結婚なさつて、子供が出来て、夫にたよつて生き抜いて行くのではないかと僕は、思っているんです。

姉さん。

僕に、一つ、秘密があるんです。

永いこと、秘めに秘めて、戦地にいても、そのひとの事を思いつめて、そのひとの夢を見て、目がさめて、泣きべそをかいた事も幾度あつたか知れませんが。

そのひとの名は、とても誰にも、口がくさっても言われたいんです。僕は、いま死ぬのだから、せめて、姉さんにだけでも、はつきり言つて置こうか、と思いましたが、やつぱり、どうにもおそろしくて、その名を言うことが出来ません。

でも、僕は、その秘密を、絶対秘密のまま、とうとうこの世で誰にも打ち明けず、胸の奥に蔵して死んだならば、僕のからだに火葬にされても、胸の裏だけが生臭く焼け残るような気がして、不安でたまらないので、姉さんにだけ、遠まわしに、ぼんやり、フィクションみたいにして教えて置きます。フィクション、といっても、しかし、姉さんは、きつとすぐその相手のひとは誰だか、お気付きになる筈です。フィクションというよりは、ただ、仮名を用いる程度のごまかしなのですから。

姉さんは、ご存じかな？

姉さんはそのひとをご存じの筈ですが、しかし、おそらく、逢つた事は無いでしょう。そのひとは、姉さんよりも、少し年上です。ひとえまがた一重瞼で、めじり目尻が吊り上つて、髪にパーマネントなどかけた事が無く、いつも強く、ひつつめ髪、とでもいうのかしら、そんな地味な髪形で、そうして、とても貧しい服装で、けれどもだらしなかっこうい恰好ではなくて、いつもきちんと着付けて、清潔です。そのひとは、戦後あたらしいタツチの画をつぎつぎと発

表して急に有名になった或る中年の洋画家の奥さんで、その洋画家の行いは、たいへん乱暴ですさんだものなのに、その奥さんは平気を装って、いつも優しく微笑ほほえんで暮しているのです。

僕は立ち上って、

「それでは、おいとま致します」

そのひとも立ち上って、何の警戒も無く、僕の傍に歩み寄って、僕の顔を見上げ、

「なぜ？」

と普通の音声で言い、本当に不審のように少し小首をかしげて、しばらく僕の眼を見つづけていました。そうして、そのひとの眼に、何の邪心も虚飾も無く、僕は女のひとと視線が合えば、うろたえて視線をはずしてしまうたちなのですが、その時だけは、みじんも含羞はにかみを感じないで、二人の顔が一尺くらいの間隔で、六十秒もそれ以上もとてもいい気持で、そのひとの瞳ひとみを見つめて、それからつい微笑んでしまつて、

「でも、……」

「すぐ帰りますわよ」

と、やはり、まじめな顔をしています。

正直、とは、こんな感じの表情を言うのではないかしら、とふと思いました。それは修身教科書くさい、いかめしい徳ではなくて、正直という言葉で表現せられた本来の徳は、こんな可愛らしいものではなかったのかしら、と考えました。

「またまいります」

「そう」

はじめから終りまで、すべてみな何でもない会話です。僕が、或る夏の日の午後、その洋画家のアパートをたずねて行って、洋画家は不在で、けれどもすぐ帰る筈ですから、おあがりになってお待ちになったら？ という奥さんの言葉に従って、部屋にあがって、三十分ばかり雑誌など読んで、帰って来そうも無かったから、立ち上って、おいとました、それだけの事だったのですが、僕は、その日のその時の、そのひとの瞳に、くるしい恋をしちゃったのです。

高貴、とでも言ったらいいのかしら。僕の周囲の貴族の中には、ママはとにかく、あんな無警戒な「正直」な眼の表情の出来る人は、ひとりもいなかった事だけは断言できます。それから僕は、或る冬の夕方、そのひとのプロファイルに打たれた事があります。やはり、その洋画家のアパートで、洋画家の相手をさせられて、炬燵こたつにはいつて朝から酒を飲み、

洋画家と共に、日本の所謂文化人たちをクソミソに言い合つて笑いころげ、やがて洋画家は倒れて大おおいびき 軒をかいて眠り、僕も横になつてうとうとしていたら、ふわと毛布がかかり、僕は薄目をあけて見たら、東京の冬の夕空は水色に澄んで、奥さんはお嬢さんを抱いてアパートの窓縁に、何事も無さそうにして腰をかけ、奥さんの端正なプロフィールが、水色の遠い夕空をバックにして、あのルネッサンスの頃のプロフィールの画のようにあざやかに輪郭が区切られ浮んで、僕にそつと毛布をかけて下さつた親切は、それは何の色気でも無く、慾よくでも無く、ああ、ヒユウマニテイという言葉はこんな時にこそ使用されて蘇そせい生する言葉なのではなからうか、ひとの当然の侘わびしい思いやりとして、ほとんど無意識みたいになされたもののように、絵とそつくりの静かな気配で、遠くを眺ながめていらつしやつた。

僕は眼をつぶつて、こいしく、こがれて狂うような気持ちになり、瞼まぶたの裏から涙があふれ出て、毛布を頭から引かぶつてしまいました。

姉さん。

僕がその洋画家のところに遊びに行ったのは、それは、さいしよはその洋画家の作品の特異なタッチと、その底に秘められた熱狂的なパッションに、酔わされたせいでありまし

たが、しかし、付き合ひの深くなるにつれて、そのひとの無教養、出鱈目でたらめ、きたならしさに興覚めて、そうして、それと反比例して、そのひとの奥さんの心情の美しさにひかれ、いいえ、正しい愛情のひとがこいしくて、したわしくて、奥さんの姿を一目見たくて、あの洋画家の家へ遊びに行くようになりました。

あの洋画家の作品に、多少でも、芸術の高貴なにおい、とでもいったようなものが現れているとすれば、それは、奥さんの優しい心の反映ではなからうかとさえ、僕はいまでは考えているんです。

その洋画家は、僕はいまこそ、感じたままをはつきり言いますが、ただ大酒飲みで遊び好きの、巧妙な商人なのです。遊ぶ金がほしさに、ただ出鱈目にカンヴァスに絵具をぬたくって、流行の勢いに乗り、もつたい振ぶって高く売っているのです。あのひとの持っているのは、田舎者の凶ずうずう々しき、馬鹿ばかな自信、ずるい商才、それだけなんです。

おそらくあのひとは、他のひとの絵は、外国人の絵でも日本人の絵でも、なんにもわかっていないでしょう。おまけに、自分の画いている絵も、何の事やらご自身わかっていないでしょう。ただ遊興のための金がほしさに、無我夢中で絵具をカンヴァスにぬたくっているだけなんです。

「そうして、さらに驚くべき事は、あのひとはご自身のそんな出鱈目に、何の疑いも、羞しゆう恥ちゆうも、恐怖も、お持ちになつていないらしいという事です。」

「ただもう、お得意なんです。何せ、自分で画いた絵が自分でわからぬというひとなのですから、他人の仕事のよさなどわかる筈が無く、いやもう、けなす事、けなす事。」

「つまり、あのひとのデカダン生活は、口では何のかのと苦しそうな事を言っていますけれども、その実は、馬鹿な田舎者が、かねてあこがれの都に出て、かれ自身にも意外なくらいの成功をしたので有頂天になつて遊びまわっているだけなんです。」

「いつか僕が、」

「友人がみな怠けて遊んでいる時、自分ひとりだけ勉強するのは、てれくさくて、おそろしくて、とてもだめだから、ちつとも遊びたくなくても、自分も仲間入りして遊ぶ」

と言つたら、その中年の洋画家は、

「へえ？ それが貴族氣質かたぎというものかね、いやらしい。僕は、ひとが遊んでいるのを見ると、自分も遊ばなければ、損だ、と思つて大いに遊ぶね」

と答えて平然たるものでしたが、僕はその時、その洋画家を、しんから軽蔑けいべつしました。このひとの放埒ほうらつには苦悩が無い。むしろ、馬鹿遊びを自慢にしている。ほんものの阿呆あほう

の快樂児。

けれども、この洋画家の悪口を、この上さまさまに述べ立てても、姉さんには関係の無い事ですし、また僕もいま死ぬるに当って、やはりあのひととの永いつき合いを思い、なつかしく、もう一度逢^あつて遊びたい衝動をこそ感じますが、憎い気はちつとも無いのですし、あのひとだつて淋しがるの、とてもいいところをたくさん持っているひとなのですから、もう何も言いません。

ただ、僕は姉さんに、僕がそのひとの奥さんにこがれて、うろろうして、つらかったという事だけを知っていたらいいのです。だから、姉さんはそれを知っても、別段、誰かにその事を訴え、弟の生前の思いをとげさせてやるとか何とか、そんなキザなおせっかいなどなさる必要は絶対に無いのですし、姉さんおひとりだけが知って、そうして、こつそり、ああ、そうか、と思つて下さつたらそれでいいんです。なおまた慾を言えば、こんな僕の恥ずかしい告白に依^よつて、せめて姉さんだけでも、僕のこれまでの生命^{いのち}の苦しさを、さらに深くわかつて下さつたら、とても僕は、うれしく思います。

僕はいつか、奥さんと、手を握り合つた夢を見ました。そうして奥さんも、やはりずっと以前から僕を好きだつたのだという事を知り、夢から醒^さめても、僕の手のひらに奥さん

の指のあたたかさが残っていて、僕はもう、これだけで満足して、あきらめなければなるまいと思いました。道徳がおそろしかつたのではなく、僕にはあの半気違いの、いや、ほとんど狂人と言つてもいいあの洋画家が、おそろしくてならないのでした。あきらめようと思ひ、胸の火をほかへ向けようとして、手当り次第、さすがのあの洋画家も或る夜しかめつらをしたくらいひどく、滅茶苦茶めちやくちやにいろんな女と遊び狂いました。何とかして、奥さんの幻から離れ、忘れ、なんでもなくなりました。けれども、だめ。僕は、結局、ひとりの女にしか、恋の出来ないたちの男なんです。僕は、はつきり言えます。僕は、奥さんの他の女友達ほかを、いちどでも、美しいとか、いじらしいとか感じた事が無いんです。

姉さん。

死ぬ前に、たつた一度だけ書かせて下さい。

……スガちゃん。

その奥さんの名前です。

僕がきのう、ちつとも好きでもないダンサア（この女には、本質的な馬鹿なところがあります）それを連れて、山荘へ来たのは、けれども、まさかけさ死のうと思つて、やつて来たのではなかつたのです。いつか、近いうちに必ず死ぬ気でいたのですが、でも、きの

う、女を連れて山荘へ来たのは、女に旅行をせがまれ、僕も東京で遊ぶのに疲れて、この馬鹿な女と二、三日、山荘で休むのもわるくないと考え、姉さんには少し工合ぐあいが悪かったけど、とにかくここへ一緒にやって来てみたら、姉さんは東京のお友達のところへ出掛け、その時ふと、僕は死ぬなら今だ、と思ったのです。

僕は昔から、西片町のあの家の奥の座敷で死にたいと思っていました。街路や原っぱで死んで、弥次馬やじうまたちに死骸しがいをいじくり廻されるのは、何としても、いやだったんです。けれども、西片町のあの家は人手に渡り、いまではやはりこの山荘で死ぬよりほかは無かるうと思っていたのですが、でも、僕の自殺をさいしよに発見するのは姉さんで、そうして姉さんは、その時どんなに驚愕きょうがくし恐怖するだろうと思えば、姉さんと二人きりの夜に自殺するのは気が重くて、とても出来そうも無かったのです。

それが、まあ、何というチャンス。姉さんがいなくて、そのかわり、頗る鈍物すこぶのダンサアが、僕の自殺の発見者になってくれる。

昨夜、ふたりでお酒を飲み、女のひとを二階の洋間に寝かせ、僕ひとりママの亡くなつた下のお座敷に蒲団ふとんをひいて、そうして、このみじめな手記にとりかかりました。

姉さん。

僕には、希望の地盤が無いんです。さようなら。

結局、僕の死は、自然死です。人は、思想だけでは、死ねるものではないんですから。それから、一つ、とてもてれくさいお願いがあります。ママのかたみの麻の着物。あれを姉さんが、直治が来年の夏に着るようにと縫い直して下さい。あの着物を、僕の棺にいらして下さい。僕、着たかったです。

夜が明けて来ました。永いこと苦勞をおかけしました。さようなら。

ゆうべのお酒の酔いは、すっかり醒めています。僕は、素面しらふで死ぬんです。

もういちど、さようなら。

姉さん。

僕は、貴族です。

八

ゆめ。

皆が、私から離れて行く。

直治の死のあと始末をして、それから一箇月間、私は冬の山荘にひとり住んでいた。そうして私は、あのひとに、おそらくこれが最後の手紙を、水のような気持で、書いて差し上げた。

どうやら、あなたも、私をお捨てになったようでございます。いいえ、だんだんお忘れになるらしいうございます。

けれども、私は、幸福なんですの。私の望みどおりに、赤ちゃんが出来たようでございますの。私は、いま、いっさいを失ったような気がしていますけど、でも、おなかの小さい生命が、私の孤独の微笑のたねになっています。

けがらわしい失策などとは、どうしても私には思われません。この世の中に、戦争だの平和だの貿易だの組合だの政治だのがあるのは、なんのためだか、このごろ私にもわかって来ました。あなたは、ご存じないでしょう。だから、いつまでも不幸なのですわ。それはね、教えてあげますわ、女がよい子を生むためです。

私には、はじめからあなたの人格とか責任とかをあてにする気持はありませんでした。

私のひとすじの恋の冒険の成就じようじゆだけが問題でした。そうして、私のその思いが完成せられて、もういまでは私の胸のうちは、森の中の沼のように静かでございます。

私は、勝ったと思つています。

マリヤが、たとい夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあつたら、それは聖母子になるのでございます。

私には、古い道徳を平気で無視して、よい子を得たという満足があるのでございます。

あなたは、その後もやはり、ギロチンギロチンと言つて、紳士やお嬢さんたちとお酒を飲んで、デカダン生活とやらをお続けになつていらつしやるのでしよう。でも、私は、それをやめよ、とは申しませぬ。それもまた、あなたの最後の闘争の形式なのでしようから。お酒をやめて、ご病気をなおして、永生きをなさつて立派なお仕事を、などそんな白々しいおざなりみたいなことは、もう私は言いたくないのでございます。「立派なお仕事」などよりも、いのちを捨てる気で、所謂悪徳生活をしとおす事のほうが、のちの世の人たちからかえつて御礼を言われるようになるかも知れません。

犠牲者。道德の過渡期かときの犠牲者。あなたも、私も、きつとそれなのでございましょう。

革命は、いつたい、どこで行われているのでしよう。すくなくとも、私たちの身のまわ

りに於いては、古い道徳はやっぱりそのまま、みじんも変わらず、私たちの行く手をさえぎっています。海の表面の波は何やら騒いでいても、その底の海水は、革命どころか、みじろぎもせず、狸寝入りで寝そべっているんですもの。

けれども私は、これまでの第一回戦では、古い道徳をわずかながら押しつけ得たと思っています。そうして、こんどは、生れる子と共に、第二回戦、第三回戦をたたかうつもりでいるのです。

こいしいひとの子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます。

あなたが私をお忘れになっても、また、あなたが、お酒でいのちをお無くしになっても、私は私の革命の完成のために、丈夫で生きて行けそうです。

あなたの人格のくだらなさを、私はこないだも或るひとから、さまざま承りましたが、でも、私にこんな強さを与えて下さったのは、あなたです。私の胸に、革命の虹にじをかけて下さったのはあなたです。生きる目標を与えて下さったのは、あなたです。

私はあなたを誇りにしていますし、また、生れる子供にも、あなたを誇りにさせようと思っています。

私生児と、その母。

けれども私たちは、古い道徳とどこまでも争い、太陽のように生きるつもりです。

どうか、あなたも、あなたの闘いをたたかい続けて下さいまし。

革命は、まだ、ちつとも、何も、行われていないんです。もっと、もっと、いくつもの惜しい貴い犠牲が必要のようでございます。

いまの世の中で、一ばん美しいのは犠牲者です。

小さい犠牲者が、もうひとりいました。

上原さん。

私はもうあなたに、何もおたのみする気はございませんが、けれども、その小さい犠牲者のために、一つだけ、おゆるしをお願いしたい事があるのです。

それは、私の生れた子を、たったいちどでよろしゅうございますから、あなたの奥さまに抱かせていただきたいのです。そうして、その時、私にこう言わせていただきます。

「これは、直治が、或る女のひとに内緒に生ませた子ですの」

なぜ、そうするのか、それだけはどなたにも申し上げられません。いいえ、私自身にも、なぜそうさせていたただきたいのか、よくわかっていないのです。でも、私は、どうしても、そうさせていただかなければならないのです。直治というあの小さい犠牲者のために、ど

うしても、そうさせていただけなければならぬのです。

ご不快でしょうか。ご不快でも、しのもんでいただきます。これが捨てられ、忘れかけられた女の唯一ゆいいつの幽かすかないやがらせと思おぼしめ召し、ぜひお聞きいれのほど願います。

M・C　マイ、コメデアン。

昭和二十二年二月七日。

青空文庫情報

底本：「斜陽」新潮文庫、新潮社

1950（昭和25）年11月20日発行

1987（昭和62）年5月25日82刷改版

1994（平成6）年6月5日93刷

初出：「新潮 第四十四卷第七号〜第十号」

1947（昭和22）年7月1日〜1947（昭和22）年10月1日

※底本巻末の渡部芳紀氏による注解は省略しました。

入力：SAME SIDE

校正：細渕紀子

2003年1月23日作成

2015年9月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

斜陽

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>